

# 史跡本願寺境内・

# 平安京左京七条二坊七町跡

2008 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所







史跡本願寺境内・  
平安京左京七条二坊七町跡

2008 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



# 序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの、貴重な文化財も今なお多く地下に埋もれています。財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、これまでに多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた古都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様へ京都の地域の歴史に対し関心を深めていただけるよう努めております。

当研究所では、平成 13 年より個々の発掘調査の概要をまとめた報告書を刊行しており、その成果を公表しています。

このたび、式務部棟新築工事にともなう史跡本願寺境内・平安京跡の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきましてご意見、ご批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際してご協力ならびにご支援たまわりました関係者各位に厚く感謝し、お礼申し上げます。

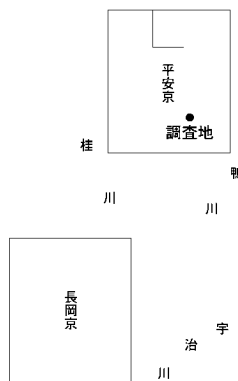
平成 20 年 4 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

# 例 言

- 1 遺 跡 名 史跡本願寺境内・平安京左京七条二坊七町跡
- 2 調査所在地 京都市下京区堀川通花屋町下る本願寺門前町地内
- 3 委 託 者 宗教法人 浄土真宗本願寺派 代表役員 不二川公勝
- 4 調査期間 1次調査：2007年3月5日～2007年6月4日  
2次調査：2008年1月17日～2008年4月23日
- 5 調査面積 1次調査：240 m<sup>2</sup>、2次調査：370 m<sup>2</sup>
- 6 調査担当者 近藤奈央
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「島原」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 調査ごとに通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 調査ごとに通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書執筆 近藤奈央
- 14 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。
- 15 御影堂・御影堂門・仏飯所の各瓦については、京都府教育庁指導部文化財保護課本願寺大師堂保存修理事務所の御厚意により、実測・採拓・写真撮影を行った。記して感謝の意を表する。



(調査地点図)

0 2 4km



# 目 次

I	位置と環境	1
1.	地理的環境	1
2.	歴史的背景	3
3.	周辺の調査	4
II	1次調査	9
1.	調査経過	9
2.	遺 構	11
(1)	基本層序	11
(2)	遺構の概要	11
(3)	江戸時代後期から明治時代の遺構	13
(4)	江戸時代中期の遺構	13
(5)	江戸時代前期の遺構	14
(6)	安土桃山時代から江戸時代前期の遺構	20
(7)	時期不明の遺構	20
3.	遺 物	22
(1)	遺物の概要	22
(2)	土器類	23
(3)	瓦類	28
(4)	石製品	34
(5)	金属製品	35
(6)	木製品	35
(7)	壁土	37
(8)	植物遺体・動物遺体	41
4.	小 結	42
III	2次調査	43
1.	調査経過	43
2.	遺 構	43
(1)	基本層序	43

(2) 遺構の概要	44
(3) 江戸時代後期以降の遺構	47
(4) 江戸時代前期から中期の遺構	49
(5) 江戸時代前期の遺構	49
(6) 安土桃山時代末から江戸時代前期の遺構	57
(7) 室町時代後期から安土桃山時代の遺構	57
(8) 平安時代から鎌倉時代の遺構	58
3. 遺物	59
(1) 遺物の概要	59
(2) 土器類	59
(3) 瓦類	65
(4) 石製品	69
(5) 金属製品	69
4. 小結	70
IV まとめ	72
V 参考資料	76

## 図版目次

図版 1	1次調査 遺構	1 攪乱土除去後全景（南西から）
		2 調査終了後全景（南西から）
図版 2	1次調査 遺構	1 調査区中央付近 火災処理土（南東から）
		2 調査区東 整地層（南から）
		3 調査区中央から東 整地層全景（南西から）
図版 3	1次調査 遺構	1 新池全景（北西から）
		2 新池東岸集石部（南東から）
		3 新池北岸陸部から池底土層断面（南西から）
図版 4	1次調査 遺構	1 新池南 板材集積部（南西から）
		2 新池西 土師器皿出土状況（南西から）

			3 新池西 遺物出土状況（南から）
			4 杭列全景（南西から）
			5 東杭列最南端の杭（南西から）
			6 新池東岸断割（南西から）
図版 5	1次調査	遺物	1 新池堆積土出土土器
			2 火災処理土・旧池埋立土・旧池堆積土出土土器
図版 6	1次調査	遺物	出土瓦
図版 7	1次調査	遺物	石製品・金属製品・木製品
図版 8	2次調査	遺構	1 調査区全景〔江戸時代後期以降〕（北西から）
			2 調査区全景〔江戸時代前期から中期〕（北西から）
図版 9	2次調査	遺構	1 新池全景（南西から）
			2 本願寺京都移転以前の遺構全景（南西から）
図版 10	2次調査	遺構	1 敷石遺構 35（北東から）
			2 建物 1（北西から）
			3 新池埋立土投棄土器群出土状況（南西から）
			4 石垣状遺構 36・石列状遺構 37（南西から）
			5 新池陸部整地層と溝 111 断面（北西から）
			6 溝 85 断面（南から）
図版 11	2次調査	遺物	出土土器
図版 12	2次調査	遺物	出土瓦類・石製品・金属製品
図版 13	参考資料	遺物	軒丸瓦・軒平瓦

## 挿 図 目 次

図 1	調査位置図（1：2,500）	1
図 2	調査区配置図（1：500）	4
図 3	周辺調査位置図（1：5,000）	5
図 4	調査前全景（南西から）	9
図 5	作業風景（南東から）	9
図 6	調査区基本層序（1：40）	10
図 7	江戸時代前期以降遺構平面図（1：100）	12
図 8	井戸 3・4 実測図（1：40）	13
図 9	整地層土層断面図（1：80）	14

図 10	安土桃山時代末から江戸時代前期遺構平面図（1：100）	15
図 11	南北・東西畦土層断面図（1：80）	16
図 12	新池西 遺物出土状況実測図（1：40）	17
図 13	新池 瓦出土状況実測図（1：20）	18
図 14	新池池底 板材出土状況実測図（1：10）	18
図 15	杭列実測図（1：80）	19
図 16	新池下層検出遺構平面図（1：40）	21
図 17	井戸 4 出土土器実測図（1：4）	23
図 18	整地層・新池埋立土出土土器実測図（1：4）	23
図 19	新池堆積土出土土器実測図（1：4）	24
図 20	火災処理土出土土器実測図（1：4）	25
図 21	旧池埋立土出土土器実測図（1：4）	26
図 22	旧池堆積土出土土器実測図（1：4）	27
図 23	弥生時代・平安時代から鎌倉時代の土器実測図（1：4）	27
図 24	軒丸瓦拓影・実測図（1：4）	29
図 25	軒平瓦拓影・実測図（1：4）	30
図 26	道具瓦拓影・実測図（128～130 は 1：6、その他は 1：4）	31
図 27	丸瓦拓影・実測図（1：6）	32
図 28	平瓦拓影・実測図（1：6）	33
図 29	中世の瓦拓影・実測図（147～149 は 1：4、150 は 1：6）	33
図 30	様々な刻印拓影（1：2）	34
図 31	石製品、金属製品拓影・実測図（157・158・162 は 1：4、168 は 1：1、 その他は 1：2）	35
図 32	木製品実測図 1（173 は 1：2、179 は 1：10、その他は 1：4）	36
図 33	木製品実測図 2（1：6）	37
図 34	ケズリカス	37
図 35	壁土	37
図 36	旧・新池出土植物遺体・動物遺体	39
図 37	旧池出土 蓮の種	41
図 38	新池 水草の地下茎出土状況	41
図 39	調査前全景（南西から）	43
図 40	作業風景（北から）	43
図 41	調査区東 断割断面図（1：50）	45
図 42	江戸時代後期以降遺構平面図（1：200）	46
図 43	井戸 21 実測図（1：40）	48

図 44	敷石遺構 35 実測図 (1 : 40)	48
図 45	安土桃山時代末から江戸時代中期遺構平面図 (1 : 200)	50
図 46	石積土坑 42・44 実測図 (1 : 50)	51
図 47	建物 1 実測図 (1 : 50)	52
図 48	整地層 (新池埋立土) 投棄土器群出土状況実測図 (1 : 10)	53
図 49	新池実測図 (1 : 100)	54
図 50	石垣状遺構 36 実測図 (1 : 40)	55
図 51	本願寺京都移転以前の遺構平面図 (1 : 200)	56
図 52	溝 85 断面図 (1 : 40)	57
図 53	溝 102 断面図 (1 : 40)	58
図 54	建物基壇とみられる礫層出土土器実測図 (1 : 8)	60
図 55	石積土坑 42・44、土坑 43 出土土器実測図 (1 : 4)	61
図 56	「粟田口」銘 (図 55-22、約 2 倍)	61
図 57	建物 1 上層整地層出土土器実測図 (1 : 4、62 のみ 1 : 8)	63
図 58	新池埋立土出土土器実測図 (1 : 4)	64
図 59	平安時代から鎌倉時代の土器実測図 (1 : 4)	65
図 60	軒丸瓦、軒平瓦拓影・実測図 (1 : 4)	66
図 61	道具瓦、丸瓦拓影・実測図 (129・130 は 1 : 6、その他は 1 : 4)	67
図 62	中世の瓦拓影・実測図 (1 : 4)	68
図 63	様々な刻印拓影 (1 : 2)	69
図 64	石製品・金属製品拓影・実測図 (1 : 2、151 ~ 153 は 1 : 1)	69
図 65	江戸時代前期から中期の遺構 (1 : 300)	72
図 66	本願寺境内図	73
図 67	主要地点標高値 (1 : 40)	74
図 68	両堂と旧・新池との関係 (1 : 200)	75
図 69	軒丸瓦拓影・実測図 (1 : 6)	77
図 70	軒平瓦、丸瓦拓影・実測図 (1 : 6)	78

## 表 目 次

表 1	本願寺阿弥陀堂・御影堂関連年表	2
表 2	周辺調査一覧表	6
表 3	1 次調査遺構概要表	11
表 4	1 次調査遺物概要表	22

表5	新池堆積土出土板材計測表	38
表6	旧・新池出土植物遺体・動物遺体一覽表	40
表7	2次調査遺構概要表	44
表8	2次調査遺物概要表	60

## 付 表 目 次

附表1	1次調査出土土器類觀察表	79
附表2	1次調査出土瓦類觀察表	83
附表3	1次調査出土石製品・金属製品觀察表	85
附表4	1次調査出土木製品觀察表	85
附表5	2次調査出土土器類觀察表	86
附表6	2次調査出土瓦類觀察表	90
附表7	2次調査出土石製品・金属製品觀察表	91
附表8	参考資料：瓦類觀察表	92

# 史跡本願寺境内・平安京左京七条二坊七町跡

## I 位置と環境

### 1. 地理的環境

本願寺は、京都盆地のほぼ中央に位置する。京都盆地は、北から南へと流下する河川を幾筋も有している沖積平野である。平地部はそれらの河川によってもたらされた土砂によって形成されるため、河川ごとに土壌が異なっており、本願寺周辺には鴨川の氾濫層である礫質砂層が北東から南西にかけて広がっていると考えられている<sup>1)</sup>。また、平安学園考古学クラブの調査（図3-4）で検出した礫層（自然堆積）は旧賀茂川の氾濫によって、運ばれた堆積土ということが確認されている<sup>2)</sup>。本願寺の立地する周辺には、東に堀川、西に大宮川が流れていた。現在は何れの川も暗渠または埋められており、一部を除いて地上からは確認することができなくなっている。

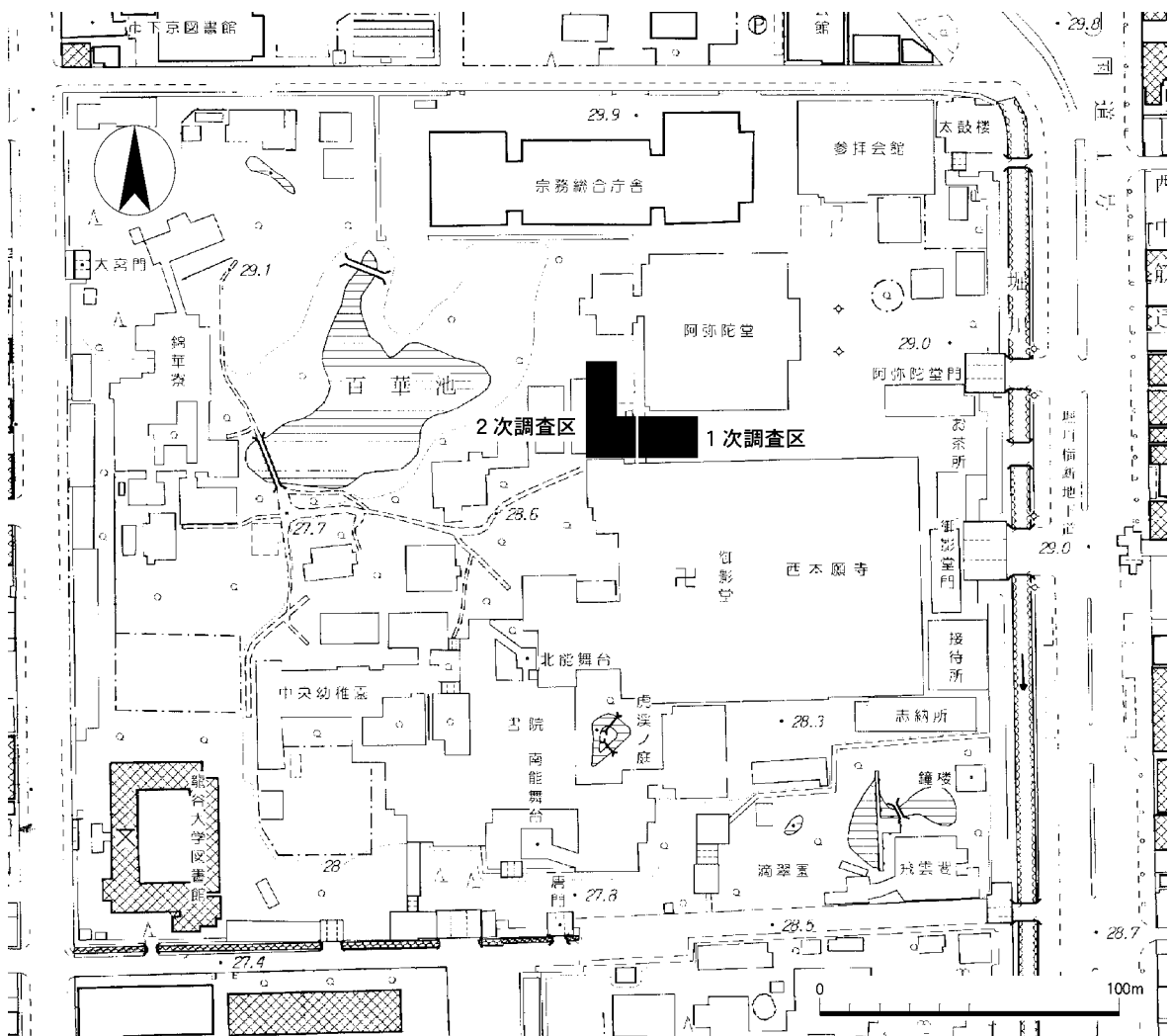


図1 調査位置図（1：2,500）

表1 本願寺阿弥陀堂・御影堂関連年表（『本願寺年表』より抜粋して作成）

西暦	年号	出来事	文献
1590	天正18	豊臣秀吉、本願寺の移転を命ず	言経脚記
1591	天正19	豊臣秀吉、京都七条坊門堀川の地を寄進	文書、通紀
		御影堂移徙	天正十九年京都七条へ御影堂移徙等記
		阿弥陀堂石礎	天正十九年京都七条へ御影堂移徙等記
1592	文禄元	阿弥陀堂上棟	天正十九年京都七条へ御影堂移徙等記
		阿弥陀堂移徙	天正十九年京都七条へ御影堂移徙等記
		御影堂慶讃	通紀
1596	慶長元	子刻大地震、諸堂倒壊	言経脚記
1597	慶長2	御影堂立柱	慶長日記
		御影堂上棟	慶長二年御影堂上棟道具事、慶長日記
		御影堂移徙	言経脚記、慶長日記
1607	慶長12	御影堂修理	通紀、文案
1608	慶長13	御堂修理	文案
		対面所建つ	法流秘録
1611	慶長16	御影堂内陣修理のために宗祖影像を阿弥陀堂へ移す	慶長日記
1617	元和3	本山浴室から出火、両堂・対面所その他焼く	法流秘録、知空書上、通紀
1618	元和4	仮御堂へ宗祖影像移徙	元和四年御堂其他御再興ノ記
		御堂仮屋等建立	法流秘録
		対面所立柱	元和四年御堂其他御再興ノ記
		阿弥陀堂上棟	元和四年九月以降御堂日記
		阿弥陀堂移徙	阿弥陀堂移徙記
		徳力善雪に六高僧像を二幅に描かしめ、阿弥陀堂本尊の左右に安置	通紀
1620	元和6	阿弥陀堂の内陣彩色のために宗祖影像を茶所へ移す	元和四年御堂其他御再興ノ記、元和日記
		宗祖影像還座	元和四年御堂其他御再興ノ記、元和日記
1623	元和9	阿弥陀堂に天蓋をつる	元和日記
1624	寛永元	御堂の橋を架け改む	顕如三十三回忌記
1625	寛永2	御影堂に天蓋をつる	寛永二三四四年御堂日記
1633	寛永10	御影堂再興新始	御影堂再興新初之記、同新初行列次第、通紀、家系、法流秘録
1635	寛永12	御影堂立柱	御影堂立柱記、寛永日記、通紀、家系、法流秘録
1636	寛永13	御影堂上棟	御影堂棟上之記、寛永日記、年契、通紀
		宗祖影像還座	御影堂還座之次第、法流秘録
1645	正保2	御影堂外陣の天井を張る	法流秘録
1657	明暦3	宗祖四百回忌を期し、本山御堂廻り等の普請を図る	石川記
1660	万治3	御堂を彩色	四百回記
1662	寛文2	大地震、仮殿を庭隅に築き、両堂尊像を移す、後もとに復す	通紀
1663	寛文3	地震のために宗祖影像を仮殿に移す	年譜、年契、千代鑑、通紀
1670	寛文10	御堂の池に蓮を植える	家系、年表略
1693	元禄6	阿弥陀堂屋根修理のために本尊を御影堂十字の間に移す、後還座	富島記、年譜、通紀、家系、年契、年表略
1714	正徳4	阿弥陀堂北ノ間・位牌ノ間を金張付とす	富島記
1748	寛延元	阿弥陀堂再建の口上書を幕府に提出	再建記
		幕府から阿弥陀堂再建の承認を得る	再建記
1749	寛延2	阿弥陀堂再建新始	通紀、考信録、家譜4・15
1751	宝暦元	集会所に阿弥陀堂の諸尊像を移す	通紀、家譜
		旧阿弥陀堂の西山別院移建を幕府に届け出る	再建記
1754	宝暦4	阿弥陀堂再建の地築に妙法院大仏領境内の砂利を用う	再建記
		阿弥陀堂再建の地築を始め、後完了	再建記
1755	宝暦5	阿弥陀堂再建の石築を開始、後完了	再建記
1756	宝暦6	阿弥陀堂再建の石築を始む	再建記
1758	宝暦8	阿弥陀堂再建に紀伊大工の鏡架構架法を採用	御築地棟上記
		阿弥陀堂立柱	通紀
1759	宝暦9	阿弥陀堂上棟	晟章殿記、通紀、家譜
		対面所修理	黒書院諸事覚書帳、墨書胡粉銘筋書
		阿弥陀堂再建について経蔵を南へ移す	富島記
		川西十三日講中等、阿弥陀堂の瓦葺を始め	富島記



西暦	年号	出来事	文献
1760	宝暦10	阿弥陀堂落成	通紀、阿弥陀堂遷仏記、祖門記、考信録
		宗祖影像を阿弥陀堂に遷し、御影堂修葺に着手	新御所様次日記
		靄沢探索、阿弥陀堂襖絵を描く	洪帳早見出
1764	明和元	本尊を御影堂に遷し、阿弥陀堂の塗箔工事を始む	錦花殿記
1765	明和2	本尊を阿弥陀堂に遷座	錦花殿記
1766	明和3	阿弥陀堂の塗箔完了し、翌日、本尊遷座	錦花殿記
1785	天明5	御影堂の修葺を始む	通紀
1801	享和元	御影堂修葺新始	所蔵文書
1808	文化5	御影堂修葺に着手	御影堂修葺記
1810	文化7	御影堂修葺上棟	家譜
		御影堂修葺完成	家譜
1858	安政4	本尊を仮堂に遷し、阿弥陀堂の修理を始む	阿弥陀堂御影堂修葺一件文書、広如芳績考
1859	安政5	御影堂修復を始む	奥日次
1860	万延元	御影堂修葺成り、遷座	奥日次、阿弥陀堂御影堂修葺一件文書
1861	文久元	阿弥陀堂修葺成り、遷仏	奥日次、阿弥陀堂御影堂修葺一件文書
1908	明治41	阿弥陀堂の修理を始む	教海一瀾
1910	明治43	本山両堂修理完了し、宗祖影像を護衛堂に遷座	録事、鏡如年譜
		本尊を阿弥陀堂に遷仏す	録事、鏡如年譜
1913	大正2	阿弥陀堂・御影堂・黒書院、特別保護建築物に指定さる(昭和25年、文化財保護法の制定に伴い国の重要文化財となる)	教海一瀾
1959	昭和34	御影堂内陣修復	
1994	平成6	本願寺境内地が世界文化遺産に登録	
1999	平成11	御影堂平成の大修復を始める	

## 2. 歴史的背景（表1）

本願寺は、天正19年（1591）に豊臣秀吉から七条坊門堀川の土地を寄進され、宗主であった顕如が大坂の天満からこの堀川の地に遷座する。これと同時に、御影堂を天満より移建し、阿弥陀堂以下の主要な建物を順次整備していく。慶長元年（1596）に起こった慶長の大地震では、両堂が倒壊するものの、翌年には復興する。しかし、元和3年（1617）に浴室から失火し、阿弥陀堂や御影堂、対面所などの主要伽藍が焼失した。翌年に仮御堂と阿弥陀堂（後に西山別院に移築）が建てられ、対面所も再建された。寛永10年（1633）から同13年（1636）にかけて御影堂、宝暦8年（1758）から宝暦10年（1760）にかけて阿弥陀堂が新築され、その後、屋根の修復を中心として数度の修復を重ねながら、現在に至っている。

本願寺以前の境内地内については、平安京左京七条二坊に該当し、南半分が東市跡、北半分が東市外町跡と推定されている。この東市は、平安京遷都当初から官営の市場として設けられ、市司によって管理・運営が行われていた。平安時代中期に編集された法令集である『延喜式』には、東西両市の開催日や独占販売品目だけではなく、塵の数まで定められていた。当初、4町分の敷地（現、本願寺境内南半と興正寺や龍谷大学の範囲に相当）であったが、10世紀にはその四辺がさらに2町ずつ拡張し、正十字形の敷地となる。その結果、市の範囲は合わせて12町を占めることになり、拡張した8町分は、「外町」と呼ばれた。その後、律令制の衰えと共に、一般の人々も商売を行えるようになり、東市の専売は徐々に失われていく。平安時代後期または鎌倉時代初期までは官営市場として存続していたと考えられているが、鎌倉時代以降、七条町や四条町といった新しい町が形成される中で、市の解体が始まった。絵図によれば、この頃の東市跡の一部では、空也上人を念仏の開基とした堂が建てられ（『東市町正応五年前図』<sup>3)</sup>正応5年、1292年）、一遍上

人が踊屋を建てて踊念仏を興行していた（『一遍上人絵伝』鎌倉時代後期<sup>4)</sup>）。丁度この頃に、市屋道場金光寺が天台宗から時宗に改宗し、市町の守護神として祭られた市姫神社などとともに、本願寺移転直前まで存続していたとみられる。しかし、鎌倉時代後期頃から本願寺移転直前期まで、現在の本願寺境内地内がどのように利用されていたのかは明らかではない。

### 3. 周辺の調査（図3、表2）

寺域周辺の調査では、河川の氾濫などによって運ばれたと考えられる弥生土器や古墳時代の土器類が、礫層から出土することがあり、遺構も検出されている。弥生時代の溝や落込み（図3・表2-6・8、以下図・表は省略）、古墳時代の落込みなど（8）が、寺域の北から北東にかけての範囲と南側で、当該期の遺物を伴って発見されている。また、弥生時代から古墳時代の遺物は、寺域周辺の北東から南西の斜め方向の範囲内で、多く発見されている（6・8・26・28など）。竪穴式住居などの定住を彷彿とさせる遺構は発見されていないが、遺構や土器の状態から安定した微高地が近くに存在していたとみられ、弥生時代や古墳時代の集落遺跡が今後周辺で確認される可能性が高いと考えられる。その後の奈良時代から平安時代前期までの間については、土地利用の痕跡が認められない。平安時代に入ると、本願寺の敷地には東市とその外町が形成される。そのような状況を想定できるような遺構は見つかっていないが、東市が存続していたと考えられている平安時代前期から鎌倉時代にかけての井戸や土坑、東市内を通っていた北小路などの

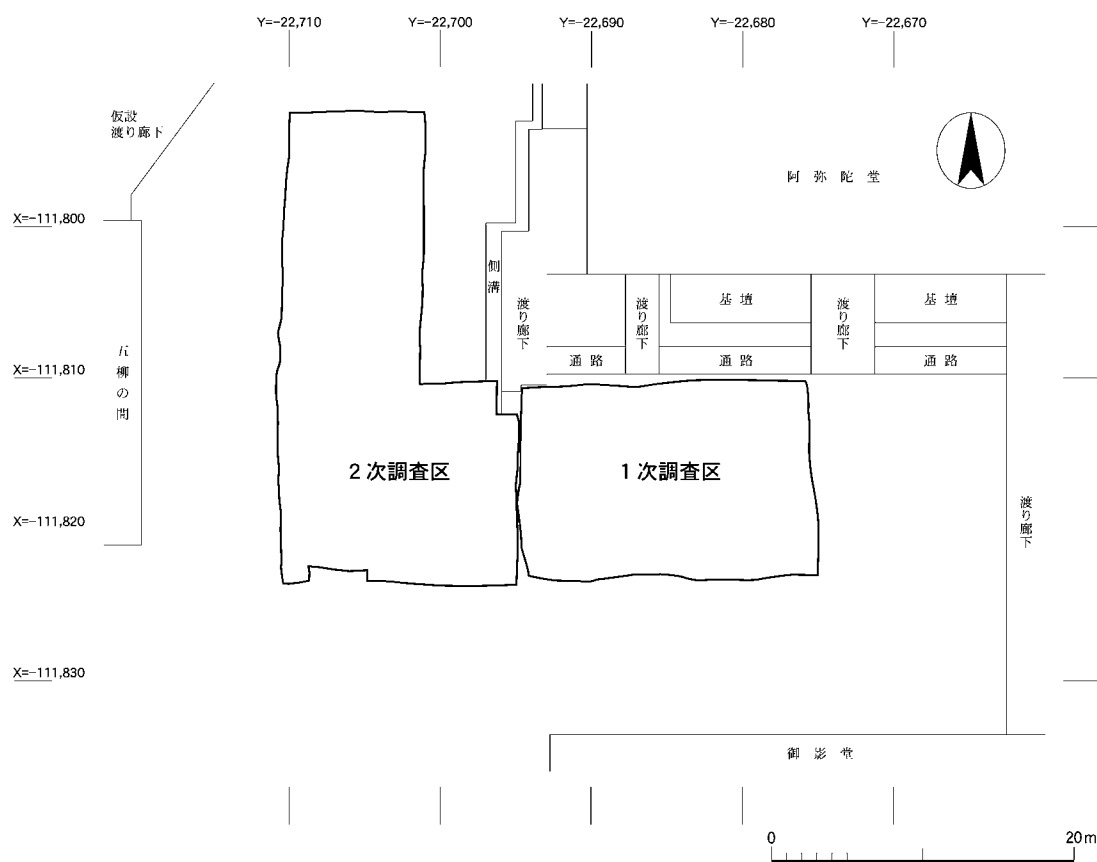


図2 調査区配置図（1：500）

路面や堀川小路などの側溝、1町内を分割した区画溝などが検出されている。出土遺物では、東市跡以外の京域に比べ、青磁椀などの輸入磁器の割合が高いことが確認されている（7・22）。室町時代の遺構は、寺域北部で池跡や堀跡と考えられる溝、井戸、土坑など（5～7）、龍谷大学周辺で井戸や掘立柱建物跡などが検出されている（26・28）。境内北側で検出された遺構については、旧本圀寺やその塔頭が当該期に敷地を領有していたことから、それに伴う遺構と考えられている。また、寺域北東部の調査で検出された室町時代の導水路を持つ池跡の存在は、堀川小路がこの時期までには東に縮小されていたことを示している（11）。よって、新花屋町通と堀川通の交差点南西角が堀川通側へ広がっている状態は、本願寺移転時のものではなく、それ以前のものであると考えられる。次の安土桃山時代末から江戸時代初頭の遺構としては、寺域北東で検出した庭園跡（池）がある（11）。これは、本願寺宗主教如が文禄元年（1592）に隠居し、寺域北東隅に屋敷を構えたという記述から、その屋敷に伴っていたと考えられる池跡であったとされる。池跡には、導水施設が造られ、汀に礫を敷いて洲浜を表し、せせらぎを造って、庭石を置く前時代の様式を取り入れたものであった。江戸時代の遺構や遺物は、寺域周辺だけではなく、寺域内でも多く発

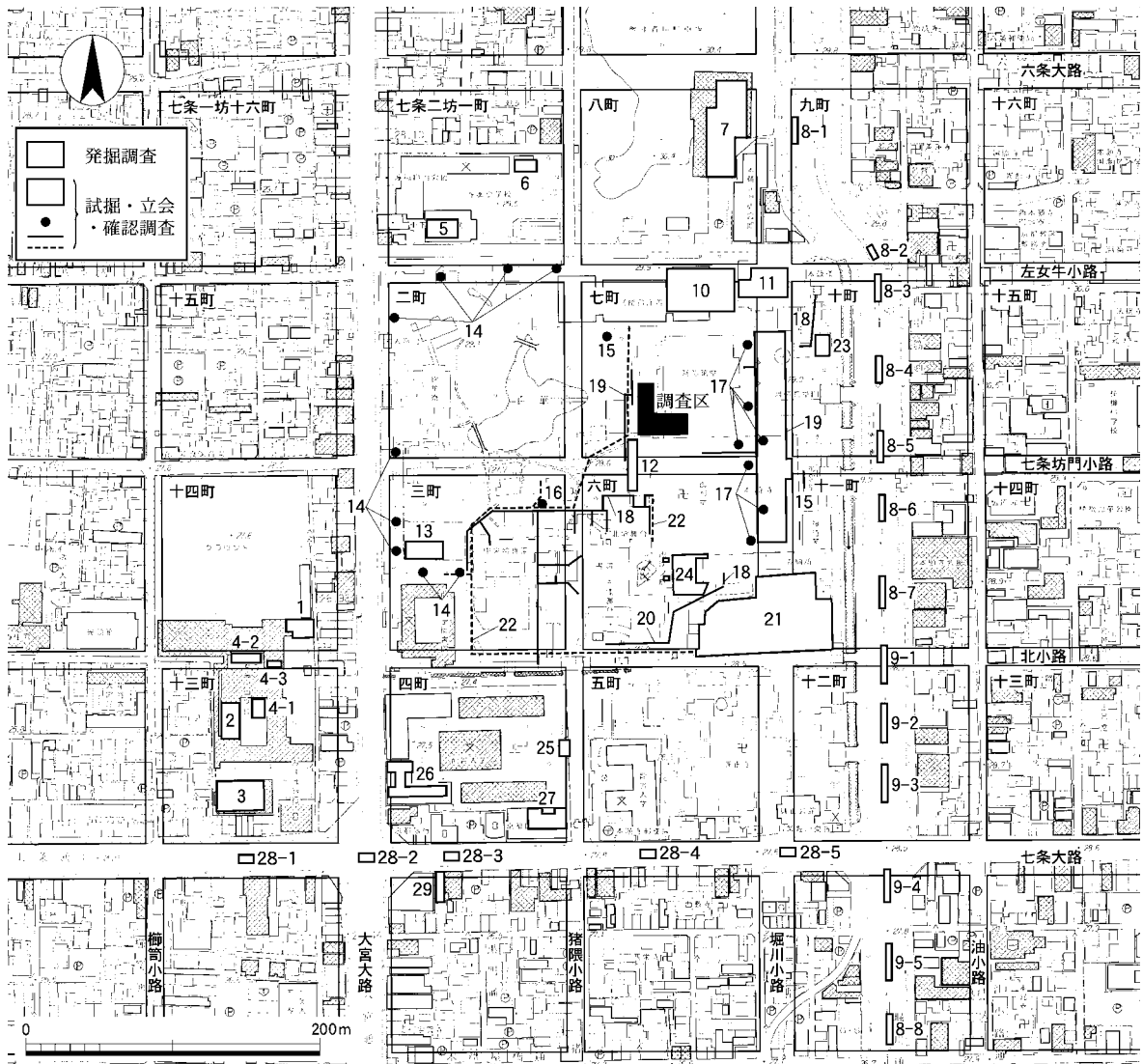


図3 周辺調査位置図（1：5,000）

表2 周辺調査一覧表

番号	条坊・路名	調査方法	調査機関	調査面積	調査年度	主な遺構	主な遺物	地山検出標高(m)	江戸時代検出標高(m)	文献	備考
1	左京七条一坊十四町	発掘	平安京調査会	約150㎡	昭和51年度	平安時代前期・鎌倉・室町時代の井戸、江戸時代耕作面	各遺構に伴う遺物	—	26.1	未報告	
2	左京七条一坊十三町	発掘	(財)京都市埋蔵文化財研究所	260㎡	昭和56年度	平安後期の井戸・溝、鎌倉時代の井戸、室町時代の井戸・溝・土壌	各遺構に伴って少量出土(土師器、須恵器、瓦器など)	25.2	—	『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要(発掘調査編)』	前面にわたって削平されているため、遺構の残存状態は悪い
3	左京七条一坊十三・十四町	発掘	平安学園考古学クラブ	620㎡	昭和60年度	平安時代～室町時代の井戸、桃山時代の溝、江戸時代の建物跡	各遺構に伴って多く出土(土師器、須恵器、瓦器など)、平安時代の籠篋物	25.2	25.25	『左京七条一坊十三町 平安京東市外町の調査』	11～12世紀代と14～15世紀中葉に遺跡形成が途絶えていることが明らかとなった
4	左京七条一坊十三町、北小路	発掘	平安学園考古学クラブ	約300㎡(調査区3箇所)	平成8～9年度	江戸時代の耕作面	平安時代～中世の土器片	25.4(調査区1)	江戸時代～近代25.4(調査区2)	『平安京左京七条一坊十三・十四町の調査』『研究論集41号』平安学園教育研究会	大宮通との間に高低差があったと考えられている
5	左京七条二坊一町	発掘	(財)京都市埋蔵文化財研究所	243㎡	昭和58年度	平安時代前期の井戸、室町時代後半の池、桃山～江戸時代の井戸・溝・柱穴など	平安時代前期の緑釉壺、土馬など	28.2	28.84	『昭和58年度 京都市埋蔵文化財調査概要』	平安時代前期の井戸出土遺物は、括弧が高い、室町時代後半の池跡は日本園寺またはその塔頭の庭園設備の一部か?
6	左京七条二坊一町	発掘	(財)京都市埋蔵文化財研究所	150㎡	昭和57年度	弥生時代の溝、平安時代の土壌、鎌倉時代の土壌・柱穴、室町時代の井戸・土壌・柱穴、桃山～江戸時代の溝	弥生土器の壺・甕、鎌倉時代の土師器皿、瓦器碗・羽釜、白磁皿、青磁碗、輸入陶器盤など	28.3	28.84	『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』	江戸時代の溝は日本園寺に関連すると考えられている
7	左京七条二坊八町、六条大路	発掘	(財)京都市埋蔵文化財研究所	1321㎡	平成6年度	平安時代前期～江戸時代前期の井戸、土壌など、室町時代の溝	弥生時代末～古墳時代初期の土師器、平安時代～江戸時代の土器、木製品など、江戸時代の金箔瓦、経文断簡など	28.1	江戸時代遺構面土部削平、室町時代遺構検出面29.1	『平成6年度 京都市埋蔵文化財調査概要』	室町時代後期の溝は日本園寺の堀跡と考えられる
8	左京七条二坊九・十・十一町、八条二坊九町	発掘	平安京調査会	829.9(調査地点8箇所)	昭和61年度	弥生時代の溝・落込み、古墳時代の落込み、平安時代の井戸、土壌など、平安時代中期～後期の路面、鎌倉時代～江戸時代の井戸など	弥生時代後期の壺、甕、古墳時代初期の壺、甕、高杯、各遺構に伴う土器類など	27.42(調査区3) 26.70(調査区7)	—	『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』	弥生時代～古墳時代の遺構・遺物を検出、七条坊門小路・左女牛小路の側溝を検出
9	左京七条二坊十一・十二町、八条二坊九町	発掘	平安京調査会	709.5(調査地点5箇所)	昭和60年度	平安時代前期から江戸時代の井戸、土壌など、平安時代の路面	弥生時代の壺、甕、古墳時代の土師器、須恵器、はそう、各遺構に伴う土器類	25.60(調査区2) 26.20(調査区5)	—	『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』	平安時代前期～中期の遺物は七条大路より北側から多く出土(東市外町関係か?)、調査区1で平安時代前期の北小路を検出
10	左京七条二坊七町、左女牛小路	発掘	本願寺境内学術調査会	約1500㎡	昭和58年度	自然流路など	—	—	—	『本願寺境内地発掘調査概要』(未確認)	
11	左京七条二坊七～十町	発掘	(財)京都市埋蔵文化財研究所	602㎡	平成7年度	平安時代後期の井戸、室町時代の池状遺構、導水路、流路、桃山時代～江戸時代初頭の庭園跡など	弥生時代の土器、古墳時代の土師器、須恵器、平安時代～江戸時代初頭の土器、瓦など	26.65	池跡検出面27.4	『平成7年度 京都市埋蔵文化財調査概要』	庭園跡(池)は本願寺宗主教如の隠居した屋敷に造られた池と考えられる、室町時代の導水路を持つ池跡の検出、平安末～鎌倉初の堀川小路西側溝を検出
12	左京七条二坊六・七町	確認	(財)京都市埋蔵文化財研究所	100㎡	平成18年度	江戸時代中期頃の石塁	江戸時代～近代の土器、瓦など	未掘削	石塁成立面28.2	—	石塁は修景と防火壁の役割を持っていた考えられる
13	左京七条二坊二町	発掘	(財)京都市埋蔵文化財研究所	313㎡	平成18年度	平安時代中期の溝、平安時代後期～鎌倉時代の井戸、江戸時代前期～後期の井戸、土壌など、江戸時代後期の建物跡	弥生時代の土器片、古墳時代の須恵器片、平安時代前期の土馬、平安時代～江戸時代の土器、石製品など	26.65	江戸時代前期遺構面26.8	未報告	本願寺境内と町屋の南北方向の境界溝を検出
14	左京七条二坊二・三町	立会	(財)京都市埋蔵文化財研究所	—	昭和56年度	江戸時代の溝	—	—	—	『昭和56年度 京都市内遺跡試掘立会調査概報』京都市文化観光局	推定左女牛小路の地点で江戸時代後半の深状遺構検出

番号	条坊・路名	調査方法	調査機関	調査面積	調査年度	主な遺構	主な遺物	地山検出標高 (m)	江戸時代検出標高 (m)	文献	備考
15	左京七条二坊七町	立会	(財)京都市埋蔵文化財研究所	—	昭和55年度	検出なし	—	—	—	未報告	
16	左京七条二坊三町	立会	(財)京都市埋蔵文化財研究所	—	昭和54年度	検出なし	土師器・陶磁器	—	—	『京都市内遺跡試掘・立会調査報告一 国庫補助による試掘・立会調査報告』京都市文化観光局文化財保護課	掘削底面浅い
17	左京七条二坊六・七町、堀川小路	立会	(財)京都市埋蔵文化財研究所	—	昭和54年度	検出なし	平安時代～江戸時代の遺物	—	—	未報告	
18	左京七条二坊三・六・七町、堀川小路	立会	(財)京都市埋蔵文化財研究所	—	昭和57年度	表土下0.5m以下にて平安時代～室町時代の包含層および土壌	—	—	—	『昭和57年度 京都市内遺跡試掘立会調査概報』京都市文化観光局	瓦溜めのため、堀川小路・七条坊門小路の交差点部は検出できず
19	左京七条二坊七町、堀川小路	立会	(財)京都市埋蔵文化財研究所	—	昭和58年度	GL-0.6mにて平安の包含層、-0.8mにて平安の土壌	—	—	—	『昭和58年度 京都市内遺跡試掘立会調査概報』京都市文化観光局	
20	左京七条二坊六町、北小路	立会	(財)京都市埋蔵文化財研究所	—	昭和56年度	表土下0.9mにて江戸時代包含層、1.2mにて路面跡	—	—	—	『昭和56年度 京都市内遺跡試掘立会調査概報』京都市文化観光局	検出した路面は北小路跡か？
21	左京七条二坊六・十一町、堀川小路	試掘	(財)京都市埋蔵文化財研究所	園内全域	平成8年度から継続中	旧醒眠泉、滝石、導水路、船着場、旧護岸など	平安時代～江戸時代の土師器、瓦など	26.30 (黄鶴台西)	本願寺整地層上面 27.80 (滄浪池北西)	各年度の『京都市埋蔵文化財調査概要』に掲載	名勝瀧翠園の整備事業に伴う調査、作庭初期から現代に至る庭園の変遷が一部であるが判明、江戸時代整地層や中世の包含層を確認
22	左京七条二坊三・六・七町	試掘・立会	(財)京都市埋蔵文化財研究所	境内全域	平成18年度	平安時代の柱穴、溝、土壌、鎌倉時代の溝、室町時代の井戸、江戸時代の溝、暗渠、柱穴、土壌など	平安時代～江戸時代の土師器、瓦、須恵器など、江戸時代のふいごの羽口、ガラス玉など	26.80 (御影堂西)	本願寺創建時整地層 26.80 (唐門前)、27.10 (御影堂西)	未報告	猪隈小路西側溝の検出、江戸時代の暗渠を数箇所検出
23	左京七条二坊十町	発掘	(財)京都市埋蔵文化財研究所	約110㎡	平成19年度	平安時代の小穴など、鎌倉時代の井戸など、室町時代の柱穴、江戸時代の柱穴、井戸など	平安時代の土師器、緑釉陶器、灰釉陶器など、鎌倉時代の土師器、青磁、白磁など、室町時代の土師器など	27.6	28.1	『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-2』	本願寺造営以前に遡る遺構の検出
24	左京七条二坊六町	発掘	(財)京都市埋蔵文化財研究所	400㎡	平成19年度	江戸時代の建物、井戸、瓦列、土坑、平安時代末～鎌倉時代初頭の溝、土坑	古墳時代の土師器、須恵器、平安時代の土師器、須恵器、緑釉陶器、江戸時代の土師器、陶磁器など	平安京以前の自然流路の堆積層上面 26.5	28.0 (寛永13年の整地層)	『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-18』	寛永の御影堂再建時に伴う整地層上面で江戸時代中期以降の建物跡、一町を二分する平安時代末～鎌倉時代初頭の溝検出
25	左京七条二坊四町	発掘	龍谷大学校地学術調査委員会	70㎡	昭和51年度	江戸時代の土壌	江戸時代の土師器、肥前磁器、瓦など、寛永通寶が銭纏に通された状態で出土	地表下 1.4	地表下 0.6	『重要文化財龍谷大学正門』	
26	左京七条二坊四町	発掘	龍谷大学校地学術調査委員会	約197㎡	昭和49年度	平安時代後期～室町時代の井戸、平安時代の溝	古墳時代の土師器壺・甕・高杯、平安時代～室町時代の土師器、瓦器など、江戸時代の土師器、陶磁器など	地表下約 1.9	—	『龍谷大学構内発掘調査報告書』	古墳時代の遺物がまとまって出土、大宮大路東側溝を検出
27	左京七条二坊四町	発掘	龍谷大学校地学術調査委員会	約192㎡	昭和49年度	江戸時代の土壌	江戸時代の土師器、陶磁器、泥面子、銭貨など	地表下約 1.95	—	『龍谷大学構内発掘調査報告書』	
28	七条大路	発掘	(財)京都市埋蔵文化財研究所	250㎡ (調査区 5箇所)	昭和52年度	弥生時代～古墳時代の溝、平安時代後期～江戸時代の溝、土壌など	弥生土器、古墳時代の須恵器など	—	—	未報告	弥生時代～古墳時代の遺構・遺物を検出
29	左京八条二坊一町	発掘	平安京調査会	約80㎡	昭和51年度	平安時代の溝、土壌、鎌倉時代～室町時代の掘立柱建物、土壌など	平安時代の白磁など	—	—	未報告	平安時代後期の七条大路南側溝の検出

見されているが、部分的な調査であるため、全容は不明であった。しかし、御影堂南側の調査で、江戸時代中期以降に建てられた集会所とみられる建物跡などが確認されたことから（24）、元和3年の火災以後に建てられた建築物については、現存建物や絵図面に描かれた位置からほとんど動いていないことが明らかとなった。また、寺域南西で貯水槽建設に伴って調査を行った際に、大宮通東側にある築地塀から東へ26 m付近の位置で南北方向の溝を検出した。これは、明治時代前期頃まで存続していた本願寺と町家（本願寺関係者の宅地の可能性もある）の境界溝と確認している（13）。この溝が、本願寺や龍谷大学所蔵の絵図に描かれた南北方向の溝と一致したことは、本願寺の敷地変遷を考える上で、絵図が欠く事のできない資料であるということを再認識しえた事例である。

註

- 1) 京都市編『京都の歴史—第1巻 平安の新京—』京都市編さん所 1970年
- 2) 平安学園平安京跡遺跡調査委員会「平安京左京七条一坊十三・十四町の調査」『研究論集』第41号  
平安学園教育研究会 1998年
- 3) 註1の図157を参照。
- 4) 『日本の絵巻20 一遍上人絵伝』中央公論社 1988年

## Ⅱ 1 次調査

### 1. 調査経過

この発掘調査は、西本願寺の式務部棟新築工事に伴い実施したものである。調査地は、京都市下京区堀川通花屋町下る本願寺門前町地内に所在する。阿弥陀堂の南、御影堂の北にある空閑地に位置し、御影堂修復に先立って、解体された旧式務部棟の跡地である。

ここは、平成18年6月に行われた試掘調査の際に、表土から約0.5mで江戸時代の整地層が確認されており、旧式務部棟基礎跡によって攪乱されていない所では、整地層や遺構の残存率が高いことが予想された。その結果を受けて、阿弥陀堂の南西に位置する現式務部棟を機能させながら調査を実施するため、新式務部棟建設範囲を2回に分けて調査を行うこととなった。今回の調査は、その1回目となる。L字形を呈する新式務部棟建設予定範囲の東南部に、東西約19m、南北約13mの調査区を設定し、調査を開始することとなった。

調査は、平成19年3月5日から付帯作業を行い、翌6日から重機掘削を開始した。調査の結果、安土桃山時代末期から江戸時代前期の池跡（以下、旧池）と江戸時代前期の池跡（以下、新池）の2つの池跡を検出した。また、本願寺は、元和3年（1617）に阿弥陀堂や御影堂などの主要建築物が焼失しており、旧池を埋め立てた土がその後片付けの痕跡である火災処理土と考えられる。これまでに知られていなかった池跡を検出したことと、元和3年の火災処理土を境内で初めて確認したことから、2つの池跡を埋め戻し保存することとなった。そのため、保護用の砂を搬入し、その上に調査の残土を戻す作業を行い、6月4日にすべての調査を終了した。なお、遺構の保存方法は、新池汀の集石部分や杭などの壊れやすい遺構には砂入り土のうを積んで保護を行い、調査区全面に広がる池跡には遺構面の上に約10～15cmの厚さになるように砂を被せた。その後、重機で残土を入れ、新式務部棟の基礎が造られる標高27.00m附近に、掘削時の目安用として、東西南北約2m間隔に土のうを置いた。標高27.00mを超える池の陸部（標高27.20m附近）については、保護砂の直上に土のうを敷き並べる措置をとった。



図4 調査前全景（南西から）



図5 作業風景（南東から）

図11 D-D'抜粋

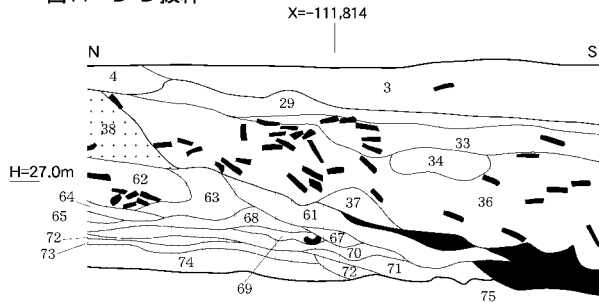


図9 A-A'抜粋

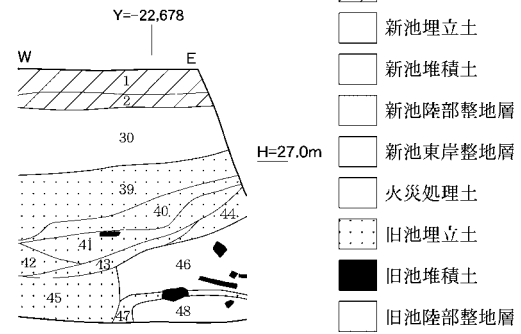


図11 A-A'抜粋

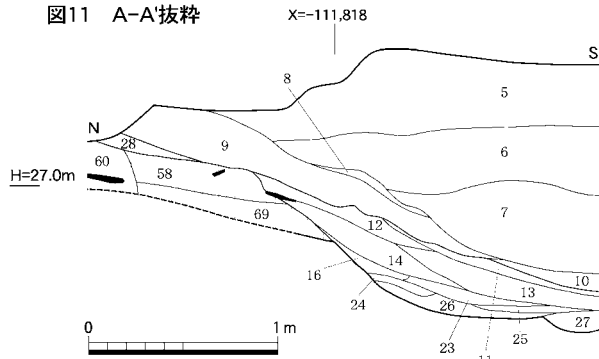
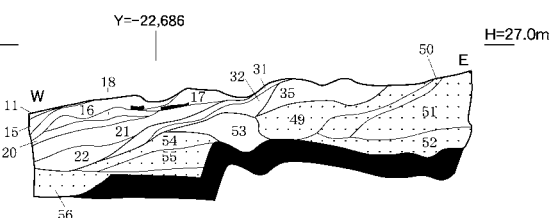


図11 B-B'



- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土 径0.5~2cmの礫・土師器・ブロック状の2.5Y6/8明黄褐色シルト少量含
- 2 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質土 径0.5~1cmの礫・土師器片少量含
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土混礫(径1~5cm) 土師器・炭少量含
- 4 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 炭・焼土粒 径1~2cmの礫少量含
- 5 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土混礫 土師器・炭少量含
- 6 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土混粗砂
- 7 2.5Y3/2 黒褐色微砂 ブロック状の2.5Y5/6黄褐色シルト・7.5Y5/2 灰オリーブ色シルト多量含
- 8 5Y5/2 灰オリーブ色粘土
- 9 10YR3/1 黒褐色粘質土 径1~3cmの礫少量含
- 10 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色細砂混礫(径1~5cm) 粘性あり
- 11 2.5Y3/2 黒褐色シルト 粘性あり、粒状の2.5Y6/8明黄褐色微砂少量含
- 12 10YR3/4 暗褐色粗砂 径1~3cmの礫少量含
- 13 2.5Y3/1 黒褐色粘土
- 14 2.5Y3/1 黒褐色粘土 瓦片・薄い板少量含
- 15 2.5Y4/1 黄灰色微砂
- 16 2.5Y7/6 明黄褐色粗砂礫(径1~2cm)
- 17 10YR3/3 暗褐色粗砂礫(径2~3cm) 土師器・瓦少量含
- 18 2.5Y4/2 暗灰黄色微砂
- 19 2.5Y5/4 黄褐色粗砂
- 20 2.5Y3/1 黒褐色シルト 粘性あり
- 21 10YR3/1 黒褐色微砂 径1~3cmの礫少量含
- 22 10YR2/1 黒色細砂混粘質土 植物遺体含
- 23 2.5Y3/2 黒褐色微砂 リン成分少量含
- 24 5Y4/1 灰色粘土混2.5Y3/2黒褐色微砂
- 25 2.5Y3/1 黒褐色粘土
- 26 5Y3/2 オリーブ黒色粗砂混粘土 炭化物少量含
- 27 7.5Y4/1 灰色粘土 粒状の5Y5/4オリーブ色粘土・径1~5cmの礫少量含
- 28 10YR5/6 黄褐色粘土 ブロック状の10YR4/3にぶい黄褐色粘土多量含
- 29 2.5Y3/2 黒褐色砂質土 土師器・炭・径1~3cmの礫含
- 30 10YR3/3 暗褐色粗砂混10YR4/3にぶい黄褐色砂質土 径0.5~5cmの礫多量含、土師器・炭少量含
- 31 10YR5/8 黄褐色粘質土混粗砂礫(径1~2cm)
- 32 10YR3/3 暗褐色砂質土 粘性あり、粒状の2.5Y6/6明黄褐色粘土・焼土粒少量含
- 33 10YR3/3 暗褐色粘質土 炭・焼土・焼け瓦多量含
- 34 10YR4/1 褐色粘土 径0.5~3cmの礫・焼土粒少量含
- 35 10YR3/2 黒褐色砂質土 炭・焼土粒・径1~2cmの礫少量含
- 36 7.5YR2/1 黒色砂質土 焼け瓦・径0.5~5cmの炭・焼土多量含
- 37 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘土 径1~2cmの礫少量含
- 38 10YR4/4 褐色粘土混粗砂 焼け瓦・径0.5~1cmの礫少量含
- 39 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質土 土師器・炭・焼土粒多量含、径0.5~5cmの礫・ブロック状の2.5Y5/6黄褐色粘土混微砂少量含
- 40 2.5Y4/3 オリーブ褐色細砂 径1cmの礫含、径2~3cmの礫少量含
- 41 10YR3/3 暗褐色砂質土混礫(径0.5cm以下) 径2~3cmの礫・土師器・炭少量含
- 42 10YR4/4 褐色細砂 粘性あり、径1~5cmの礫少量含
- 43 10YR5/6 黄褐色粗砂礫(径0.5~1cm)
- 44 2.5Y4/4 オリーブ褐色細砂 径1~5cmの礫・ブロック状の2.5Y3/3 暗オリーブ褐色微砂少量含
- 45 10YR3/2 暗褐色粘質土混礫(径0.5~5cm)
- 46 2.5Y3/2 黒褐色粘質土 炭・焼土粒多量含、瓦片少量含
- 47 2.5Y4/1 黄灰色粘土 炭・焼土粒少量含
- 48 2.5Y3/2 黒褐色粘質土 炭・焼土粒多量含、焼け瓦多量含
- 49 10YR3/1 黒褐色粘質土 径1~5cmの礫・焼土粒少量含
- 50 10YR5/6 黄褐色砂質土混10YR4/1褐色粘土 径1~10cmの礫・炭片・土師器少量含
- 51 10YR4/2 灰黄褐色粘土 炭・土師器少量含
- 52 7.5Y3/1 オリーブ黒色微砂
- 53 7.5YR3/2 黒褐色砂質土 焼土粒多量含、瓦少量含
- 54 5Y4/1 灰色粘土
- 55 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土混シルト
- 56 2.5Y3/2 黒褐色粘質土混シルト 焼土粒・炭少量含
- 57 2.5Y4/1 黄灰色粘土
- 58 10YR5/6 黄褐色粘土混10YR4/3にぶい黄褐色粘土(土師器片少量含)
- 59 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土(土師器少量含)混10YR6/6明黄褐色粘土
- 60 10YR3/2 黒褐色粘質土 瓦片・土師器・径1~10cmの礫少量含
- 61 10YR4/4 褐色粗砂礫(径0.5~10cm)
- 62 7.5Y4/4 褐色粘土混10YR3/3暗褐色砂質土混粗砂礫(径0.5~4cm) 瓦含
- 63 10YR4/6 褐色粘土 混10YR4/2灰黄褐色粘土(炭・土師器少量含)混10YR3/4暗褐色粘土
- 64 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土 ブロック状の7.5YR5/6明褐色細砂少量含
- 65 10YR2/1 黒褐色砂質土 粘性あり、径2~3cmの礫含、炭少量含
- 66 2.5Y3/1 黒褐色粘土
- 67 5Y4/1 灰色粘土
- 68 10YR4/2 灰黄褐色粘土 土師器少量含
- 69 7.5YR5/6 明褐色微砂混粘土
- 70 10YR2/1 黒色粘土混2.5Y4/4オリーブ褐色粘土
- 71 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土 炭・土師器少量含
- 72 10YR3/3 暗褐色粘土混5Y5/1灰色粘土混2.5Y5/6黄褐色シルト
- 73 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト混微砂 粒状の2.5Y3/1黒褐色粘質土(土師器少量含)
- 74 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂混礫(径1~5cm) 粒状の2.5Y3/1黒褐色粘質土(土師器片・炭含)
- 75 10YR5/8 黄褐色粗砂 径1~3cmの礫少量含(所によって、礫が粗砂と同じ割合で混じる) [地山]

図6 調査区基本層序(1:40)



## 2. 遺 構

### (1) 基本層序 (図6)

基本層序は、表土下約 60 cmまでは旧式務部棟解体に伴う埋め戻し土であり、その下に約 140 cmの厚さで江戸時代整地層がある。調査区東半では約 10～40 cmの厚さで黒褐色粘土や黒褐色粘質土の旧池堆積土があり、その下に黄褐色粗砂混礫などを主体とする地山がある。調査区西半では、黒褐色粘質土が新池の堆積土として、約 10～20 cmの厚さで堆積している。旧式務部棟解体に伴う埋め戻し土は煉瓦ブロックやコンクリート塊などを含む黒褐色粘質土、江戸時代整地層は粘質土や砂質土、粘土、礫混じりの粘質土や砂質土などの互層である。旧池の埋め立てには、火災処理土と砂質土や粘質土を主体とした旧池埋立土が使用されており、火災処理土には、焼け瓦と焼土粒を多く含んでいる。それぞれの層序の関係を上から順に並べると、整地層、新池埋立土、新池堆積土、新池陸部整地層、新池東岸整地層、火災処理土・旧池埋立土、旧池堆積土、旧池陸部整地層となる。なお、火災処理土と旧池埋立土は、基本的には同時期のものであるが、焼け瓦や焼土粒をほとんど含んでいない土を便宜的に旧池埋立土とした。そのため、この2つの層については、層序が逆転している部分もある。

安土桃山時代末から江戸時代前期の遺構は、何層にもわたる江戸時代の整地層や池の埋め戻し土直下から成立していた。江戸時代中期から明治時代の遺構は、江戸時代前期の整地層を切り込んで造られていた。

### (2) 遺構の概要

検出した遺構は、安土桃山時代末から江戸時代前期の池跡（旧池）、江戸時代前期の池跡（新池）と橋脚跡、江戸時代中期から明治時代の井戸（井戸3～5）、時期不明の遺構として井戸（井戸6・7）がある。調査区を東西に2分する形で旧・新池を検出し、井戸は調査区中央から西にかけて点在していた。

なお、調査区全体に攪乱が及び、また、調査区四方の壁も攪乱されていたことから、攪乱坑の壁を利用して土層観察用の畦を設定し（南北方向に3箇所、東西方向に2～3箇所）、土層観察とその記録を行って整地層の各面を対応させ、時期や整地順序を明らかにできるように努めた。

表3 1次調査遺構概要表

時 代	遺 構
安土桃山時代末～江戸時代前期	旧池
江戸時代前期	新池、杭列
江戸時代中期	井戸3・4
江戸時代後期～明治時代	井戸5
時期不明（室町時代?）	井戸6・7

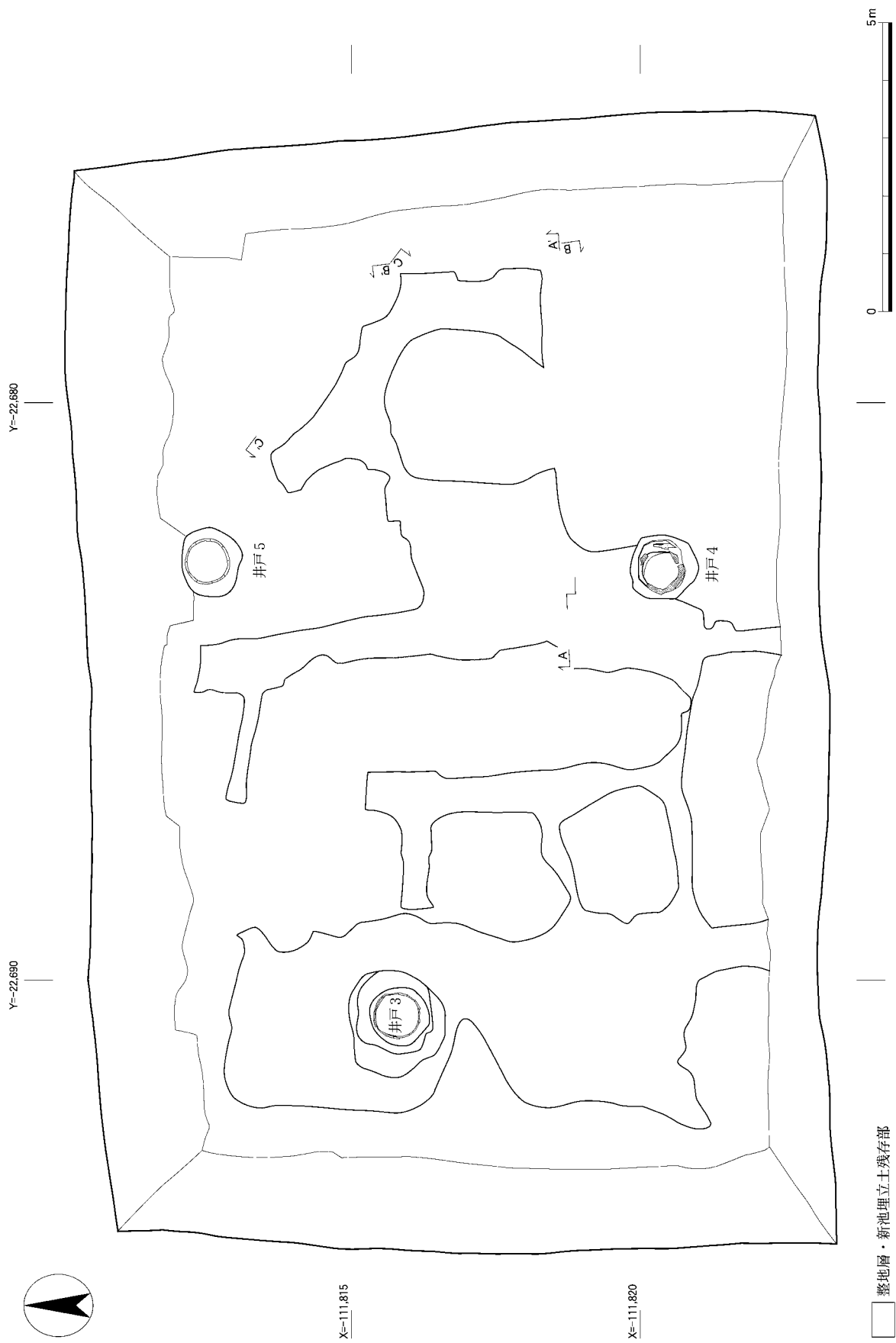


図7 江戸時代前期以降遺構平面図 (1 : 100)

### (3) 江戸時代後期から明治時代の遺構 (図7)

この時期の遺構としては井戸5がある。

井戸5 調査区中央北側で検出した。掘形の直径約0.95 m、井戸枠内法約0.7 mである。縦約30 cm、横約24 cm、厚さ約3 cmの井戸枠瓦を一周につき10枚使用した円形井戸である。井戸枠直上から井戸内上層には、直径15～20 cmの礫が詰められ、その下に粘土層、粘質土に瓦と直径5～10 cmの礫が混在した層（この層の主体は瓦）で埋められていた。瓦は、棧瓦や櫛書きのある平瓦であった。井戸枠瓦5段目まで掘り下げたが、調査区北壁直下であり危険であると判断し、これ以上の掘削を中止しているため、深さは不明である。

### (4) 江戸時代中期の遺構 (図7)

江戸時代前期の整地層を掘り込んだ井戸2基を検出した。何れも攪乱土を除去して検出しているので、本来の遺構成立面は不明である。

井戸3 (図8) 調査区西端北側で検出した。上部掘形直径約1.2 m、井戸枠上部掘形直径約0.9 m、

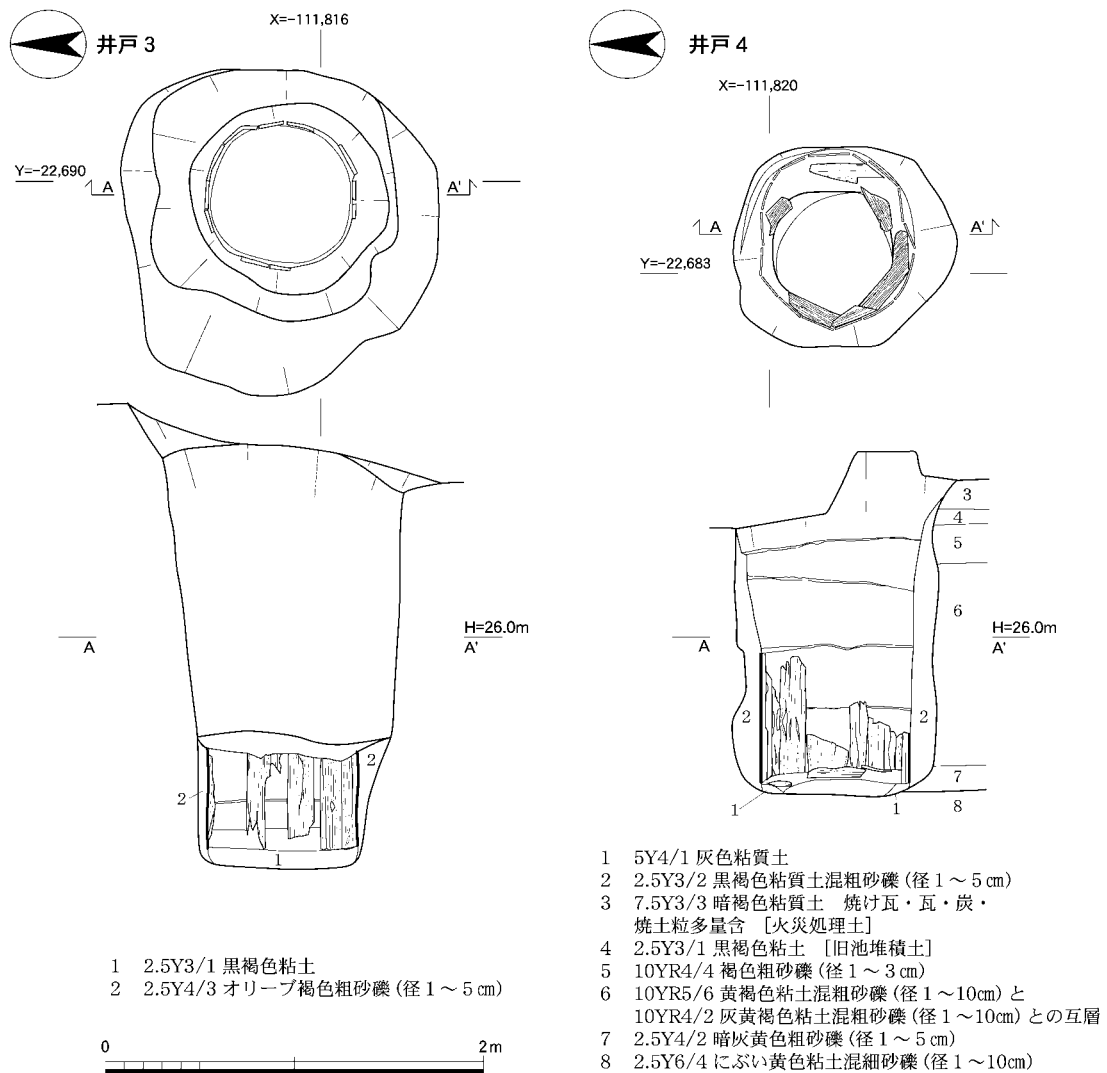


図8 井戸3・4実測図 (1:40)

井戸枠内法直径約 0.8 m、検出面からの深さ約 2 mを測る。検出面から約 1 mまでは、丸瓦や平瓦が大量に投げ込まれ、井戸枠上部から井戸枠内は暗褐色粗砂礫で埋め戻されていた。井戸底から約 0.5 mの高さまでは、井戸枠が残存していたが、その木材のほとんどは腐食していた。幅 10～15 cm、厚さ 1～1.5 cmの板材を 12 枚組み合わせた円形の井戸である。板材と掘形埋土の間に、タガの痕跡が 2 箇所で見られたことから、桶を井戸枠として使用していたとみられる。井戸枠の材質は、二葉のマツである。出土遺物は、土師器皿、京・信楽系陶器椀・灯明皿・雪平鍋、肥前磁器椀、平瓦などである。

井戸 4 (図 8) 調査区中央南側で検出した。掘形直径約 1.2 m、井戸枠内法直径約 0.8 m、検出面からの深さ約 1.8 mである。埋土には、粘質土に焼け瓦片や炭・焼土塊を多く含んでいることから、井戸を埋める際に、旧池の埋め立てに用いた火災処理土を削った可能性が考えられる。井戸底から 0.1～0.7 mの高さまで板材が残っていた。板材は幅 13～18 cmで、厚さは約 2 cmである。17 枚前後の板 (材質はスギ) を使用した桶を 2 個以上重ねて井戸枠としたとみられる。タガの痕跡は 4 箇所を確認している。井戸底に、井戸枠に沿って円形に板材が重なっており、板材が内側に倒れ込んだのではないかと考えられる。出土遺物は、土師器皿、京・信楽系陶器椀、肥前磁器椀、鉄釘、瓦などである。

#### (5) 江戸時代前期の遺構 (図 10)

江戸時代前期の遺構として、調査区全面に広がる整地層と調査区西半分で見出した新池、新池上を南北に横切る 2 本の杭列がある。

整地層 (図 6・9) 攪乱坑の間に残存していた整地層は、何層にもわたっていた。最上層は、表土下約 0.6 mで見出したが、調査区東の一部に残存していただけであった (図 6・9の整地層)。砂質土に礫が少量混じり、非常に強く締まる層である。上面 2 層分は、ほぼ水平堆積を示していた。遺物は土師器などの細片が少量出土しているだけであり、時期の詳細まで特定できないが、井戸 4 との新旧関係から、江戸時代前期に行われた整地と考えている。

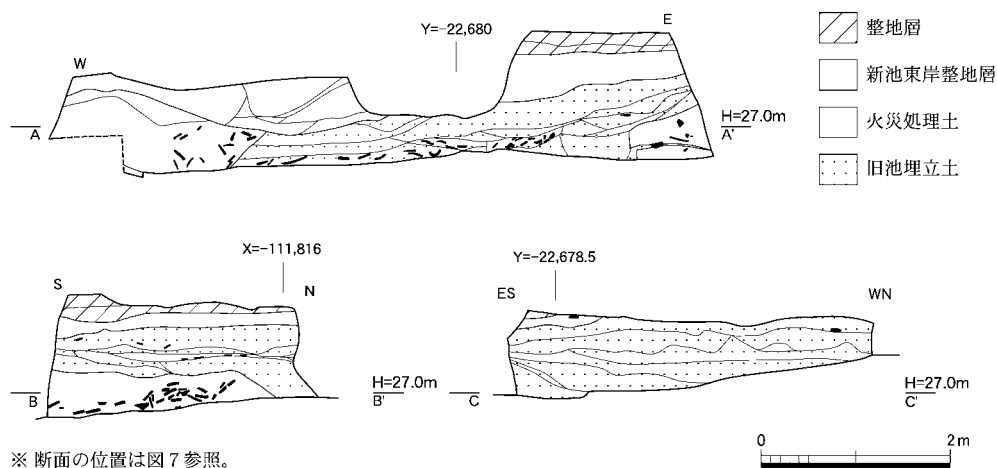


図 9 整地層土層断面図 (1 : 80)

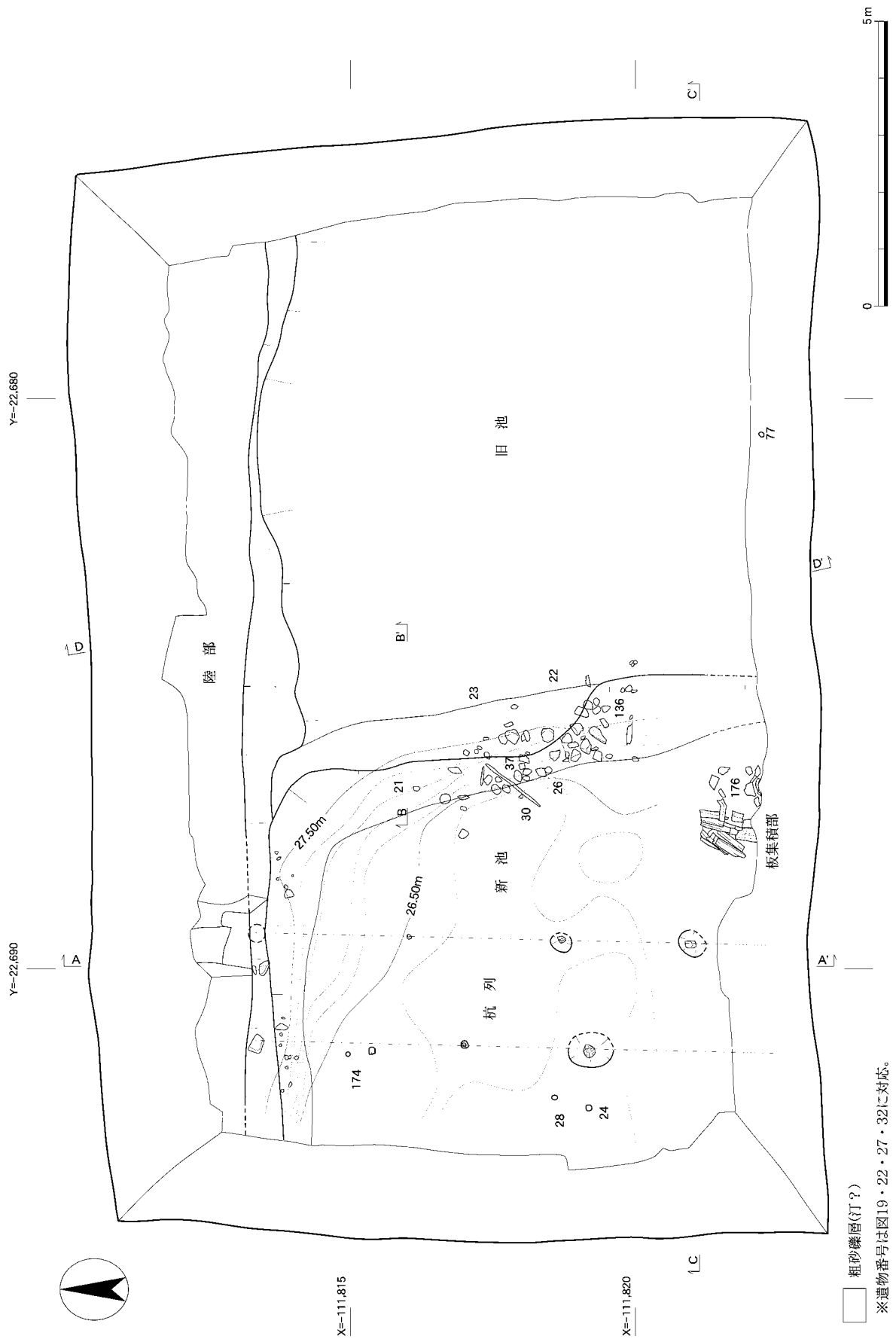


図10 安土桃山時代末から江戸時代前期遺構平面図 (1:100)

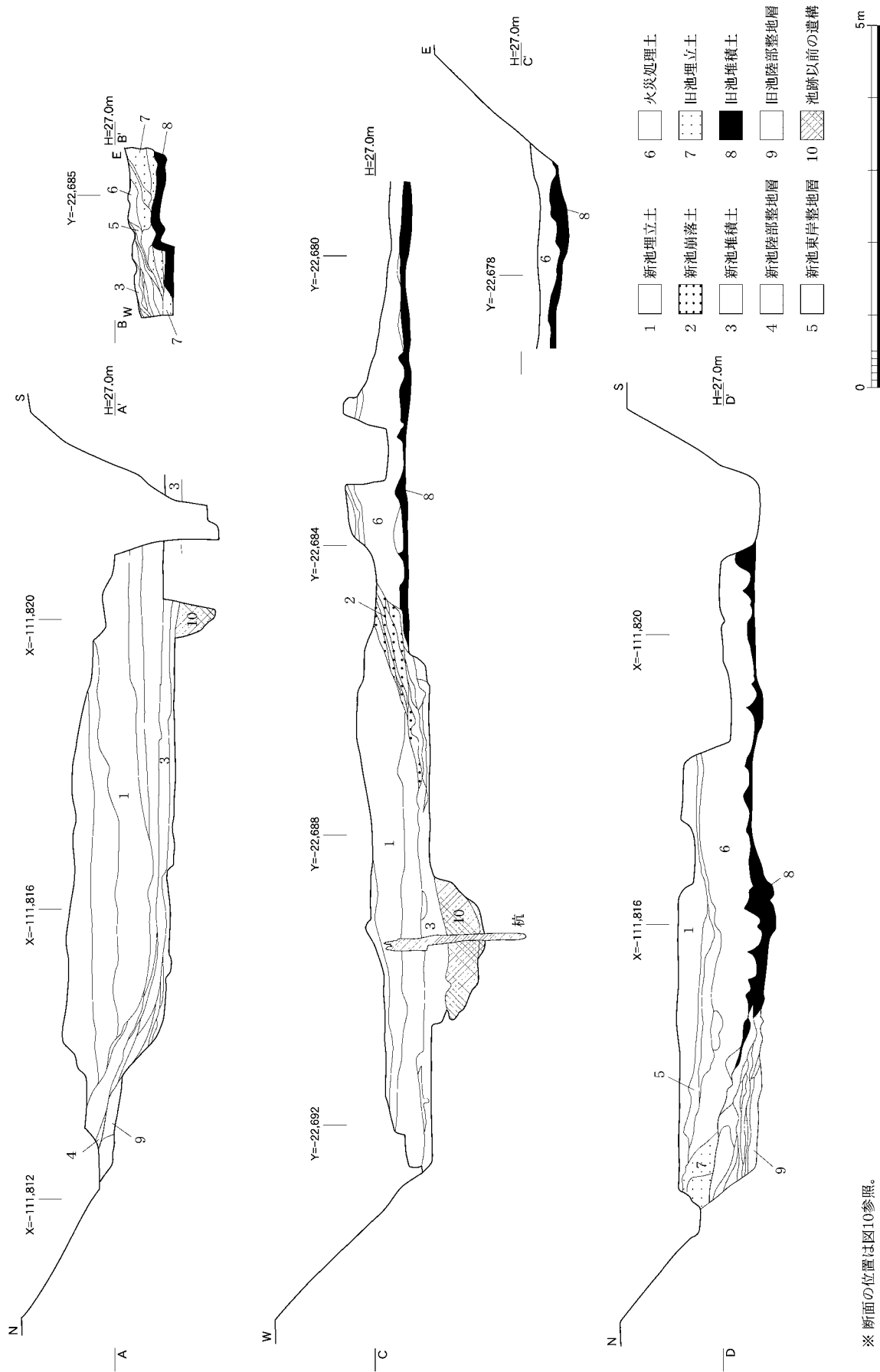


図 11 南北・東西畦土層断面図 (1 : 80)

※ 断面の位置は図10参照。

新池埋立土（図6・9・11） この整地層の下には、調査区東では新池の東岸を造った際の整地があり、調査区中央や調査区西では新池の肩口が崩れたときの土（新池崩落土）などがある。これら上部の整地層と新池埋立土が重層している箇所を確認できなかったが、層位関係と標高差から新池埋立土の方が古いといえる。新池を埋め立てた土は、綺麗な土であり、遺物が少量しか含まれていなかった。新池東岸の南側で検出した肩口の崩落土とみられる堆積は、調査区南壁を断ち割った際に断面でのみ確認している。調査区東半に新池東岸を造成したときの整地層が厚いところで約0.5 m入っており、北東から南西にかけて下がる斜め堆積になっている。北岸の一部では、旧池陸部に新池陸部整地層を確認している。

新池（図11～14） 調査区西半に広がる。北の汀から南へ8 m以上、調査区中央で検出した東の汀から西へ8 m以上になる方形の池と考えられる。堆積土の厚さは約0.1～0.2 mであるが、汀の高さから、水深は約0.8 m前後であったとみられる。池底は、平坦に造られている。調査区北に残る陸部は、旧池の陸部を0.4 m程度の嵩上げを行い踏襲していた。東の汀には、大きな石や瓦、材木などがみられたが、不規則・乱雑なあり方からみて、汀の意匠とは考えられない。しかし、この下層には、直径5 cm前後の粗砂礫を池の肩口から約1 mほどの幅で肩口に沿って敷いていることから、汀を造っていた時期があったと考えられる。また、池が機能していた一時期に、廃棄場所としての使用があったと考えられるような土器や植物遺体、動物遺体などの集積を、新池中央附近の断割で検出している。その他に、旧式務部棟基礎による攪乱層を利用して南側に東西方向の断割を入れた際に、調査区中央附近の池底で、瓦の集積および建物の屋根材とみられる薄い板材の集積を検出した。この出土した丸・

平瓦は、池の堆積土に完全に覆われていた。また、調査区南壁直下では、獅子口瓦が瓦当面向下に向けた状態で出土した。屋根材とみられる板材は、30枚以上が規則的に重なって出土した。屋根に葺かれていた状態を留めていると考えられ、45～55 cmの板材の長辺を約6 cm（2寸）ずつ前後にずらして重なった状態で出土している。左右の重なりについても、木釘孔の観察からずれ

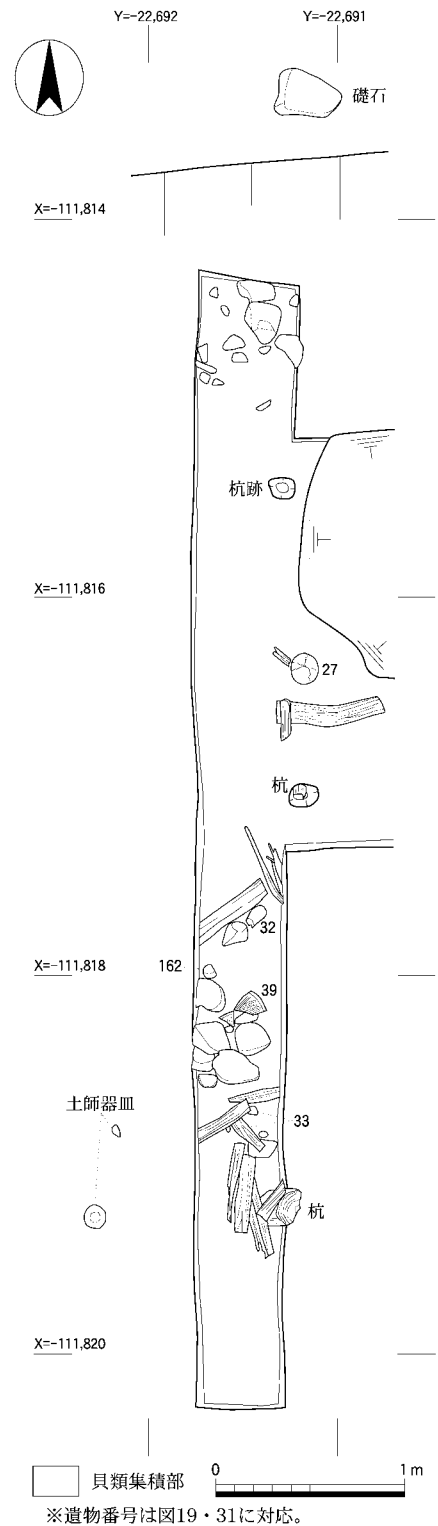


図12 新池西 遺物出土状況実測図(1:40)

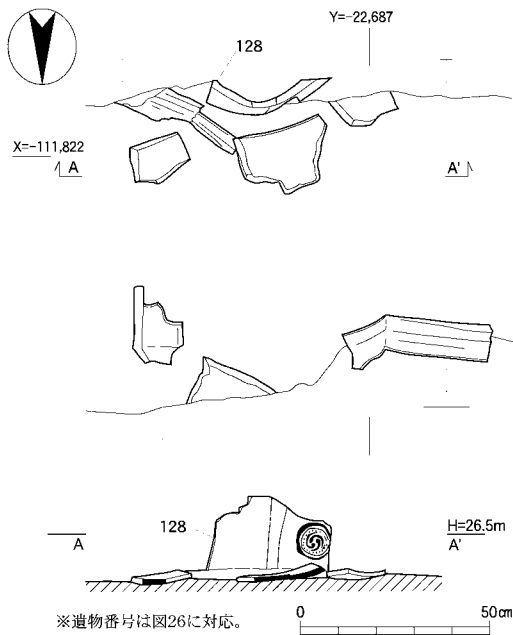


図13 新池 瓦出土状況実測図 (1:20)

が認められた。検出範囲は約1㎡で、南と北に更なる広がりを見せていたが、遺構保存のため、これ以上の調査を行っておらず、全容は不明である。材質は、スギとモミ属で、スギは少量であった。なお、新池の池底の深さは、旧池の池底の深さより約20～30cm深くなっている。遺物は、土師器皿、焼塩壺、焼締陶器壺・鉢、輸入磁器椀、石塔片、瓦などがあり、基石は3点出土している。

杭列(図15)新池の西端で、南北方向に連なる杭列を検出した。この杭列は、2列が平行しており、杭や杭跡が6本分認められた。杭の周りの堆積土やそれに含まれる薄い板材に乱れがないことから、杭が打ち込まれた時期は、堆積

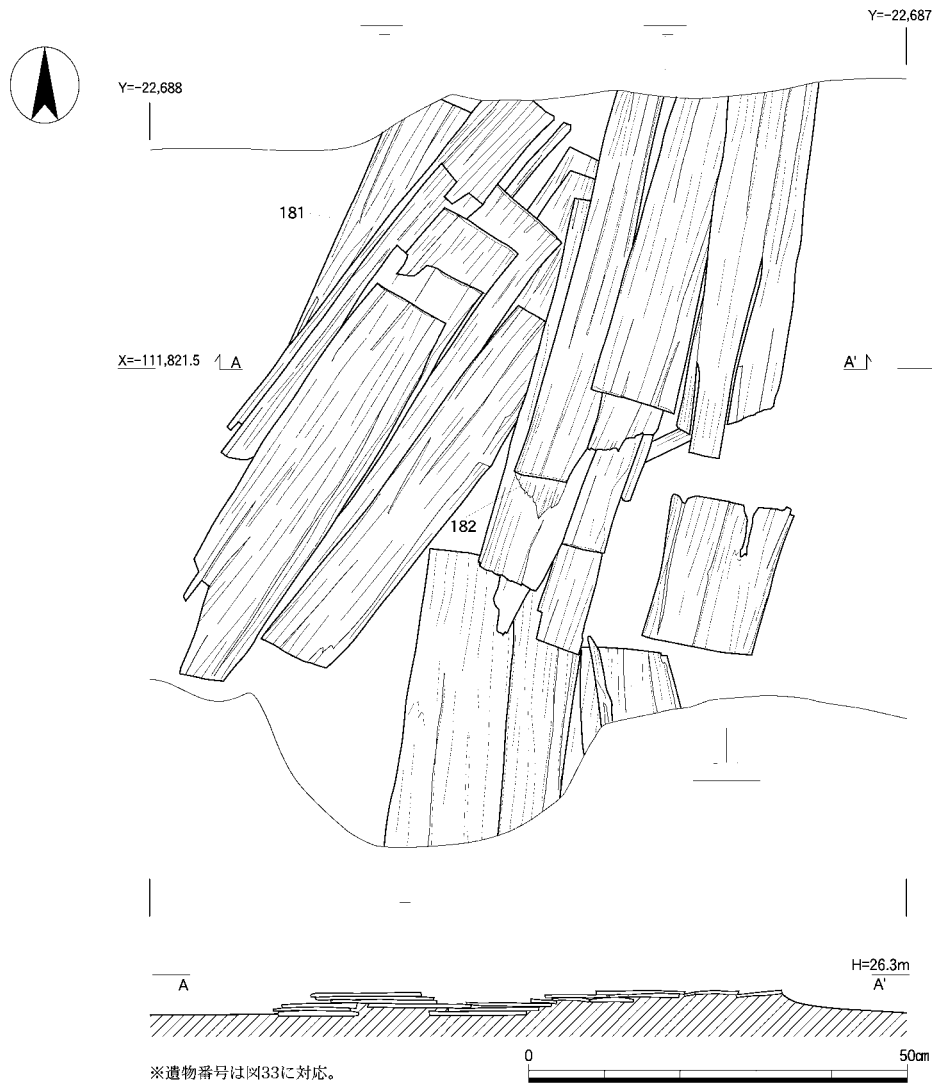
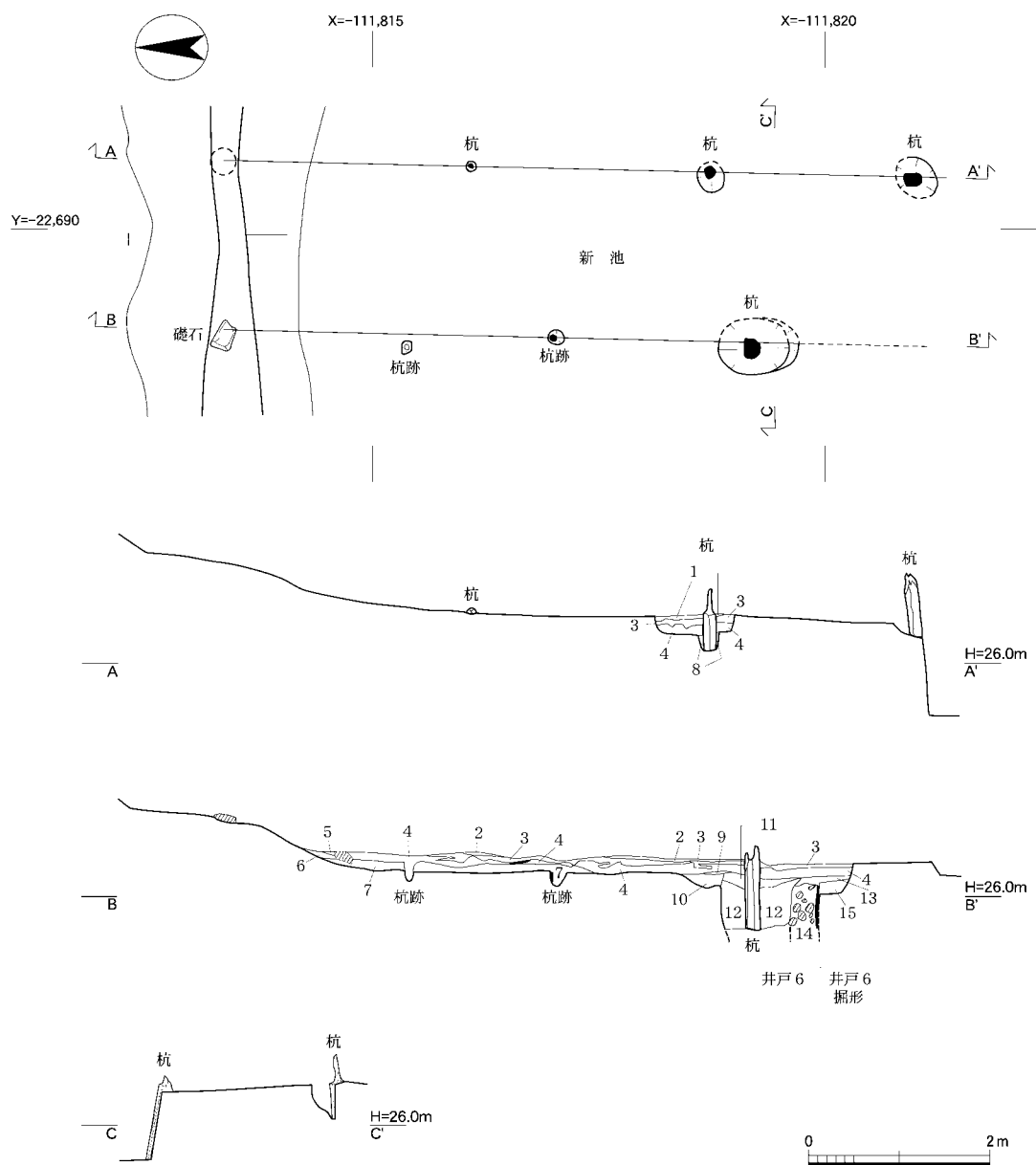


図14 新池池底 板材出土状況実測図 (1:10)





- 1 10YR4/6 褐色粘土混10YR4/3にぶい黄褐色砂質土 ブロック状の10YR6/8明黄褐色シルト多量含、径0.5～3 cmの礫・土師器少量含 [新池埋立土]
- 2 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色細砂混礫 (径1～5 cm) 粘性あり [新池埋立土]
- 3 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土 粒状の2.5Y5/6黄褐色シルト少量含 [植物根痕跡]
- 4 2.5Y3/1 黒褐色粘土 [新池堆積土]
- 5 2.5Y7/6 明黄褐色粗砂礫 (径1～2 cm) [新池堆積土]
- 6 2.5Y3/2 黒褐色微砂リン成分少量含 [新池堆積土]
- 7 7.5Y4/1 灰色粘土 粒状の5Y5/4オリーブ色粘土 径1～5 cmの礫少量含 [新池堆積土]
- 8 7.5Y5/2 灰オリーブ色粗砂礫 (径1～3 cm) [杭掘形]
- 9 2.5Y4/2 暗灰黄色粗砂
- 10 5Y4/2 灰オリーブ色粗砂礫 (径1～3 cm)
- 11 5Y3/1 オリーブ黒色粗砂 5Y3/1オリーブ黒色微砂・リン成分・板少量含 [杭掘形]
- 12 5Y3/1 オリーブ黒色粗砂 [杭掘形]
- 13 5Y3/2 オリーブ黒色粗砂 粘性あり、ブロック状の10Y4/1灰色粘土・2.5Y6/8明黄褐色シルト・炭少量含
- 14 5Y2/1 黒色粘質土、混粗砂礫 (径1～20 cm) 下層は礫のみ、5YR4/6赤褐色粘質土が礫表面に付着 [井戸6埋土]
- 15 5Y6/8 オリーブ色粘土、混7.5Y6/2灰オリーブ色粘土、2.5Y4/1 黄灰色粘土 [井戸6掘形]

図 15 杭列実測図 (1 : 80)

土が溜まる前、池が造られた当初と考えられる。杭は面取りがされており、直径は約 11 ～ 15 cm、先端は尖らせている。残りが良いもので残存長約 200 cmを測る。掘形は杭であるため、認められなかったが、東の杭列南端の杭と西の杭列南端の杭の 2 本については、掘形が存在していた。この 2 本の杭は、下層にあった古い時期の井戸を壊して打ち込まれていた。この杭打ちの作業に支障をきたした井戸枠材や埋土の大型礫を取り除いたと考えられることから、この 2 本のみ掘形が形成されたとみられる。また、陸部の標高 27.00 m 附近に、長径約 30 cm、短径約 20 cm の上部が平らな石が据えられていた。西側の杭列の延長上に当たることから、礎石である可能性が高い。しかし、東側には対になる礎石が認められなかった。陸部が削平されたり、石が動かされたのか、もともとなかったのかは定かではない。東杭列の間隔は、北から 2.6 m、2.3 m である。陸部に礎石があったと推定すると北杭との間隔は、2.7 m と考えられる。西杭列の間隔は、陸部の石と北の杭跡の間が 3.6 m、杭跡と南側の杭の間が 1.4 m である。東杭列と西杭列の杭は、東西には並ばず、互い違いになっている。東西間は約 1.9 m である。東杭列は西側に、西杭列は東側に内傾している。東西の杭が並ばないことや、杭の間が不均一であることなどの疑問は残るが、現状では杭列は橋脚跡と考えている。

#### (6) 安土桃山時代から江戸時代前期の遺構 (図 10)

江戸時代前期の整地層に埋め立てられた旧池がある。

旧池 (図 11) 調査区東半で検出した。調査区北端で検出した北の汀から南へ 8 m 以上、東西の検出長 9 m 以上である。池の南側と東側が調査区外のため、全体の大きさは不明である。堆積土の厚さは約 0.1 ～ 0.4 m であるが、汀の堆積土から、池の水深は約 0.6 m 前後であったと考えられる。池底は凹凸があり、その差は約 0.3 m である。この池は、焼け瓦を大量に含む火災処理土によって埋め立てられていた。池の堆積土には、安土桃山時代末から江戸時代前期と考えられる瓦や焼塩壺など少量の遺物が含まれ、火災処理土にも同時期の遺物が含まれていた。調査区北端で検出した陸部は、堅く叩き締められていた。調査区中央で陸部に断割を入れて、断面確認したところ、数層の整地層を検出した。上の整地層ほど、粘土や粘質土を使用し、適度に礫を混ぜ、堅く叩き締めていた。下層は、地山の土などを使用して整地を行っており、上層ほどではないが叩き締めを行っていた。下層はほぼ平行、上層は陸部の高い部分から低い部分に、斜めに土を入れている。なお、調査区西端で新池の陸部を観察したところ、同様の整地を確認している。

#### (7) 時期不明の遺構

新池の堆積土の厚さや、杭列の状態を確認するために、新池西・南側で断割を行った。その際に、北側で井戸 6、南側で井戸 7 を検出した。

井戸 6 (図 16) 調査区西半の新池に南北方向の断割を入れた際に、新池の下層で検出した。断割幅が約 0.5 m であるため、井戸全体を検出していない。井戸の北側 3 分の 2 は、江戸時代前期の杭の掘形によって壊されており、井戸枠が 1 ～ 2 枚抜かれていた。北側 1 枚と南側 3 枚の井戸

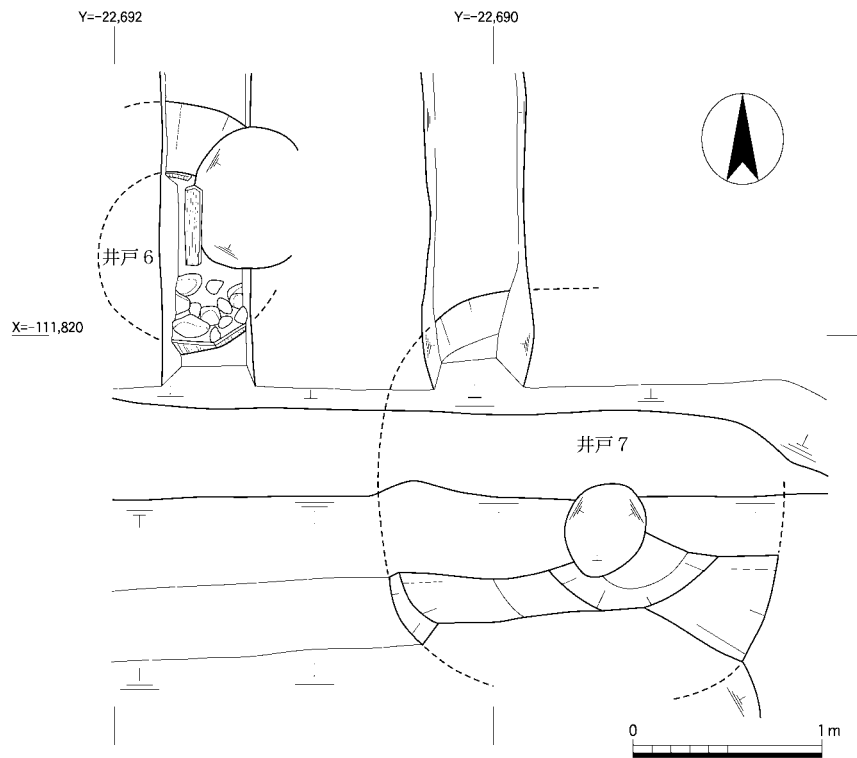


図 16 新池下層検出遺構平面図 (1 : 40)

枠は残っており、長さ 40 cm 以上、幅約 20 cm、厚さ約 2 cm の板材を使用している。推定 12 ～ 14 枚の板材を使った多角形井戸と考えられるが、詳細は不明である。掘形は北側に約 0.4 m、南側に 0.4 m 以上確認することができた。埋土は、黒色粘質土混粗砂礫で、直径 10 ～ 20 cm の礫が主体であった。掘形埋土は、オリーブ色粘土と灰オリーブ色粘土、黄灰色粘土の混土である。時期は不明であるが、新池より古い井戸であることなどから、安土桃山時代以前の井戸と考えられる。

井戸 7 (図 16) 南壁断割を入れた際に、新池の下層で検出した。東杭列最南端の杭が、この井戸の真中に打ち込まれていた。井戸枠などは全く残っていない。井戸の上層には、新池堆積土が入り、井戸中層にはその堆積土に酷似した土が入っていた。そのことから、杭打ちの際に井戸が壊された可能性が高いが、詳細な時期については遺物が出土していないため不明である。埋土は、オリーブ黒色粘土に礫や細砂を少量含むものと粘土に粗砂が入るものからなる。直径約 1.9 m の掘形を持つ円形または方形の井戸であったと考えられる。井戸 6 同様、安土桃山時代より前に造られたと考えられる。

### 3. 遺 物

#### (1) 遺物の概要 (表4)

出土遺物は、整理箱に63箱あり、そのうち木製品を10箱含む。遺物の大半は、池跡を埋め立てるのに使用した火災処理土や整地層から出土した。整地層出土の遺物は細片が多く、時期を特定できる遺物はほとんど出土しなかった。また、火災処理土の遺物は、安土桃山時代末から江戸時代前期の焼け瓦が主体であり、土器類はわずかであった。弥生時代から鎌倉時代にかけての古い時期の遺物は、旧・新池堆積土中だけではなく、陸部整地層、新旧池埋立土（整地層）などに混入していた。特に、緑釉陶器椀・皿の底部や口縁部細片、青磁や白磁片などの平安時代中期から後期にかけての遺物が多く、ほとんどの遺物が磨滅していない。これらの遺物は、旧・新池を掘削した土の中に含まれていたとみられることから、古い時期の遺構は大規模に開発された安土桃山時代末から江戸時代前期頃に壊されたと考えられる。その他に、安土桃山時代以前に造られたと考えられる井戸6から、瓦が出土しているが、安土桃山時代の瓦の可能性もあり、特定することができない。木製品は、江戸時代前期の新池からの出土が多く、釘が打ち込まれたままの建築部材や、木釘孔の開いている薄い板材が多く出土している。

表4 1次調査遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代	弥生土器		弥生土器2点		
平安時代 ～鎌倉時代	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦質土器、白色土器、輸入磁器、焼締陶器、瓦など		土師器6点、須恵器3点、緑釉陶器4点、灰釉陶器1点、施釉陶器1点、瓦質土器2点、白色土器1点、輸入磁器6点、焼締陶器1点、軒丸瓦1点、軒平瓦1点		
鎌倉時代 ～室町時代	金属製品、瓦		銭貨1点、丸瓦1点、平瓦1点		
桃山時代末～ 江戸時代前期	土師器、施釉陶器、輸入磁器、瓦、木製品、植物遺体など		土師器2点、施釉陶器1点、輸入磁器1点、軒丸瓦1点、丸瓦2点、平瓦1点、石製品1点、木製品2点、蓮の種1点		
江戸時代前期	土師器、施釉陶器、輸入磁器、瓦質土器、焼締陶器、瓦、木製品、金属製品、植物遺体、動物遺体など		土師器24点、施釉陶器13点、瓦質土器3点、輸入磁器5点、焼締陶器18点、土製品1点、軒丸瓦9点、軒平瓦12点、道具瓦8点、丸瓦7点、平瓦2点、石製品5点、金属製品5点、木製品12点		
江戸時代中期	土師器、肥前磁器、施釉陶器、瓦など		土師器10点、肥前磁器1点、丸瓦1点		
江戸時代後期 以降	瓦など		丸瓦3点、平瓦1点		
合 計		75箱	184点 (12箱)	63箱	0箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より12箱多くなっている。

また、植生や食生活がわかるものとして、安土桃山時代末から江戸時代前期の旧池から蓮の種（花托）、江戸時代前期の新池から桃の種子、梅の種子、山椒の実、松の種子、大量の瓜の種子、魚骨、貝など植物・動物遺体が出土した。

## (2) 土器類

井戸4出土土器（図17）1～10は土師器皿である。1～8は口径10.8～13.6cm内、9・10は口径17.0～18.5cm内の大型皿である。何れも内面に圈線が入り、器高が低い。1・4～7は口縁端部付近が煤けるなどしているため、灯明皿として使用されていたと考えられる。4・6・7の色調は、黒褐色から灰黄褐色を呈する。11は肥前磁器の染付椀である。器厚が薄く、高台がU字形を呈する。外面に帆掛け船と鳥、高台内面に圈線と「大明年製」の崩れた文字を描く。

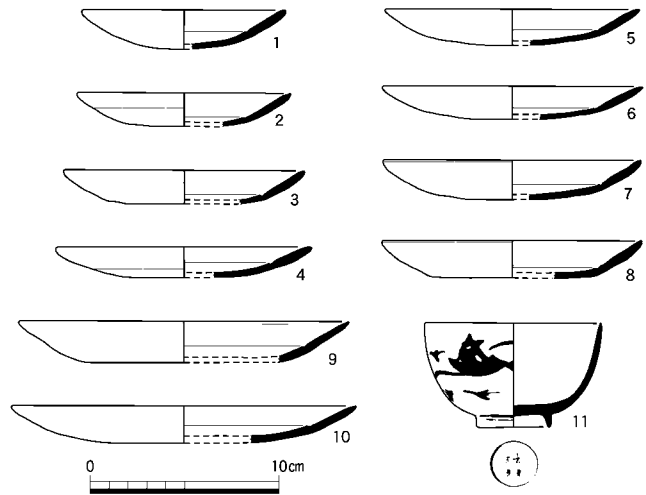


図17 井戸4出土土器実測図（1：4）

整地層・新池埋立土出土土器（図18）12は整地層から出土した肥前陶器（唐津系）鉢底部である。13～19は新池埋立土から出土した。13は土師器皿で、内面に圈線が入る。14は焼塩壺である。口縁部内面と外面を丁寧にナデ調整する。内面頸部より下は布目圧痕が残る。15は口縁部が大きく開き、口縁端部が立ち上がる焙烙である。外面に煤が付着している。16は施釉陶器椀底部である。削り出し高台で、内外面に鉄釉を掛ける。17は輸入磁器染付椀片である。口縁部が一度外反し、立ち上がりながら内湾する器形で、口縁が波状になっている。外面に鳥、内面に花を描く。18・19は信楽焼の焼締陶器播鉢である。18は播り目を5本単位で、口縁端部内面に沈線状の段を持ち、口縁部外面を強くなでる。19は播り目を6本単位で底部から施文する。底部付近は使用痕のため、磨かれた様に平滑になり、播り目の段差がわかりにくくなっている。

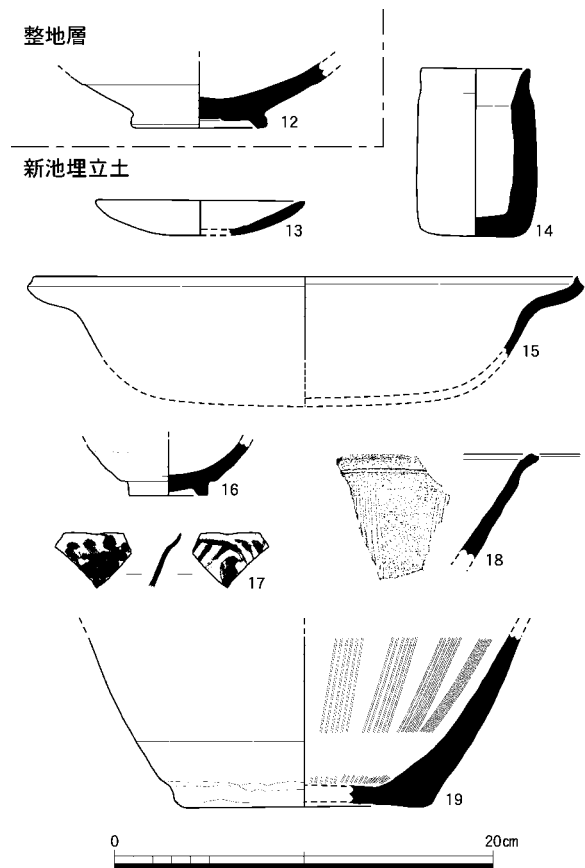


図18 整地層・新池埋立土出土土器実測図（1：4）

新池堆積土出土土器（図 19）20～31 は土師器皿である。20～30 は口径 9.8～12.4 cm、31 は口径 14.8 cm である。内面に圈線が入るものもあるが、浅く、頭と尾が繋がらないものが多い。口縁端部内外面を丁寧になでる。底面がわずかに丸くなるものと、平坦になるものが混在している。22 の内面には工具痕とみられる沈線が数条付く。32 は外面から口縁部内面を丁寧になでる焼塩壺である。内面には粘土紐痕や布目圧痕が残り、布目の上にはオサエをした痕がある。33 は輸入磁器染付椀で、外面に鳥のような文様を描く。口縁端部内面を斜めに所々面取りしているため、細かい波状を呈する。34 は肥前陶器椀である。灰釉を内外に掛ける唐津焼で、高台接地面から高台内に流れた釉薬が付着している。35 は施釉陶器皿であり、美濃焼と考えられる。内面に灰釉、口縁部内面から外面に緑釉が掛かっている。36 は瓦質土器鉢である。内面を丁寧に磨く。37 は焼締陶器壺底部である。内面に同心円の当具を使用したタタキ痕がナデ消された状態でみられ、外面にはなでた時の工具痕とみられる沈線が数条平行に残っている。九州系である。38・39 は丹波焼の播鉢である。39 の内面には、6 本単位の播り目と二重の半円が刻まれている。口縁部内面に強い沈線が入り、口縁部に片口が付く。

火災処理土出土土器（図 20）40～42 は土師器皿である。40 は口縁端部外面が肥厚する。43

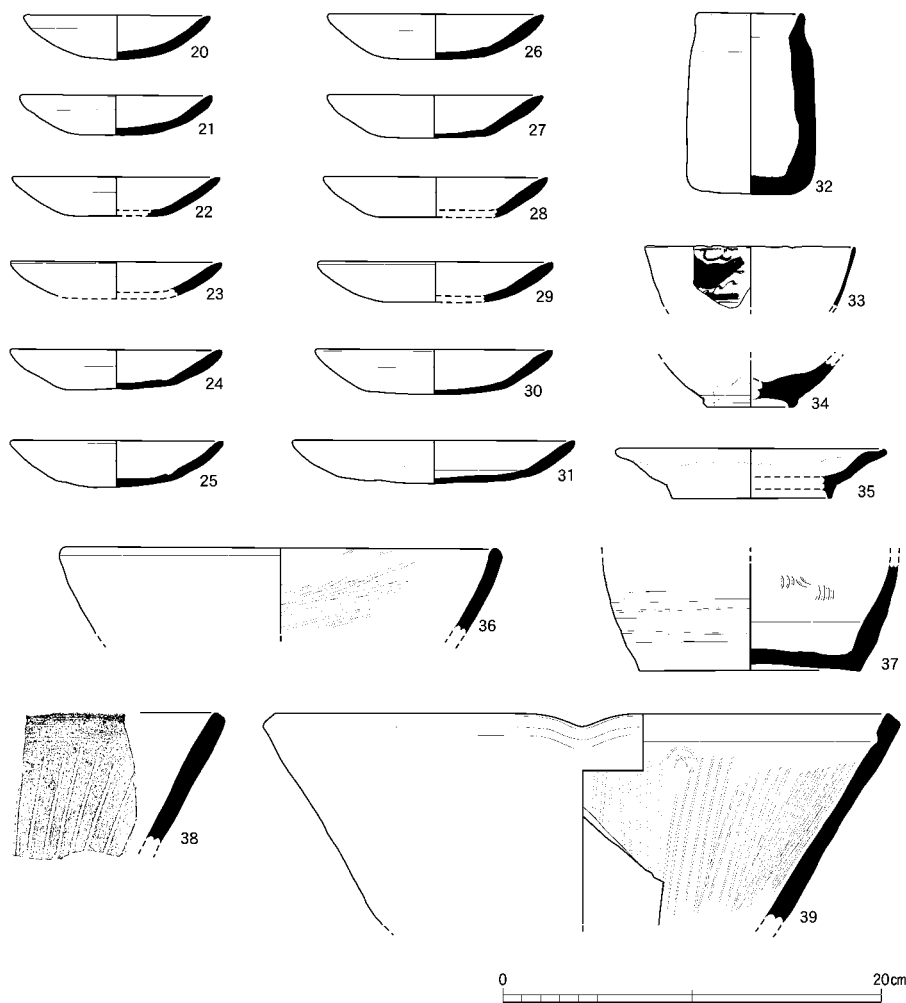


図 19 新池堆積土出土土器実測図（1：4）

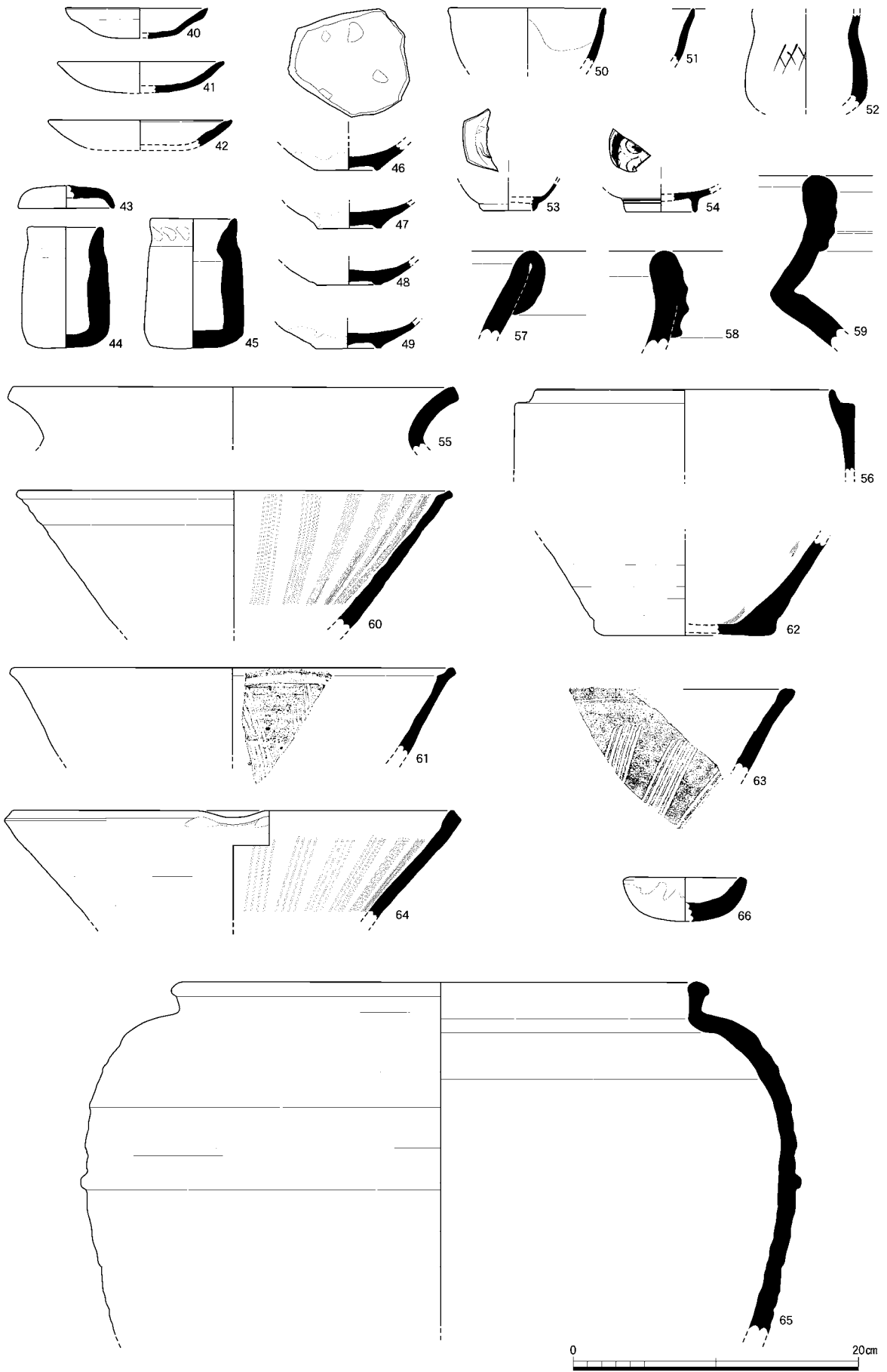


图 20 火災処理土出土土器実測図 (1 : 4)

は焼塩壺蓋、44・45は焼塩壺である。44・45は口縁部内面か外面にかけてナデ調整を行うが、内面に布目圧痕を残す。内面下半部に粘土を足す。45の口縁部外面には指頭圧痕がある。46～49は肥前陶器碗の底部である。内外面に灰釉を掛ける。内面底部付近に胎土目積の痕跡がある。50・51は瀬戸・美濃系施釉陶器碗である。50は鉄釉の上に透明釉を流し掛ける。51は透明釉を掛ける。52は唐津焼の向付である。内外面をなで、外面下部を削る。内面に顔料とみられるにぶい赤色が塗られている。外面胴部中央に斜格子文を描く。釉薬は掛かっていない。53・54は高台に離れ砂が付着する輸入磁器染付碗である。53の文様は不明、54は花文を描く。両方ともに二次的な被熱痕跡が認められる。55・56は瓦質土器甕と火入れである。57～59・65は焼締陶器甕・壺である。何れも産地は、備前である。65の胴部には突帯が付く。60～64は焼締陶器播鉢で、60～62が信楽、63・64が丹波である。播り目は4～5本、ナデ調整である。66はとりべである。内面から口縁部外面に釉が発生し、内面に銅とみられる緑灰色の異物が付着している。

旧池埋立土出土土器(図21) 67はつぼつぼである。内外面をなでる。68は焙烙である。頸部から大きく外反し、口縁端部内面と外面をそれぞれ摘み上げる。69は輸入磁器染付碗である。見込みに二重圏線と唐草風の文様、外面に不明文様、高台外面に二重圏線を描く。70・71は瀬戸・美濃系施釉陶器碗である。内外面に鉄釉を掛ける。72～74は信楽の焼締陶器播鉢である。播り目は72・74が5本、73が4本単位となり、74の内面底には2本以上の平行沈線が引かれている。75は焼締陶器盤である。内外面をなでる。口縁部内面を強くなでているので、段状になっている。

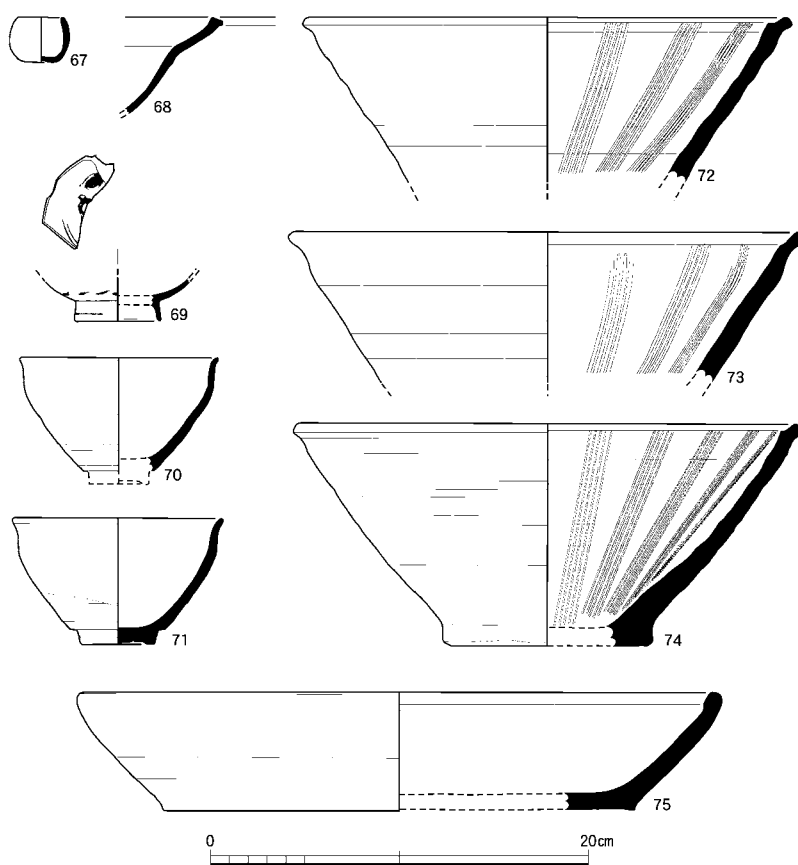


図21 旧池埋立土出土土器実測図(1:4)

内面に陶器片を置いた痕があり、重ね焼の痕跡とみられる。産地は丹波である。

旧池堆積土出土土器(図22) 76は土師器皿であり、内面に浅い圏線が廻る。底部は平坦に近いが、丸みを帯びる。77は焼塩壺である。底部から口縁部にかけて、わずかに内傾している。口縁部内面から外面と内面胴部中央付近をなでる。内面に布目圧痕が残る。内外面とも器面が荒れている。78は施釉陶器皿である。内外面に黄釉を掛ける。産地は瀬戸と考えられる。

弥生時代・平安時代から



鎌倉時代の土器 (図 23)

79・80 は弥生土器の底部である。79 の内面には明瞭なハケメ調整があり、その他はナデ調整である。81～84 は土師器皿である。81 は口縁端部を立ち上げるいわゆるコースター形を呈する。82・84 は外面上部を強くなでる。85・86 は高杯の脚部である。杯部と脚裾部を欠損する。85 は7～8面の面取りを行う。86 は17面前後の面取りを行う。81・83・86 は白色土器である。87 は土師器甕である。口縁部内面はハケメ調整を行う。88～90 は須恵器である。88 は高台を貼り付ける杯身である。89・90 は蓋であり、89 はつまみが付かない器形と考えられる。91 は古瀬戸の卸皿である。底部を糸切り、内面を深い沈線で卸目を付ける。92 は灰釉陶器椀である。内外面に自然釉が発生している。外面に藁の繊維とみられる圧痕がある。93～95 は緑釉陶器椀、96 は耳皿である。93 は底面に糸切り痕があり、内面から高台にかけて緑釉を施す。内面に重ね焼の痕跡が認められる。94 は内外面に緑釉を掛けるが、高台接地面から高台内は釉が薄く付着している。96 は底面に回転ヘラ切りを行う。97 は内面を細い棒状工具で磨く瓦器椀の口縁部片、98 は瓦質土器羽釜である。99 は常滑焼の甕口縁部片である。100～102 は輸入白磁、103・104 は輸入青磁である。100 は口縁端部内面の釉を剥ぐ椀、101 は皿である。102 は内面に櫛描文

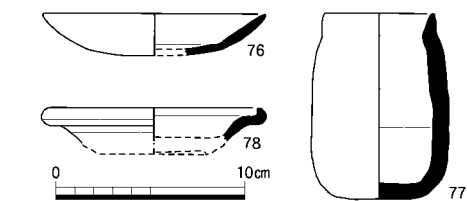


図 22 旧池堆積土出土土器実測図 (1:4)

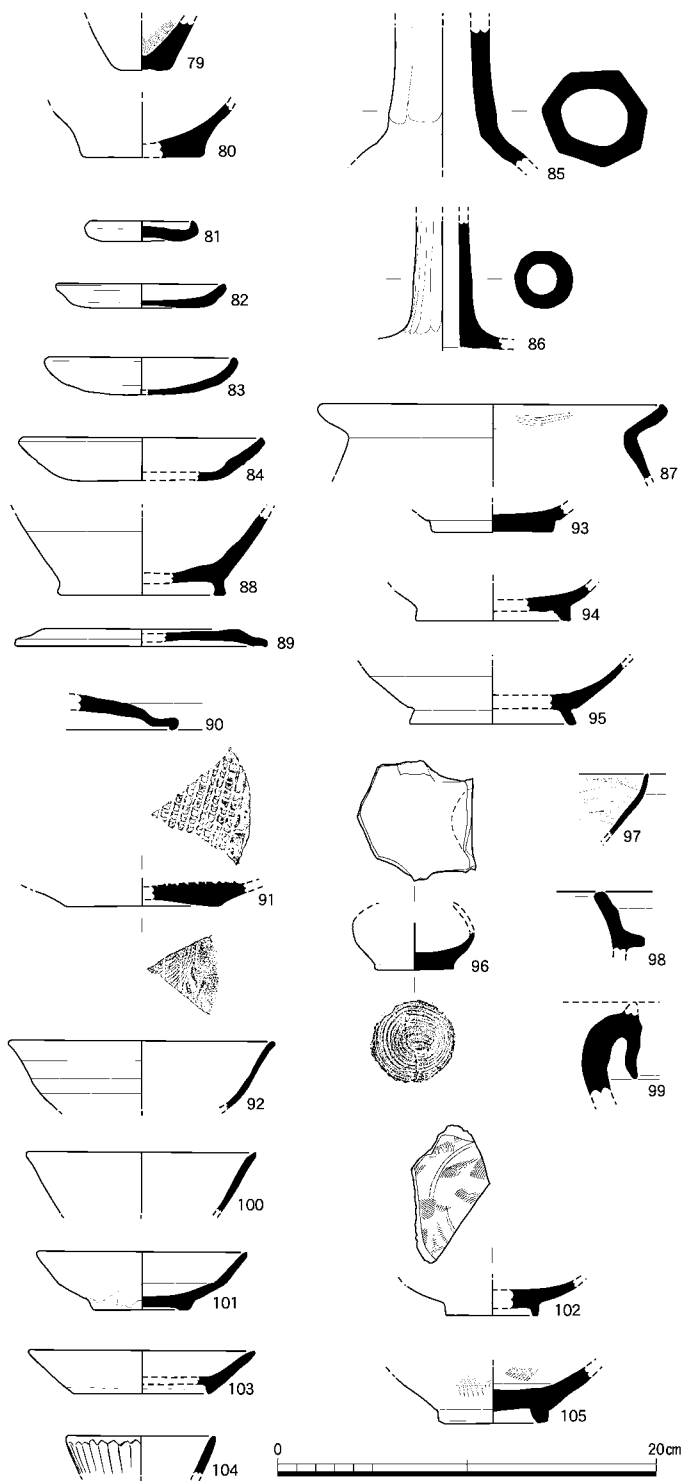


図 23 弥生時代・平安時代から鎌倉時代の土器実測図 (1:4)

を持つ椀底部である。103は輸入磁器の青磁皿である。高台接地面付近を釉剥ぎする。高台内に白色釉を掛ける。104は鎬蓮弁が線状に描かれた椀である。口径が7.8cmと小振りである。105は猫描きの同安窯椀とみられる。

### (3) 瓦類

瓦は、大半が火災処理土から出土した。火災処理土出土の瓦は、軒丸・軒平瓦、丸・平瓦、道具瓦などである。軒丸・軒平瓦や平瓦は少なく、熨斗瓦とみられる厚さ約1.5cmの瓦の割合が高い。多くの瓦は焼けて橙色や白色に変色し、丸・平瓦の中には、藁状繊維の入った土が焼けて付着しているものもある。瓦は割れているため、掲載した瓦以外は元の大きさを推定できるような資料と成りえなかった。特に、平瓦は長さや幅を推量できる瓦が出土していない。

瓦の調整方向は、瓦当面に直交する場合は縦、平行する場合は横と記述する。瓦当裏面は上下または円形のナデやケズリ調整であることから、ここでは特に方向は記述しない。

軒丸瓦(図24) 106～115は、火災処理土や旧池埋立土、新池東岸整地層などから出土した三巴文軒丸瓦である。造りは基本的に同じで、凸面を縦ケズリ、瓦当側面・瓦当裏面をケズリ、瓦当裏面縁をナデ調整する。凹面は確認したかぎりでは、横方向の細線が連続して入る鉄線引きである。珠文の数は15～17個が主流で、大きいものが多い。巴はすべて左巻きで、巴の頭は丸いものや扁平なものが混在し、巴の尾は離れている。刻印の押された瓦はない。珠文の間に「丁」を反転したもの、あるいは「七」とみられる文字が入っている107があるのみである。

軒平瓦(図25) 116～127は軒平瓦である。凹・凸面を縦ケズリ、瓦当裏面を横ケズリ、瓦側面をケズリ調整する。116などは瓦当上部の凹面を横ケズリして、面取りを行っている。116～120は線状の唐草文である。116と117、118と119はそれぞれ同文である。116の中心飾りは丁子とみられ、線で表現されている。120の上部は平瓦との接合部が綺麗に剥がれたため、接合時に付けた刻み目が良く観察できる。121・122は主葉の先端が凹型に窪む唐草文である。121は主葉が反転して巻く唐草であるが、122は主葉の先が伸びきった唐草である。123～125は、他の瓦に比べ小型である。124は主葉の先端中央が窪む。対して、125・126は主葉先端部が大きく丸く出っ張る唐草文である。127は線状唐草文で、127の唐草先端は、116などの様には巻き込みが強くない。

道具瓦(図26) 128は獅子口瓦である。128は三巴文軒丸瓦の瓦当部を正面上部に3つ、正面下部に1つ、側面に1つ配する。上部両脇の瓦当部は、外側に張り出していない。正面向かって左側の側面は欠損しているが、右側面同様に巴文の瓦当部が付けられていたと考えられる。正面上部と下部の巴文瓦当部の間には、山形の突帯が貼り付けられている。瓦本体の面は丁寧にケズリ調整を行う。瓦当部や突帯が貼り付けられた後は、周辺をなぞるように綺麗になでている。裏面中央には、縦方向の把手が付けられていた痕跡が残っていたが、根元以外は欠損していた。調整はケズリである。側面裏側は段状の凹凸が付けられている。129は獅子口瓦の軒丸瓦当部である。周辺部が欠損しているため、上下がわからない。巴文の中心に、焼成前に表から開けられた孔が

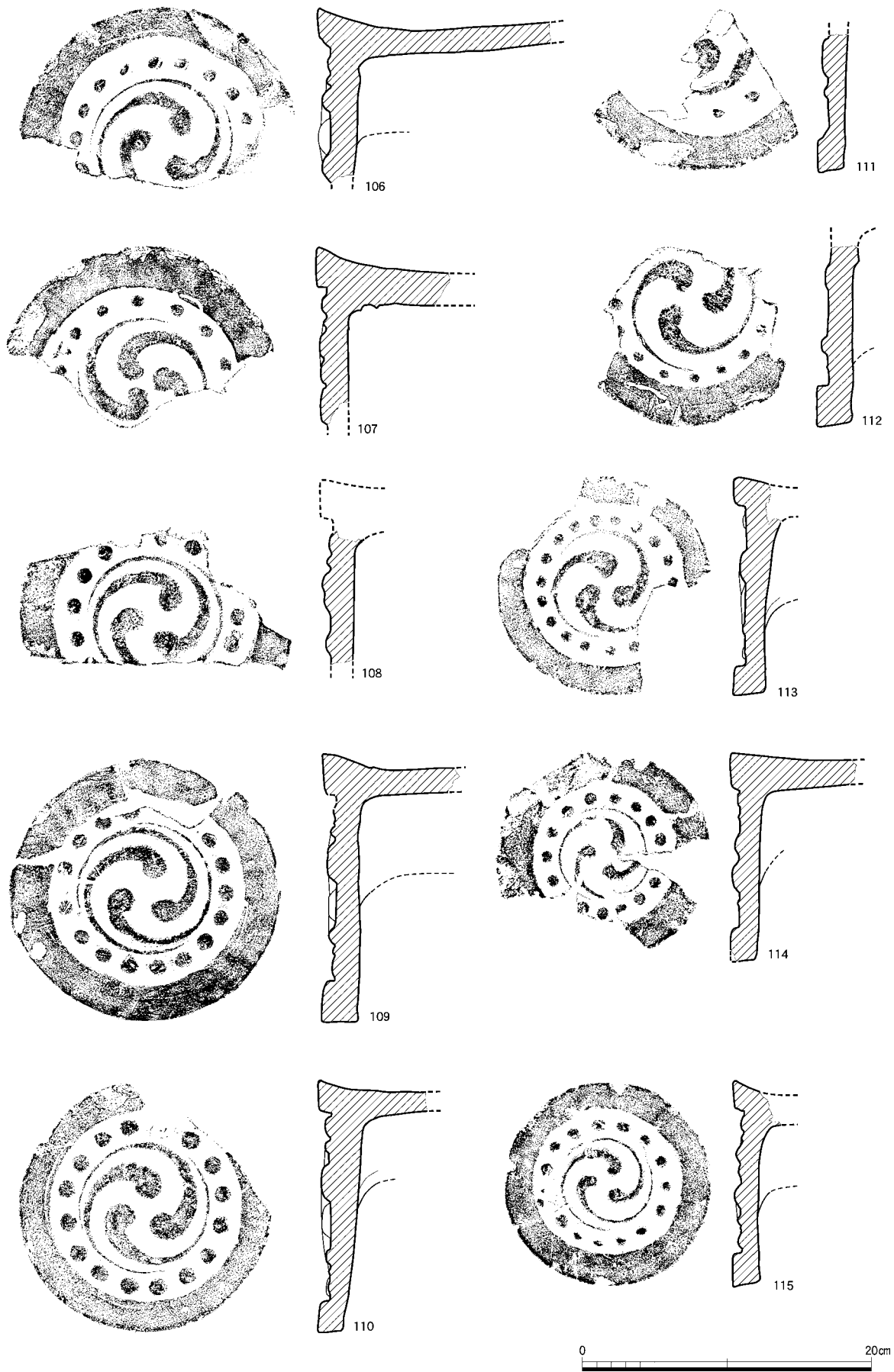


图 24 軒丸瓦拓影・実測図 (1 : 4)

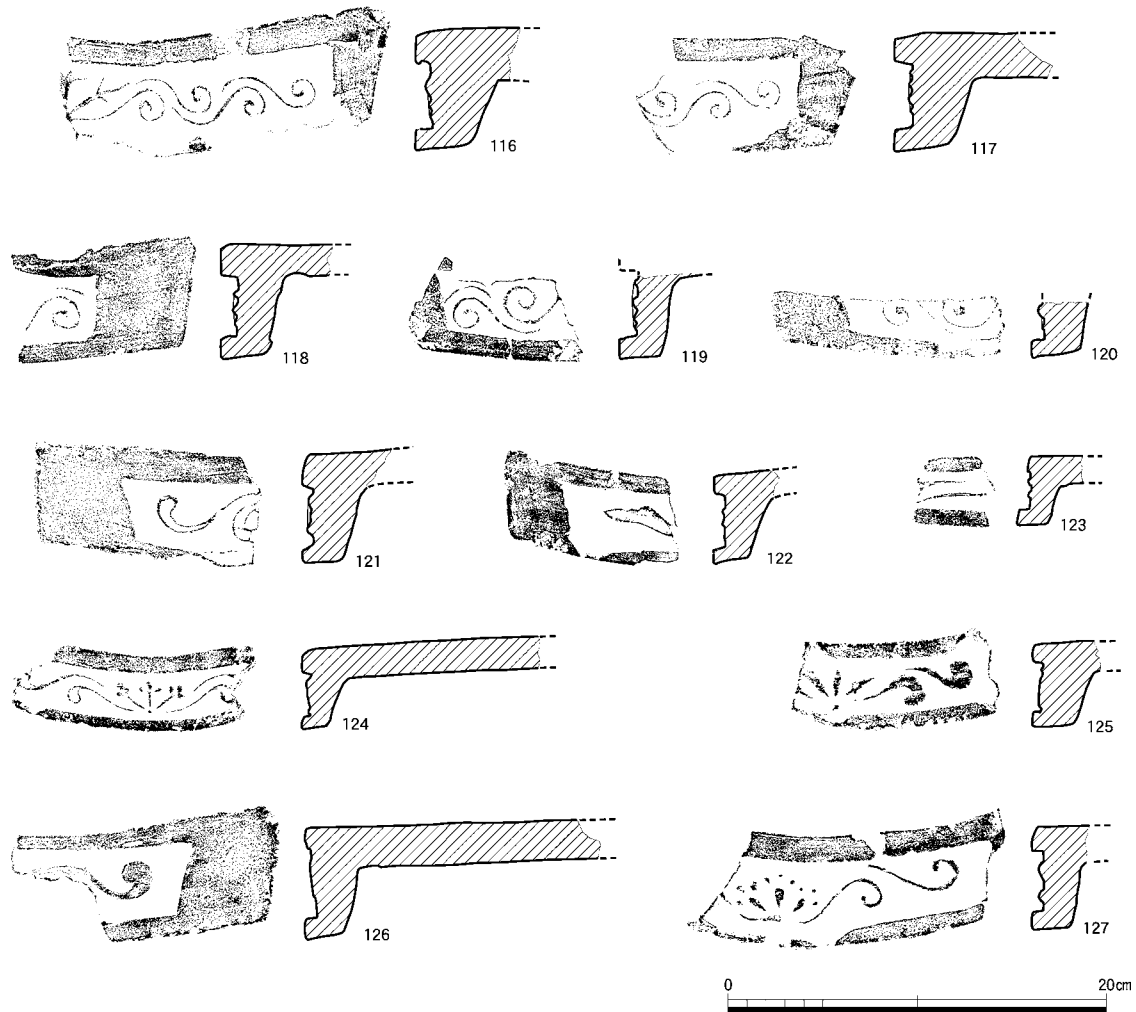


図 25 軒平瓦拓影・実測図（1：4）

貫通している。瓦当部周辺を貼り付け時になでる。裏面は荒い縦方向のケズリが施されている。130は熨斗瓦の間に装飾用として使用される屋瓦と考えられる。五七桐文である。同じ文様の瓦が現在でも黒書院の屋瓦として、使用されている。型抜き後に、丁寧にナデ調整し、桐の花や葉脈の細かい表現は棒状工具を使用して施文したとみられる。裏面に縦方向の把手が付く。裏面の調整は荒いケズリで、把手はケズリ、把手貼り付け後に接合部を丁寧になでる。桐文の周辺は欠損しているため、周縁の存在は不明であるが、向かって右端の割れ目に刻み目が入っていることから、周縁があった可能性も考えられる。131は表面に半円を線刻する瓦片である。棟端瓦などの装飾瓦の一部とみられるが、詳細は不明である。裏面を荒く削る。132～134は切隅瓦などであると考えられるが、用途は不明である。133の凹面に焼け土が付着している。135は平面が二等辺三角形になると考えられる埴である。

丸瓦（図 27） 136～139は長さ 34～43 cm、142・143は長さ 25・27 cmの丸瓦である。140・141は、幅がほぼ 142と同じ大きさであることから、長さも同じくらいであったと考えられる。136・142・143は凹面に斜めの糸切り痕跡が認められる。137～139・141は横方向の細線が縦方向に連なる鉄線引き痕跡が残る。また、136・139・142には、角材で削ったとみられ

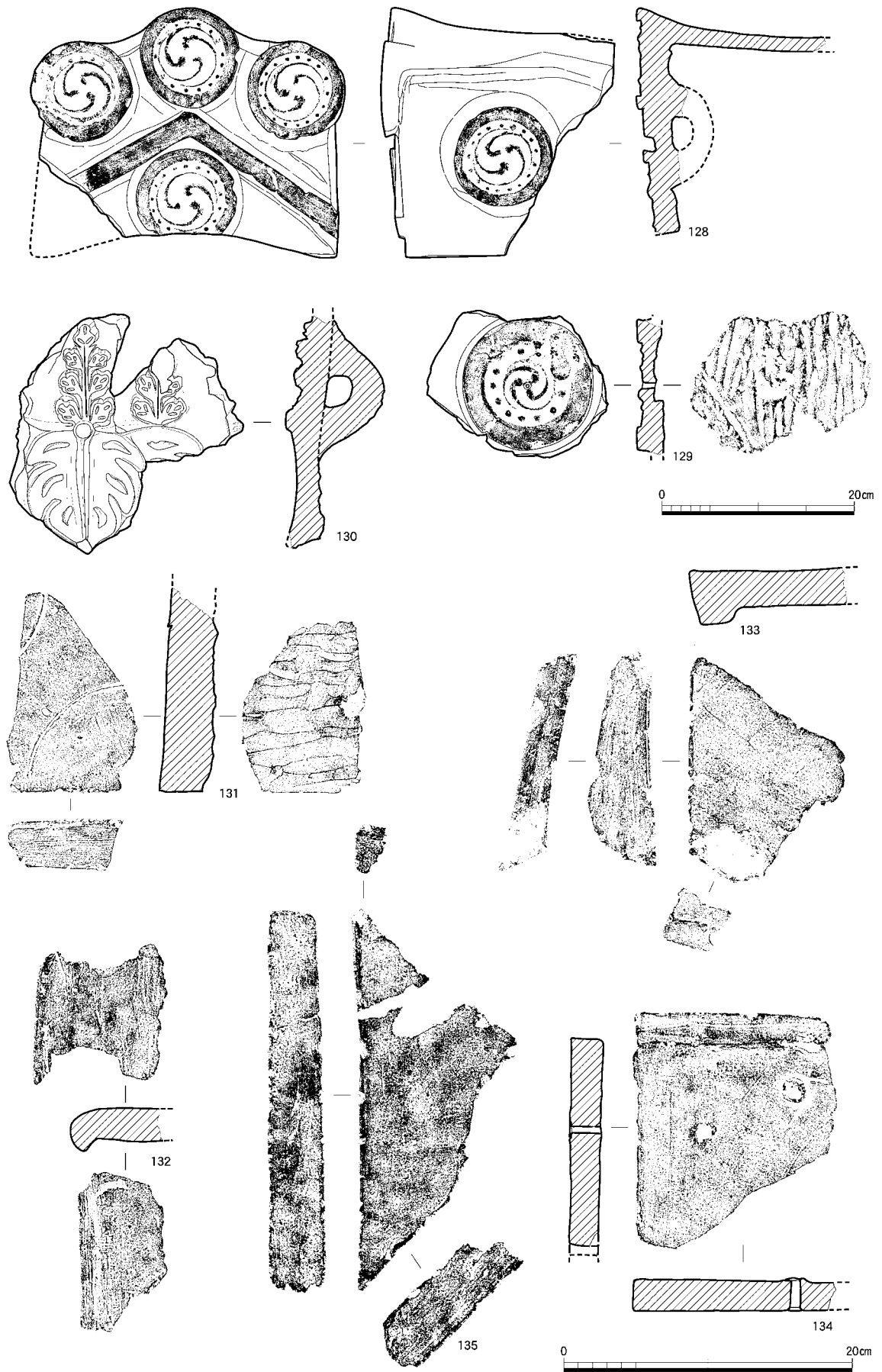


図 26 道具瓦拓影・実測図 (128～130は1:6、その他は1:4)

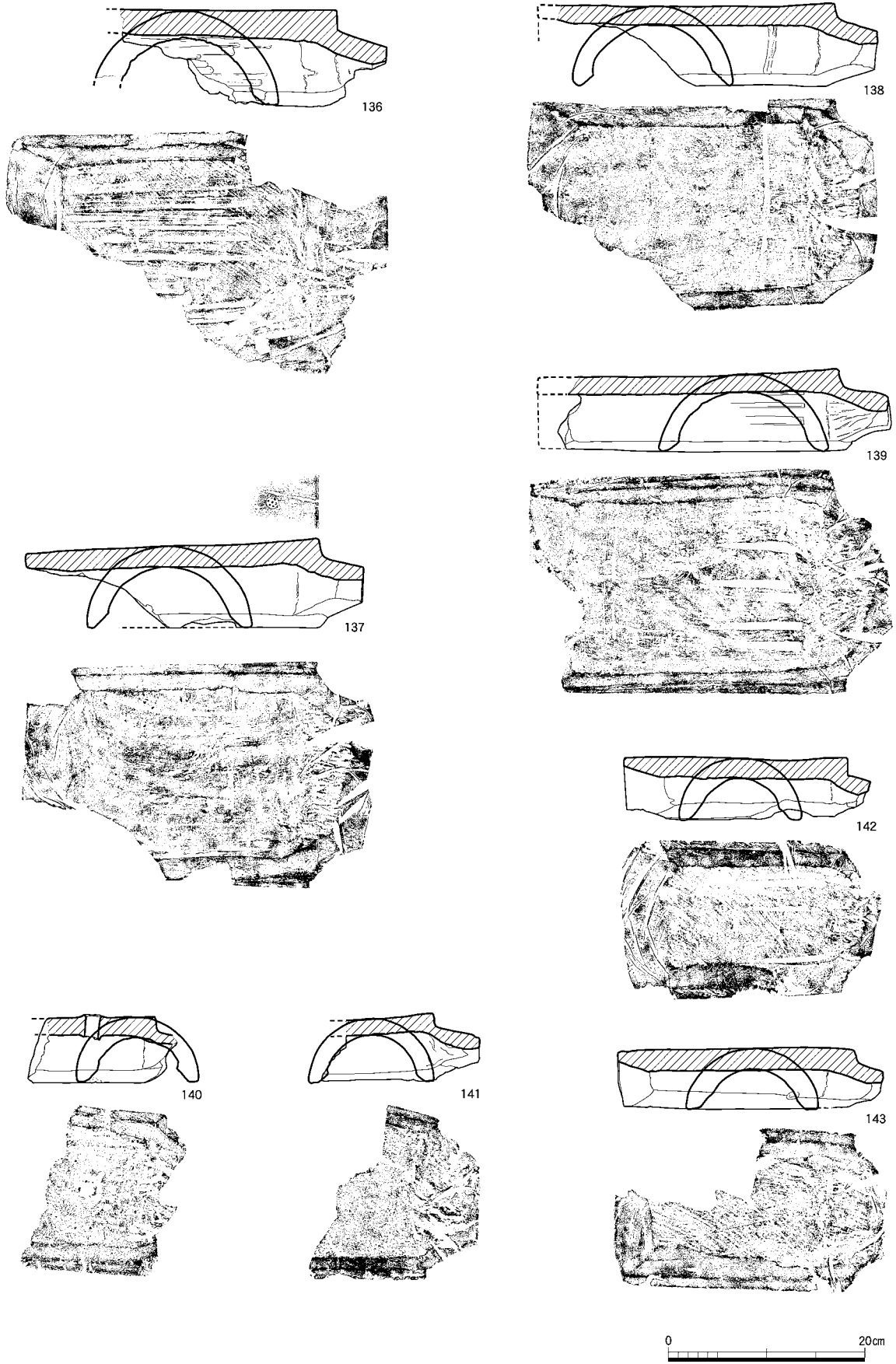


图 27 丸瓦拓影・实测图 (1 : 6)

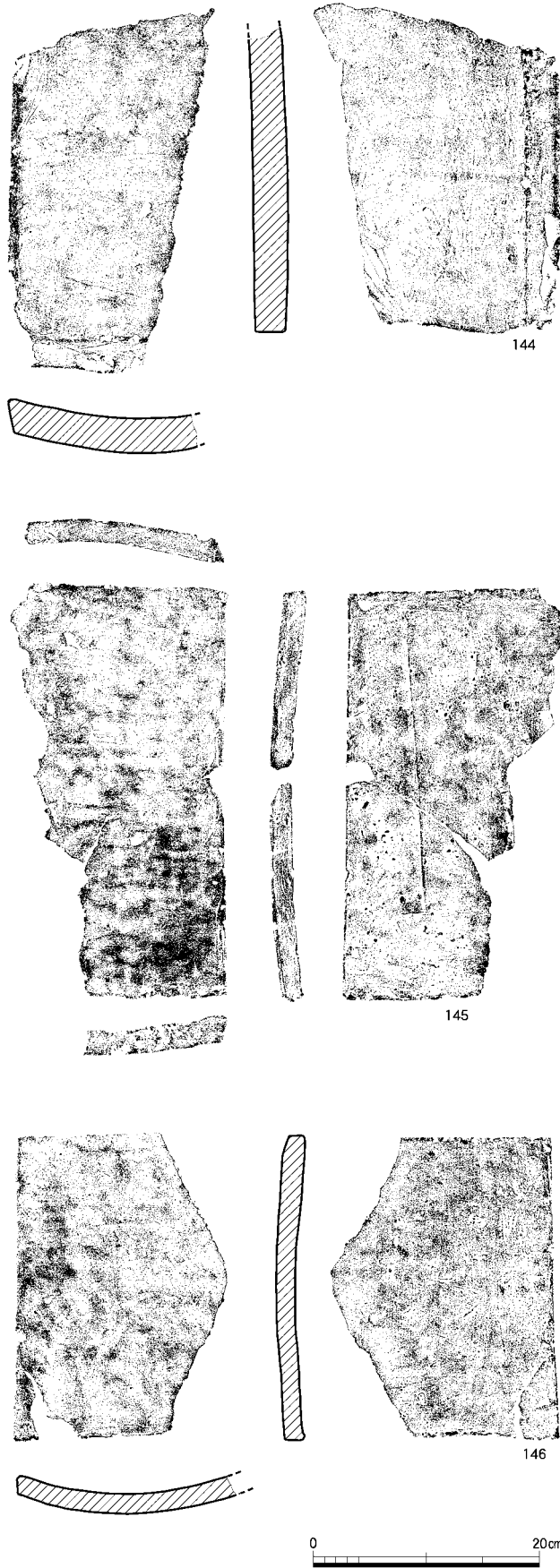


図28 平瓦拓影・実測図(1:6)

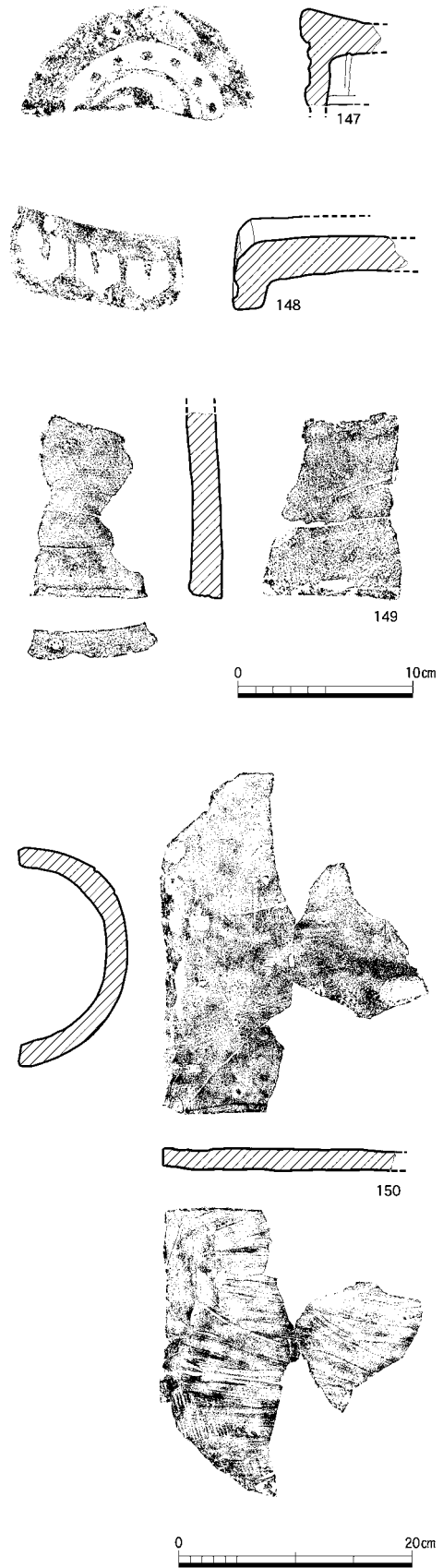


図29 中世の瓦拓影・実測図  
(147~149は1:4、150は1:6)

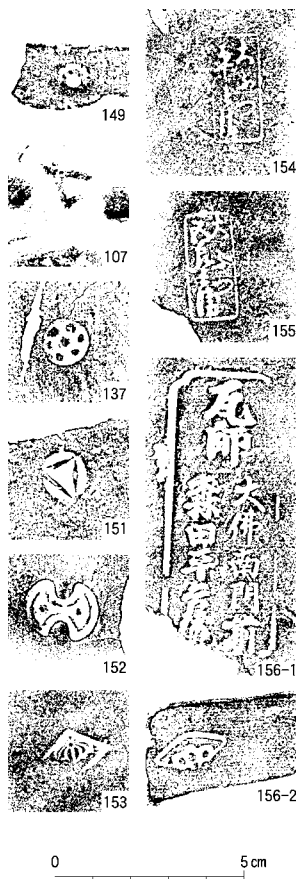


図30 様々な刻印拓影  
(1:2)

る縦方向の溝状痕が付く。140は凹面に布目圧痕があり、釘孔が開けられている。137の玉縁近くの凸面に、○内に点を7つ配する刻印が押されている。

平瓦(図28)144~146は何れも凸面側に大きく反る平瓦である。凹面と上部端面は横ケズリ、凸面と側面は縦ケズリ、下部端面は粗い調整痕が残る。144は厚さ約3cm、長さ26.9cm以上、幅15.9cm以上の大型品である。

中世の瓦(図29)147は巴文軒丸瓦である。凸面と丸瓦側面は縦ケズリ、瓦当部裏面は上下ナデである。珠文は7個以上とみられる。148は剣頭文軒平瓦である。凹面と瓦当部上面に布目圧痕を残す。凸面は横ケズリを行う。149は端面に◎の刻印を持つ平瓦である。凹面は横ケズリ、凸面は縦ケズリである。150は井戸6埋土から出土した。丸瓦で、全体的に歪んでいる。凸凹面共に端部近くを横ケズリ、その他を縦ケズリ調整である。147・148は平安時代後期、149・150は鎌倉時代から室町時代と考えられる。

刻印(図30)鎌倉時代から室町時代の瓦に押されていた刻印が1点、安土桃山時代末から江戸時代前期のものが5点、江戸時代中期のものが1点、江戸時代後期とみられるものが3点である。107の「丁」の反転あるいは「七」の文字とみられるものは、正確には

刻印ではないが、ここでは同種のものとしてまとめた。151は○に▽、152は江戸時代の分銅形に似た文様、153は菱形に菊花とみられる文様である。156-2に152の祖形とみられる刻印がある。154~156-1は文字の入った刻印である。154は「大ふつ平兵衛」、155は「大ふつ五良兵衛」、156は「瓦師 大佛南門前/森田平兵衛」である。156は現御影堂に載っている宝暦の瓦に同様の刻印がある。しかし、端面に押された156-2の刻印は、別の人物の名前が入った刻印と一緒に押されている。同じ大佛瓦町であることから、刻印の使い回しまたは大佛瓦共通の印であった可能性が考えられる。

#### (4) 石製品(図31)

157は火災処理土から出土した砥石である。上下端面以外はすべて使用痕が認められる。158は硯の破片である。側面が2面残っており、その角度から多角形であったと考えられる。側縁が欠けている。陸部に使用痕、裏面には製作時のケズリ痕跡が確認できる。159~161は新池堆積土から出土した基石である。159・160は黒色、161は暗灰色であるが、大きさが揃っていることから、セットが同じである可能性がある。162は宝篋院塔の輪部であると考えられる。下部は欠損、上部は打ち欠いたような痕跡が認められる。表面に横方向の沈線が3本彫り込まれている。



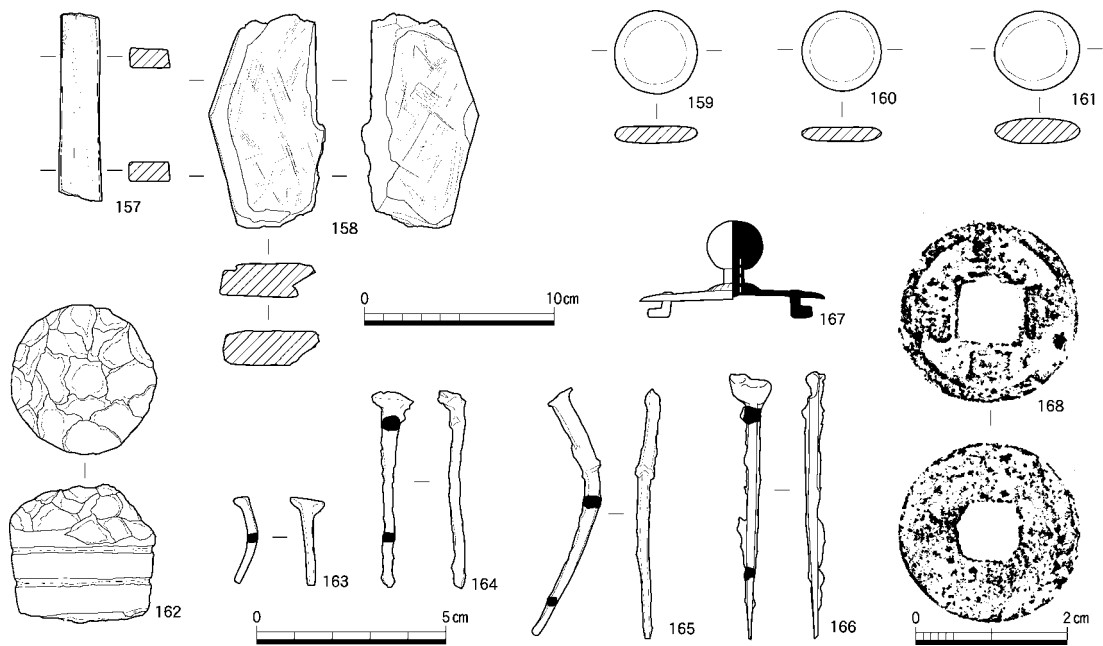


図 31 石製品、金属製品拓影・実測図（157・158・162は1：4、168は1：1、その他は1：2）

#### （5）金属製品（図 31）

163～166は鉄釘である。釘の頭部は片側や両方に出ている。断面は四角い。163・165は中央上部で「く」の字に曲がる。167は銅製の飾り金具と考えられる。円盤に把手とL字の金具が付けられている。丸い把手は、管状の部品と菊花文の小円盤、円盤の4部品を通す棒状の部品で固定されている。また、円盤に裏から表に断面四角のL字金具を挿入して、表からかして固定する。合わせて、7個の部品から作られている。168は「皇宋元寶」と表に鋳出された銭貨である。薄く、中心の四角い孔の四隅が丸くなっていることから、模鑄銭の可能性が高い。

#### （6）木製品（図 32～34、表 5）

169・170は箸である。171は不明木製品である。丁寧に面取りを施す。上部先端を削り、中央から下部先端にかけて斜めに切り落とす。中心付近に木釘孔があり、中に木釘が残存する。両先端部が変色している。何かの工具または建築部材と考えられる。172は断面四角の棒状の材である。一つの角に目盛りのような刻みを施す。上部の端から10個目は、面に横方向の沈線を彫る。この沈線を境に上に9個、下に9個の刻みがある。物差し状のものとみられる。173は算盤形の玉である。174・175は曲物の底である。175は小さいので、柄杓の底と考えられる。176は◎の墨書が描かれた材木片である。墨書のある面のみ平らであることから、材木に付けられた印であったと考えられる。177・178は釘が刺さったままで出土した板材である。表面を加工した痕跡が認められる。179は新池に伴う東側杭列南端の杭である。先端部を尖らせ、中央より下は約8面、中央より上は約5面に面取りする。上部先端は腐食していた。材質はクリである。掲載していないが、西杭列北端の杭跡に残存していた木片も、材質はクリであった。180・181は

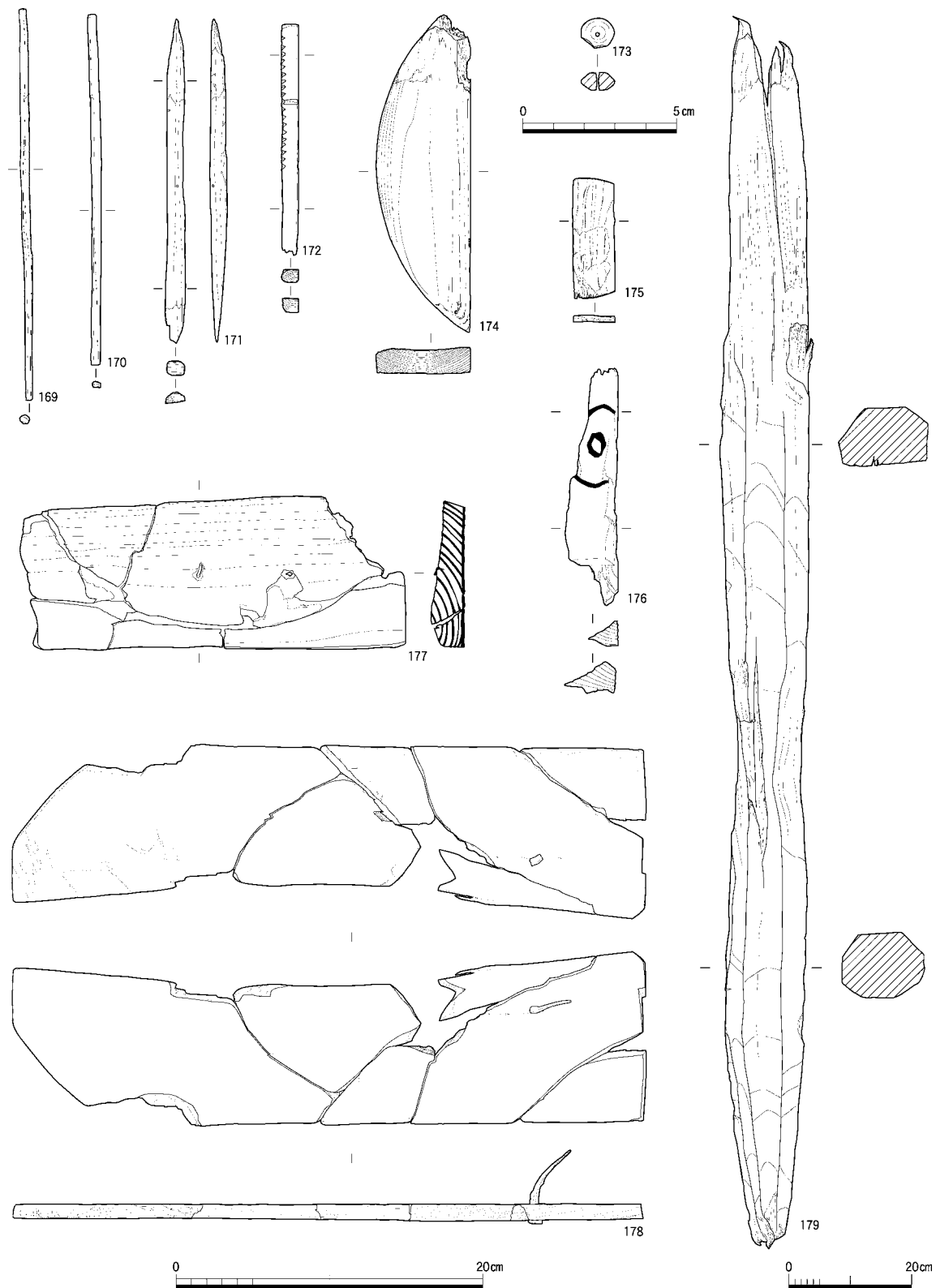


図32 木製品実測図1 (173は1:2、179は1:10、その他は1:4)

新池の南側を断ち割った際に重なって出土した板材の一部である。表の下端部と裏の上端部が変色し、板の重なっていた痕跡が認められた。変色部分の幅は、6～9cm(2～3寸)くらいである。木釘の跡が所々に残り、また木釘自体が残存していた。その他の、薄い板材を計測したところ、46～49cm、52～56cmの2つの範囲内に収まることがわかった。幅は木目に沿って割れている

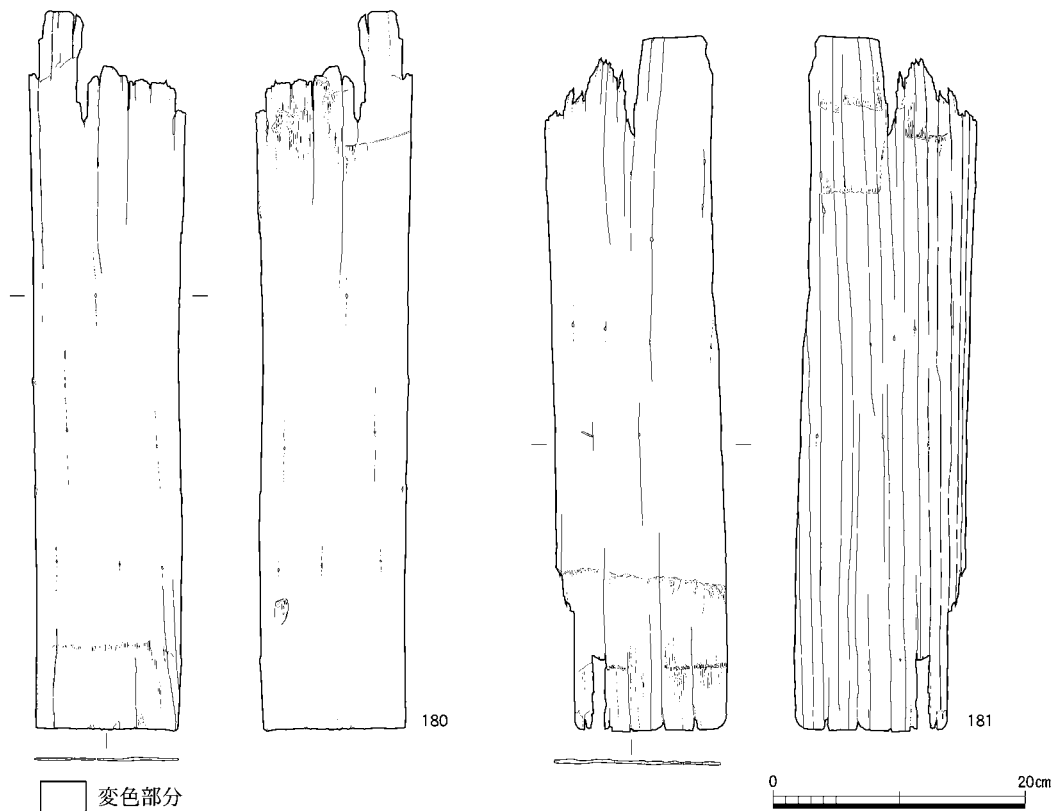


図33 木製品実測図2（1：6）

ことが多いので、正確ではないが、6～8cm、10～13cmの範囲内のようなものである。詳細は表5に記載した。182は木材のケズリカスである。材質はヒノキである。新池を断ち割った際に、5片程度出土している。出土量は少ないが、周辺で微調整程度の材木加工が行われていた可能性が考えられる。



図34 ケズリカス

#### (7) 壁土 (図35)

火災処理土の中から、遺物や焼土粒、炭などと共に少量であるが出土した、焼け土の塊である。面を持つものや、竹状の棒が当たっていた痕跡が残るものがあり、壁土の可能性はある。この中には、焼けてなくなっているが、スサが混じっていた痕跡も認められる。建築部材と一緒に壁土も焼け、鮮やかな橙色を呈するほど火勢が強かったことを想像させる遺物である。



図35 壁土

表5 新池堆積土出土板材計測表

板集積部出土板材

長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	端部 残存面数	釘穴数	木釘 残存数	釘穴位置(端から)	備 考
47.0以上	5.7以上	0.1	—	○	—	—	
52.2以上	11.2以上	0.2	2(縦横)	4	2	4.4、11.0、11.4、11.7	
52.6	9.0以上	0.3	3(縦横横)	7	4	14.6、14.8、15.6、17.2、23.3、23.8、38.0	押圧痕片面にあり、端から5.8cmまで
56.5	12.6	0.1~0.3	4	4	1	11.2、41.0、42.0、42.5	押圧痕片面にあり、端から5.2cmまで
49.1	13.0	0.1~0.5	3(縦縦横)	5	1	7.5、9.3、24.4、39.8、45.4	
48.5以上	7.4以上	0.3	—	○	—	—	
56.1	7.4	0.1~0.3	4	2	—	18.4、43.7	1つの釘跡は貫通せず、端から6.5cmまで押圧痕片面にあり、これに重なるように斜方向の板角痕跡あり
55.0	13.4	0.4	4	10	3	0.5、22.9、23.0、23.8、24.3、25.0、31.5、32.0、32.0、49.3	端から7.9cmと12.9cmまで押圧痕片面にあり(階段状)、掲載番号181
55.8	10.3以上	0.2	3(縦横横)	7	4	15.5、25.8、26.5、27.0、48.8、49.5、50.3	2つの釘跡は貫通していない、端から6.7cmと13.5cmまで押圧痕片面にあり(階段状)
53.3	13.5	0.2~0.3	3(縦縦横)	6以上	—	16.2、16.3、16.5、32.5、35.5、44.2	1つは鉄釘か？木釘の押圧痕が数箇所認められる
53.3	8.1	0.1~0.4	4	4	2	9.8(鉄釘)、25.8、29.3、45.8	1つの釘は鉄釘
48.6以上	8.0	0.4	3(縦縦横)	1	1	29.7	
49.5	10.2	0.1~0.2	3(縦縦横)	3	—	21.6、25.7、41.8	
55.4	7.4	0.2	4	10	—	3.4、4.3、19.1、20.0、20.2、31.9、42.0、42.3、42.9、44.2	一方の端から6.4cmと、反対面のもう一方の端から6.6cmまで押圧痕あり
56.8	8.7以上	0.2	3(縦横横)	2	—	28.2、38.4	端から5.6cmまで押圧痕片面にあり
53.2	10.5	0.4	3(縦縦横)	8	3	0.2、8.7、9.4、10、13.2、21.9、41.6、44.1	
54.7以上	12.1	0.2	3(縦縦横)	9	2	6.4、6.7、14.3、15.1、15.6、16.8、16.8、27.2、36.5	一方の端から5.2cmと、反対面のもう一方の端から5.5cmまで押圧痕あり
56.4	12.1	0.3	4	6	2	12.6、13.0、13.4、22.5、23.5、34.3	端から6.7~7.6cmまで押圧痕片面にあり、掲載番号180
56.3	12.2	0.2	4	6	2	18.2、19.2、20.1、24.8、29.1、39.7	一方の端から5.0cmと、反対面のもう一方の端から5.0cmまで押圧痕あり
49.5以上	7.8	0.2~0.5	3(縦縦横)	4	1	16.5、16.5、26.0、26.6	
49.0以上	6.7以上	0.1~0.2	2(縦横)	5	1	6.6、7.2、7.4、29.2、30.4	2つの釘跡は貫通していない
34.5以上	10.1	0.1	2(横横)	3	2	2.6、3.0、24.4	1箇所木で留める、一方の端が焦げている
42.4以上	8.9	0.2	3(縦縦横)	2	1	26.5、26.5	
36.3以上	4.6	0.5	1(縦)	3	1	21.6、22.6、31.5	
55.6	10.0	0.2	4	3	1	31.9、32.1、37.2	
56.5	6.8	0.2~0.5	4	2	1	22.5、37.5	
56.4以上	5.2以上	0.2	2(縦横)	2	2	25.4、30.3	
47.4以上	7.5	0.2	2(縦縦)	4	—	14.1、18.8、19.8、24.2	
49.7以上	2.6以上	0.3	2(縦横)	1	1	3.6	
55.4	2.5以上	0.2	2(横横)	—	—	—	
51.0以上	8.9	0.2~0.3	3(縦縦横)	4	1	20.0、42.0、43.4、45.5	
55.1	4.4以上	0.3	3(縦横横)	1	—	37.2	片方の端部丸みを帯びる
54.0	4.8	0.2~0.3	4	—	—	—	端部丸みを帯びる

西側杭列周辺出土板材

長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	端部 残存面数	釘穴数	木釘 残存数	釘穴位置(端から)	備 考
47.7	9.1	0.1~0.3	4	—	—	—	
49.6以上	8.1	0.3	3(縦縦横)	1	—	26.4	
46.7	4.0以上	0.2	3(縦横横)	1	—	19.6	釘跡は貫通していない
48.5	8.5	0.1~0.4	4	—	—	—	
26.0以上	13.3	0.1~0.4	3(縦縦横)	1	—	1.7	

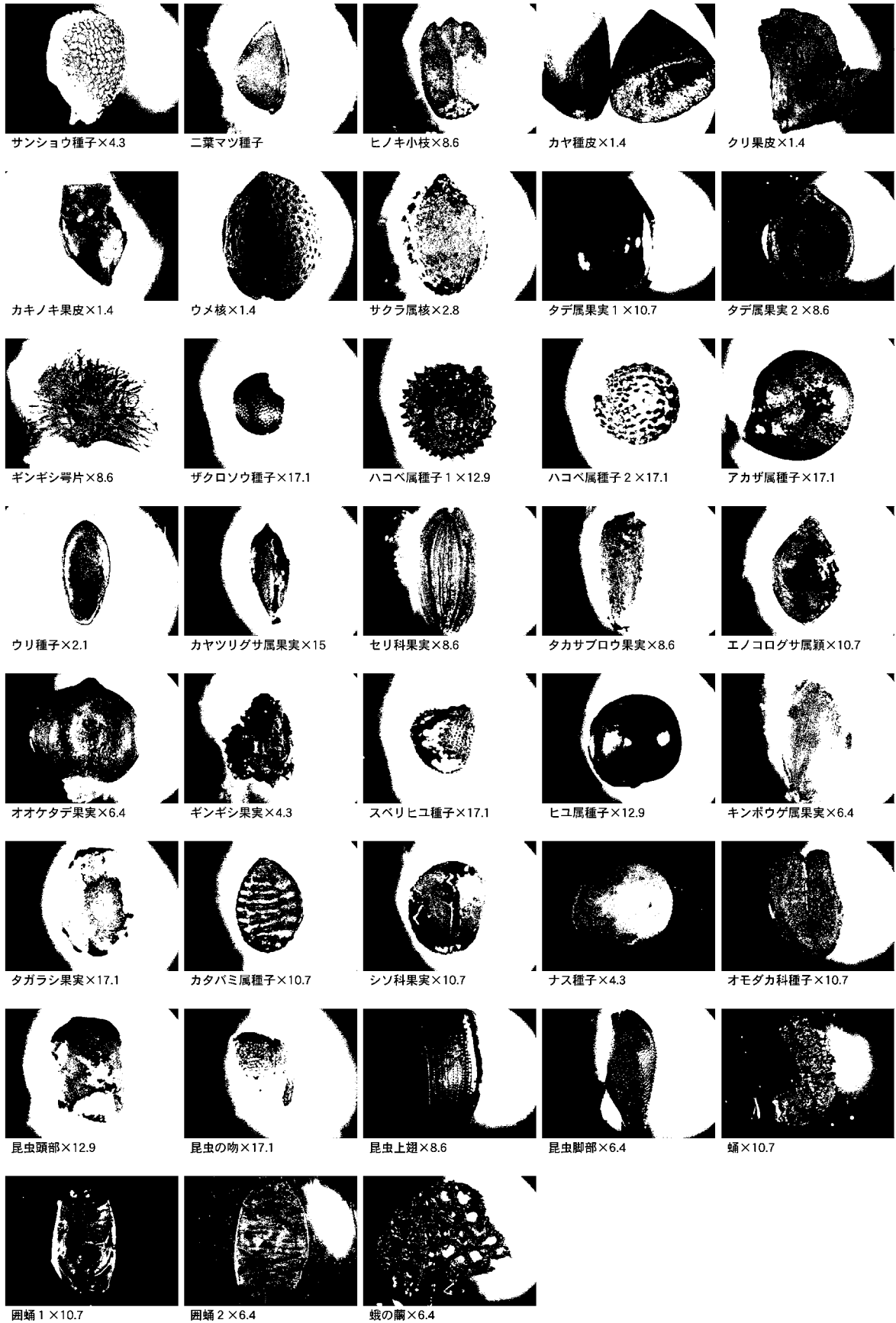


図 36 旧・新池出土植物遺体・動物遺体

表6 旧・新池出土植物遺体・動物遺体一覧表

旧池堆積土下層出土

	和名	部位	科名	個数	生息場所
草本	タデ属1(三稜形)	果実	タデ	2	水湿性・陸生
	ギシギシ罨片	果実	タデ		水湿性
	ハコベ属	種子	ナデシコ	1	陸生
	ヒユ属	種子	ヒユ	1	陸生
	ハス	花床・果実	スイレン	1	水湿性
	ウリ	種子	ウリ	3	(食用)
	カヤツリグサ属	果実	カヤツリグサ	2	水湿性・陸生
その他	昆虫	頭・胸腹・上翅・囲蛹	—	2・9・4・2	—
	蛾	繭	—	—	—

旧池堆積土出土

	和名	部位	科名	個数	生息場所
木本	モモ	核	バラ	1	果樹・庭(食用)
	サンショウ	種子	ミカン	2	果樹・庭(食用)
草本	タデ属1(三稜形)	果実	タデ	10	水湿性・陸生
	タデ属2(扁平形)	果実	タデ	1	水湿性・陸生
	ギシギシ罨片	果実	タデ	—	水湿性
	ザクロソウ	種子	ツルナ	2	陸生
	ハコベ属	種子	ナデシコ	2	陸生
	アカザ属	種子	アカザ	2	陸生
	ウリ	種子	ウリ	3	(食用)
	セリ科	果実	セリ	1	水湿性
	タカサブロウ	果実	キク	1	水湿性
	エノコログサ属	穎	イネ	1	陸生
その他	昆虫	頭・胸腹・上翅・脚・囲蛹	—	11・15・5・4・1	—

新池堆積土出土

	和名	部位	科名	個数	生息場所
木本	二葉マツ	種子	マツ	1	山地・海岸・庭
	ヒノキ	枝	ヒノキ	1	山地・庭
	カヤ	種皮	イチイ	1	山地・庭(食用)
	クリ	果皮	ブナ	1	山地・果樹(食用)
	カキノキ	種皮	カキノキ	1	山地・果樹(食用)
	サンショウ	種子	ミカン	1	山地・庭(食用)
	モモ	核	バラ	2	果樹・庭(食用)
	ウメ	核	バラ	1	果樹・庭(食用)
	サクラ属	核	バラ	1	山地・庭
	ムクノキ	葉	ニレ	—	人家・路付近
草本	タデ属1(三稜形)	果実	タデ	1	水湿性・陸生
	タデ属2(扁平形)	果実	タデ	4	水湿性・陸生
	オオケタデ	果実	タデ	2	庭(観賞用?)
	ギシギシ	果実	タデ	1	水湿性
	ギシギシ罨片	果実	タデ	—	水湿性
	ザクロソウ	種子	ツルナ	5	陸生
	スベリヒユ	種子	スベリヒユ	4	陸生
	ハコベ属	種子	ナデシコ	14	陸生
	アカザ属	種子	アカザ	13	陸生
	ヒユ属	種子	ヒユ	21	陸生
	キンポウゲ属	果実	キンポウゲ	2	水湿性
	タガラシ	果実	キンポウゲ	3	水湿性
	カタバミ属	種子	カタバミ	14	陸生
	ウリ	種子	ウリ	67	(食用)
	シソ科	果実	シソ	1	陸生
	ナス	種子	ナス	2	(食用)
ナス科	種子	ナス	1	陸生	
タカサブロウ	果実	キク	6	水湿性	
オモダカ科	種子	オモダカ	1	水湿性	
その他	昆虫	頭・胸腹・上翅・囲蛹	—	23・5・1・37	—
	魚類	骨	—	—	—
	蛾	繭	—	—	—

(8) 植物遺体・動物遺体 (図 36～38、表 6)

旧・新池を断ち割った際に、堆積土中に植物遺体が多く含まれていることを確認したため、各池跡の堆積土を遺物整理箱 3 箱分ずつ土壌サンプルとして採集し、フローテーション (土壌を水洗して、微細遺物を採集する方法) を行った。旧池の土壌サンプルは調査区中央付近で採集し、池底が深くなる部分があったため、下層として 1 箱分を別けて採集した。一方、新池の土壌サンプルは調査区西側の旧池の堆積土が及んでいないとみられる部分で採集した。

また、調査中には、新旧池の堆積土中に、蓮の葉や根とみられる植物遺体を検出している (図 38)。旧池では最も深い所から、新池では調査区南西付近を中心に出土した。

旧池堆積土出土植物遺体 (図 36・37、表 6) 堆積土上層と下層では、ほとんど内容に違いは認められなかった。雑草と呼ばれる陸生や水湿性の草本類植物が多種類出土している。中でも、上層のタデ属 1 (三稜形) の個数が多い。また、昆虫の体の一部が植物遺体とほぼ同数出土している。その他に、蓮の種である花托 (うてな、図 37) を検出した。

新池出土植物遺体・動物遺体 (図 36・38、表 6) マツやヒノキ、サクラ属、食用として植えられることもあるカヤ、クリ、カキノキ、サンショウ、モモ、ウメといった庭木の種子が少量ずつではあるが確認された。オオケタデといわれる木本植物は、観賞用として庭で栽培されることが多いとされており、こちらも少量であるが検出した。また、陸生の雑草が多数認められる。特徴的なものとして、食用後の残滓として捨てられたのかは不明であるが、多量のウリの種子が出土している。同様に食用とされる植物としてはナスの種子も出土している。昆虫類は個数にすると、植物遺体の約 3 分の 1 程度あり、頭や囲蛹が抜きん出て多い。その他、魚骨 (真鯛など) を検出している。魚骨の内、頭の骨に魚をさばいたときなどに付く刃物による切り傷が認められた。貝類は、サザエとハマグリを調査中に確認したが、残存状態が非常に悪く、採集できなかった。



図 37 旧池出土 蓮の種

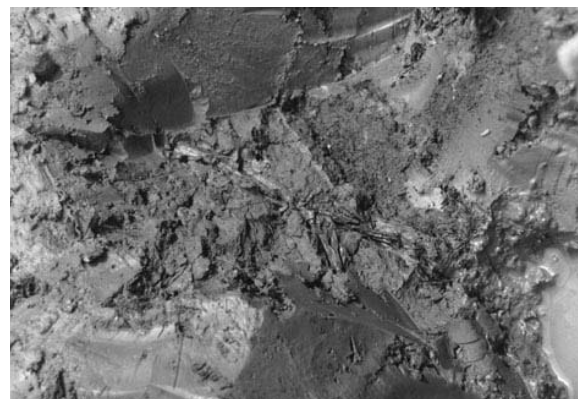


図 38 新池 水草の地下茎出土状況

## 4. 小 結

今回検出した2つの池跡は、旧池が安土桃山時代末から江戸時代前期、新池が江戸時代前期に属し、初期の本願寺伽藍配置を知る上で貴重な遺構である。しかし、本願寺京都移転時から御影堂の修復が開始された1633年頃までの伽藍配置がわかっていないため、今回発見した2つの池跡がどの建物に付随し、どのような意図を持って造られたものを明確にすることはできない。まとめるに際して、現状通り阿弥陀堂や御影堂の位置は変わっていないものとして、記述することとした。

### 新旧池について

旧池は、調査区全域に広がっており、調査区壁面の土層観察からも、調査区外の東西南にもさらに広がっていたと考えられる。旧池は、旧池埋立土や火災処理土によって埋め立てられていた。この火災処理土は、元和3年(1617)の火災に伴うものである。旧池堆積土や火災処理土などに含まれていた遺物から、旧池は本願寺が現在地に移転してきた頃に造られたと考えられる。新池は、火災処理土を東岸整地層(陸部)としている。また、新池堆積土中からは、17世紀前半代の遺物が出土していることから、火災後あまり時間の経っていない時期に、旧池を造り直したものと考えられる。再掘削の時に、新池は旧池よりも深く掘り窪め、池底は地山を平らにならし、陸部を嵩上げしていた。出土遺物に、蓮の花托、蓮の葉や根の部分とみられる植物遺体があることから、蓮池であった可能性がある。その他に、杭跡の存在から新池には両堂を繋ぐ、渡り廊下のような橋が架けられていたとみられる。

### 陸部について

北岸は直線的であり、新池が造り直された時も位置は踏襲されていた。旧池の北岸は何層にもわたる整地が行われており、堅く叩きしめられていたことから、版築が行われていたと考えられる。新池側の北岸については、標高27.20m付近までが旧池の陸部を踏襲し、標高27.60m付近までは盛土を行い、陸部の嵩上げを行ったとみられる。新池陸部造成時にも、版築が行われたと考えられる。これらのことから、池の北側には阿弥陀堂(焼失前は御影堂が北側にあったといわれている)のような大きな建物が存在した可能性が高いと考えられる。

今回の調査から、旧池や新池の規模や、南側への池の広がりや御影堂との関係、北側の陸部上に何があったのか、また、検出した整地層が現阿弥陀堂の基壇とどのように繋がっているのか、給排水の位置、境内の伽藍配置と景観など、調査区以外を含んだ様々な問題点があることが判明した。また、初期の伽藍配置を描いた洛中洛外図に、池は認められないが庭石の様なものが描かれていることから旧池の構造と機能的役割という部分で、中庭と防火の2側面を併せて考える必要があることを確認した(防火対策と考える理由は、御影堂と阿弥陀堂の西面の漆喰壁が大屋根を支える構造体として造られただけでなく、火災の教訓を生かしたものと考えられるからである)。絵画資料、文献資料だけではなく、境内地の現標高やこれまで行ってきた発掘調査成果をさらに検討していく必要がある。



## Ⅲ 2次調査

### 1. 調査経過

今回の調査は、西本願寺式務部棟新築工事に伴い実施した2次発掘調査である。調査地は、1次調査区の西側に隣接する、阿弥陀堂南西付近の空地に位置する。式務部棟が建っていた範囲の一部を調査区の西側3分の1に含む。

昨年度調査では、新・旧2時期の池跡を検出している。その調査区西部に広がっていた新池の続きの検出が見込まれた。新式務部棟建設予定範囲の西半部に、東西約16m、南北約31mのL字形の調査区を設定し、調査を開始することとなった。

調査は、平成20年1月23日から重機掘削を開始した。その結果、江戸時代前期の池跡（以下、新池）や、この池を埋め立てた後に造られた建物跡、土取土坑、江戸時代前期末頃から中期の石積土坑（石室、地下式倉庫）などを検出した。新式務部棟の基礎の一部が遺構面に達することから、同年4月3日から11日までの間で追加調査を行い、その部分で本願寺京都移転以前の遺構を検出し完掘した。その後、前回の遺構保存を踏まえて、今回についても遺構の埋め戻し保存をすることとなり、その作業を3日間かけて行った。旧消火管の撤去と併行して重機による埋め戻しを行い、すべての調査を4月23日に終了した。なお、遺構の保存方法は、土のうを使用して礎石など特に重要な遺構を保護した後、遺構面の上に砂を約10～15cm敷き、残土で埋め戻した。新式務部棟の基礎が造られる標高27.20m附近の砂直上には、掘削時の目安用として、東西南北約2m間隔に土のうを置く措置をとっている。

### 2. 遺 構

#### (1) 基本層序（図41）

基本層序は、調査区北半部と南半部で大きく異なる。調査区北半部では、表土下約60cmまでは近現代の盛土があり、その下に江戸時代後期以降の整地層が約10cm、地山直上に江戸時代前期から中期の整地層が約10cm堆積していた。江戸時代後期以降の整地層は黄褐色粘土ブロックを多



図39 調査前全景（南西から）



図40 作業風景（北から）

量に含む暗褐色砂質土で、江戸時代前期から中期の整地層は粒状の土師器や炭を含むオリーブ褐色砂質土などである。調査区南半部では、表土下約 70 cm までは近現代の盛土であり、その下に 100 ～ 140 cm の厚さで新池を埋め立てた江戸時代前期の整地層が続き、その最下層に 50 ～ 100 cm の新池の堆積土が堆積している。江戸時代前期の整地層は褐灰色や黄褐色系の砂質土が主体で、層によっては大量の炭を含む。新池の堆積土は植物遺体を含む黒褐色粘質土が主体であるが、陸部付近では細砂や粗砂、礫混じりの土と互層になっている。キューピクルの基礎や避雷針、雨水管が、最も深いところで表土下約 200 cm まで入っており、新池堆積土にまでその掘削深が到達している部分が認められた。

新池は池の埋戻し土直下、江戸時代前期から中期の遺構は江戸時代前期の整地層、江戸時代後期以降の遺構は江戸時代前期から中期の整地層を切り込んで造っていた。その他に、本願寺京都移転以前の遺構を調査区中央北寄りで見出ししており、これらは地山相当層上に成立していた。検出面の標高は新池検出面とほぼ等しい。所々に中世包含層や平安時代包含層が残存していた。

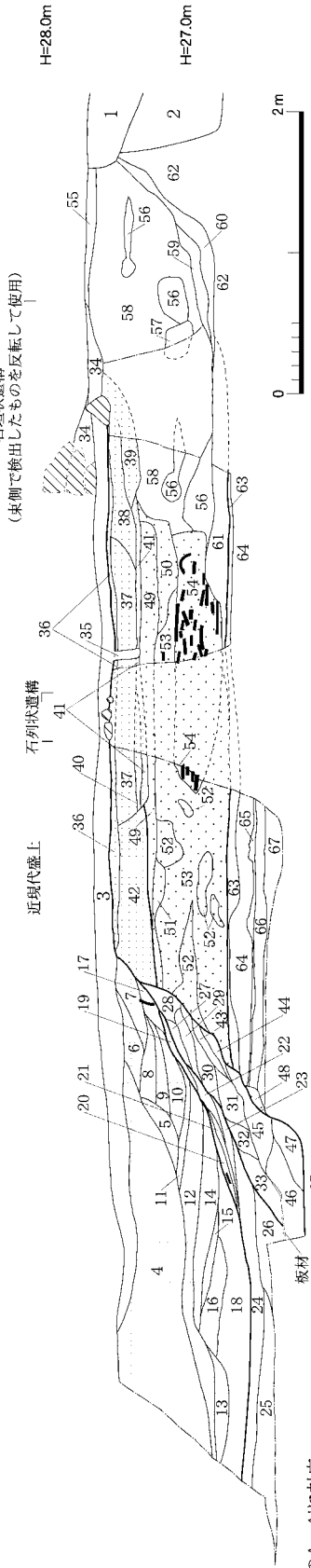
## (2) 遺構の概要 (表 7)

検出した遺構は、平安時代の建物跡 (建物 2) や井戸 (井戸 59)、溝 (溝 52・102)、土坑 (土坑 58 など)、鎌倉時代の土坑 (土坑 112)、室町時代後期から安土桃山時代の溝 (溝 85・111)、安土桃山時代末から江戸時代前期の池跡の肩口 (旧池)、江戸時代前期の池跡 (新池)、建物跡 (建物 1)、柵 (柵 1)、土坑 (土坑 107～109)、石垣状遺構 36、石列状遺構 37、江戸時代前期から中期の井戸 (井戸 46)、石積土坑 (土坑 42・44)、土坑 (土坑 43・45)、江戸時代後期以降の礎石 (礎石 12 など)、漆喰タタキ 41、井戸 (井戸 21)、敷石遺構 35 などがある。

平安時代から安土桃山時代の遺構は調査区北半部に残存し、江戸時代前期から後期の遺構は調査区全面に広がっていた。特に、江戸時代前期から中期にかけての遺構は、大規模なものが多く、良好な状態で検出することができた。

表 7 2次調査遺構概要表

時 代	遺 構
平安時代	建物 2、井戸 59、溝 52・102、土坑 58
室町時代後期～安土桃山時代	溝 85・111
安土桃山時代末～江戸時代前期	旧池の肩口、陸部整地層 (瓦溜め)
江戸時代前期	建物 1、柵 1、新池、陸部整地層、土坑 107～110、石垣状遺構 36、石列状遺構 37
江戸時代前期～中期	井戸 46、石積土坑 42・44、土坑 43・45
江戸時代後期以降	礎石 12・14・39・40、漆喰タタキ 41、井戸 21、敷石遺構 35



- ※ 図45のA-A'に対応
- 1 10YR3/3 暗褐色砂質土 径1~2cmの礫、土師器・炭少量含
  - 2 10YR4/1 褐灰色粘土混粗砂 土師器・炭、瓦片少量含
  - 3 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質土 土師器・炭少量含
  - 4 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土 粘性あり、粒状の10YR5/6黄褐色粘土・土師器・炭少量含
  - 5 10YR3/3 暗褐色砂質土 径1~2cmの礫少量含
  - 6 10YR4/2 灰黄褐色粘質土混礫 (径1~5cm)
  - 7 2.5Y4/2 暗褐色砂質土 土師器・炭少量含
  - 8 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質土 炭・木片少量含
  - 9 2.5Y5/6 黄褐色微砂混2.5Y4/2暗灰黄色シルト
  - 10 10YR3/3 暗褐色砂質土混礫 (径0.5~1cm) 土師器・炭少量含
  - 11 7.5YR4/4 褐色砂質土
  - 12 5Y4/1 灰色砂質土 粒状の5Y7/1灰白色シルト少量含
  - 13 2.5YR4/1 黄灰色粘土
  - 14 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂混10YR3/1黒褐色微砂
  - 15 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 炭・木片少量含
  - 16 5Y6/1 灰色細砂 炭・木片少量含
  - 17 5Y4/2 灰オリーブ色粘土 粒状の10YR6/8明黄褐色細砂・土師器・炭少量含
  - 18 2.5YR3/1 黒褐色粘質土混細砂 植物遺体多量含、10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂が結状に入る 【腐植土層】
  - 19 7.5Y4/3 褐色細砂
  - 20 10YR3/1 黒褐色粘質土混粗砂 土師器・炭少量含
  - 21 5Y5/1 灰色微砂
  - 22 10YR4/1 褐灰色微砂粘質土 土師器・炭少量含
  - 23 2.5Y4/1 黄灰色微砂粘質土
  - 24 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 炭・木片・リン成分少量含 【腐植土層】
  - 25 5Y3/2 オリーブ黒色粘質土混礫 (径1~5cm)
  - 26 5Y4/1 灰色粘土 木片多量含、リン成分少量含 【腐植土層】
  - 27 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土 粒状の10YR6/8明黄褐色粘質土・土師器・炭少量含
  - 28 10YR6/1 褐灰色微砂 径1~2cmの礫少量含
  - 29 10YR4/2 灰黄褐色粘土混細砂
  - 30 10YR3/3 暗褐色細砂 径1~3cmの礫少量含
  - 31 7.5Y5/1 灰色細砂
  - 32 10YR4/2 灰黄褐色粗砂 (径1~3cm)
  - 33 7.5Y3/2 オリーブ黒色粗砂粘質土 植物遺体少量含
  - 34 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土 径1~2cmの礫少量含 石垣状遺構掘形
  - 35 2.5Y3/1 暗オリーブ褐色砂質土
  - 36 10YR7/8 黄褐色粘土混10YR4/6褐色粘土 地山の混土
  - 37 10YR4/2 灰黄褐色粘土 粒状の10YR7/8黄褐色粘土・土師器・炭少量含
  - 38 10YR4/4 にぶい黄褐色粘質土 径10cmの10YR7/8黄褐色粘土混10YR7/1灰白色粘土・土師器・炭少量含
  - 39 10YR4/2 灰黄褐色粘質土
  - 40 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂 径1~2cmの礫少量含
  - 41 2.5Y4/3 オリーブ灰色粘質土混微砂 炭少量含
  - 42 5Y4/1 灰色粘土 粒状の2.5Y6/8明黄褐色粘土少量含
  - 43 10YR5/6 黄褐色粗砂
  - 44 10YR5/6 黄褐色粗砂
  - 45 5Y4/2 灰オリーブ色粘質土
  - 46 5Y3/2 オリーブ黒色粘質土 薄板材含 【腐植土層】
  - 47 7.5Y3/2 オリーブ黒色粘質土混粗砂
  - 48 2.5Y4/2 暗灰色粘土混微砂
  - 49 2.5Y4/6 オリーブ褐色粗礫 (径1~2cm)
  - 50 2.5Y3/2 暗オリーブ褐色粘質土混細砂 ブロック状の10YR7/8黄褐色粘土・土師器・炭多量含
  - 51 10YR4/3 褐色細砂
  - 52 10YR4/2 灰黄褐色粘質土混微砂混10YR6/8明黄褐色シルト 土師器・炭少量含
  - 53 10YR6/8 明黄褐色粘土 10YR4/2 灰黄褐色粘質土と5Y6/2 灰オリーブ色シルトが所々に混じる
  - 54 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土 ほぼ完形の瓦多量含、土師器・炭少量含
  - 55 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土 径1~2cmの礫・10YR5/6黄褐色粘土少量含
  - 56 10YR4/2 灰黄褐色粘質土混微砂混10YR6/8明黄褐色シルト 土師器・炭少量含
  - 57 10YR4/4 褐色粘土
  - 58 10YR6/8 明黄褐色粘土 10YR4/2 灰黄褐色粘質土と5Y6/2 灰オリーブ色シルトが所々に混じる
  - 59 2.5Y2/3 暗オリーブ褐色砂質土 粘性あり 土師器少量含
  - 60 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土 粒状の10YR6/8明黄褐色粘土・土師器・炭少量含
  - 61 2.5Y6/8 明黄褐色粘土混2.5Y6/2 灰色粘土
  - 62 10YR4/1 褐灰色粘質土が所々に混じる
  - 63 5Y4/1 灰色シルト
  - 64 2.5Y3/2 黒褐色粗砂 径1~3cmの礫少量含 地山
  - 65 5YR5/8 明赤褐色粗砂
  - 66 10YR4/4 褐色細砂
  - 67 10YR3/3 暗褐色粗砂 (径1~3cm)

図41 遺跡区東 西端断面図 (1:50)

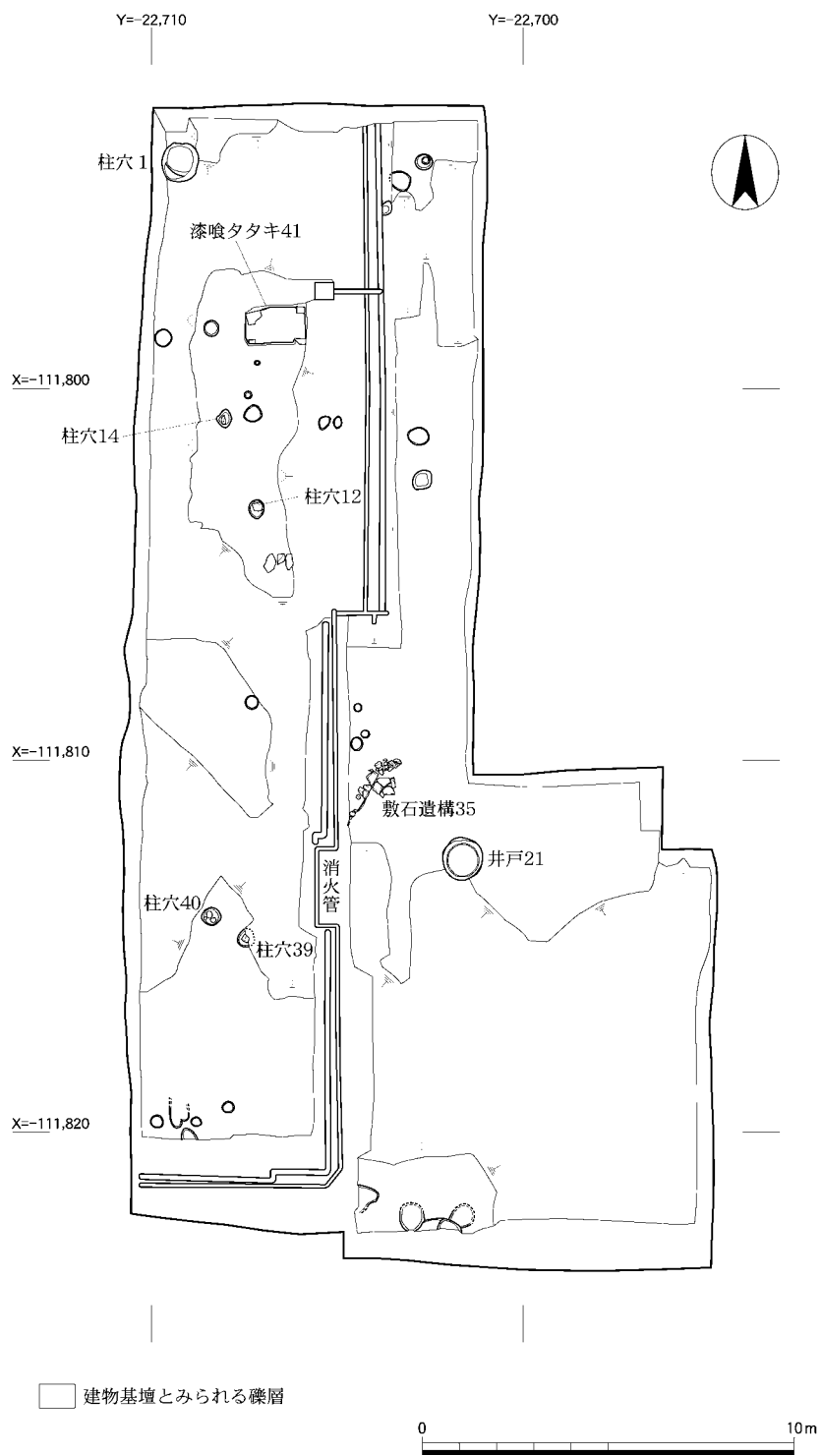


図 42 江戸時代後期以降遺構平面図 (1 : 200)

### (3) 江戸時代後期以降の遺構 (図 42)

1次調査とは異なり、今回の調査では一部であるが、江戸時代後期以降の整地層が良好に残っていた。調査区北部では、建物に関する土間状遺構や柱穴を検出した。調査区南東では、井戸 21 や水場遺構とみられる縁石を持つ敷石遺構 35 を検出した。

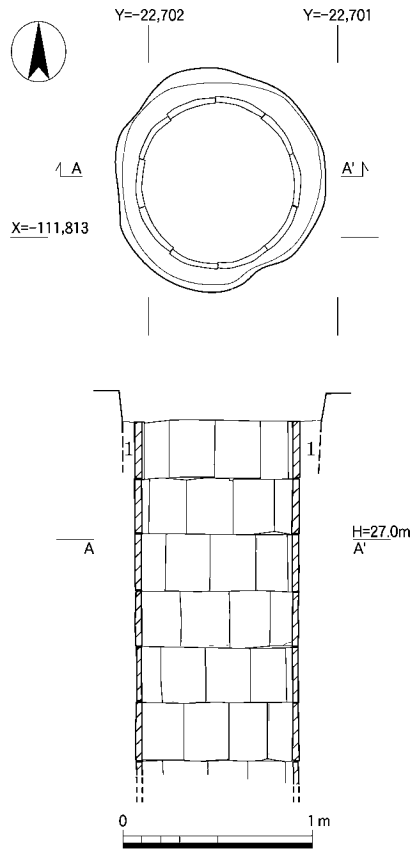
また、調査区北西で南北約 5 m、東西約 2.5 m の範囲に (図 42 の網掛け部分)、黄褐色粗砂礫 (径 1 ~ 6 cm) 層と完形に近い丸・平瓦を多量に含む暗褐色粘質土層が広がっていることを確認した。これらの層の性格が不明であったことから、土層観察用の畦を残して掘り下げたところ、約 0.1 m の厚さでほぼ平らな状態で堆積していることがわかった。これらの層の周辺が攪乱によって切り取られているため全体の形状は不明であるが、北端で異なる層になるものの、丘裾の様になだらかに下がることも判明した。このことから、江戸時代中期から後期の間に、建物の基壇に相当するものがあつたと考えることができる。しかし、今回は確証が得られなかったため、同様の層を検出した際の課題とすべく、概要説明にとどめた。他に、備前焼甕 (図 54) の破片が礫層北端附近からまとまって出土しているが、この甕の時期 (1600 年代後半) が礫層の時期と異なっており、どのような関係があつたのかを明らかにすることはできなかった。

柱穴 12・14・39・40 調査区西の北半部で柱穴 12・14、南半部で柱穴 39・40 を検出した。何れも直径約 0.4 m で、底に石を据えている。石は柱穴 12・14 が川原石、柱穴 39・40 が四角く加工した花崗岩であり、直径または一辺が 10 ~ 20 cm である。これらの柱穴の並びには、規則性が認められず、他に同様の柱穴を検出することができなかった。よって、明治時代初頭に作られたとされる本願寺境内絵図に、座敷風の建物が描かれているので、これに該当する柱穴の一部とみられるが、建物の復元には至っていない。

柱穴 1 調査区北西隅で検出した。直径約 1 m、抜き取り穴径約 0.3 m、深さ約 0.2 m の規模で、埋土は暗褐色粘質土である。掘形に軒丸・軒平瓦、丸・平瓦、道具瓦が詰め込まれていた。丸瓦が主体で、小振りである。底には棟端瓦を割ったもの (長さ 41 cm、幅 26 cm、厚さ 1.5 cm) を敷いていた。瓦は掘形に入れるために、打ち欠いたとみられるものも含まれていたが、大半は割れていても残りの良いものを選択しているようである。橙色に変色した焼け瓦が焼けてない瓦と 1 : 5 の割合で認められた。建物の一部とみられるが、同規模の柱穴を検出していないので、詳細は不明である。

漆喰タタキ 41 調査区北にある消火栓の南西付近で検出した土間状遺構である。東西約 1.6 m、南北約 1 m の範囲に約 2 cm 厚の漆喰を張り、四隅に花崗岩を平らに据える。花崗岩は縦約 15 cm、横約 20 cm、高さ約 20 cm の直方体であるが、北西隅のもののみ東西が約 40 cm、南北約 30 cm、高さ約 10 cm、石の南東角を切り取っているので不正形を呈する。漆喰の掘形は幅約 0.1 m、深さ約 0.15 m、埋土は暗褐色砂質土である。柱穴同様、建物の一部とみられる。

井戸 21 (図 43) 調査区南東で重機掘削中に検出した。その際に、割れた最上段の瓦を取り外しているため、検出面より 0.3 m 以上高い位置が本来の井戸上面である。縦約 30 cm、横約 25 cm、厚さ約 3 cm の井戸椀瓦を一周につき 10 枚使用した井戸である。掘形径 1.1 m、内法径約 0.8 m、



1 10YR4/4 褐色粗砂礫 (径2~5 cm)

図 43 井戸 21 実測図 (1 : 40)

検出面から深さ約 2.1 m まで掘り下げたが、さらに 1 m 以上深くなることから、安全面を考慮して掘削を中止した。埋土は、暗褐色系の粘質土に砂や径 1 ~ 10 cm の礫が少量混じる。井戸の中層 (標高 26.30 m) までの埋土からは、19 世紀中頃の土師器皿、京・信楽系陶器急須などが出土したが、下層からは全く遺物が出土していない。この井戸は、周辺にあった建物の外井戸として造られ、使用されていたとみられる。

敷石遺構 35 (図 44) 井戸 21 の北西で検出した。長軸方向内法約 2 m、短軸方向内法約 0.6 m で、北東から南西方向に中心軸がある溝状の遺構である。北東から南西に、チャートの平らな面を南東に向けて縁石状にし、これらの東側に平らなチャートを敷き並べて底としている。遺構の南東~南部分が削平を受けたものとみられ、縁石状の石や底石が認められない。縁石が一段のみで底石との高さの差が約 0.1 m と低く、また北東端の縁石が弧状を描いて収束する様子が認められることから、溝ではなく、蹲踞の海のような水場遺構の可能性が考えられる。

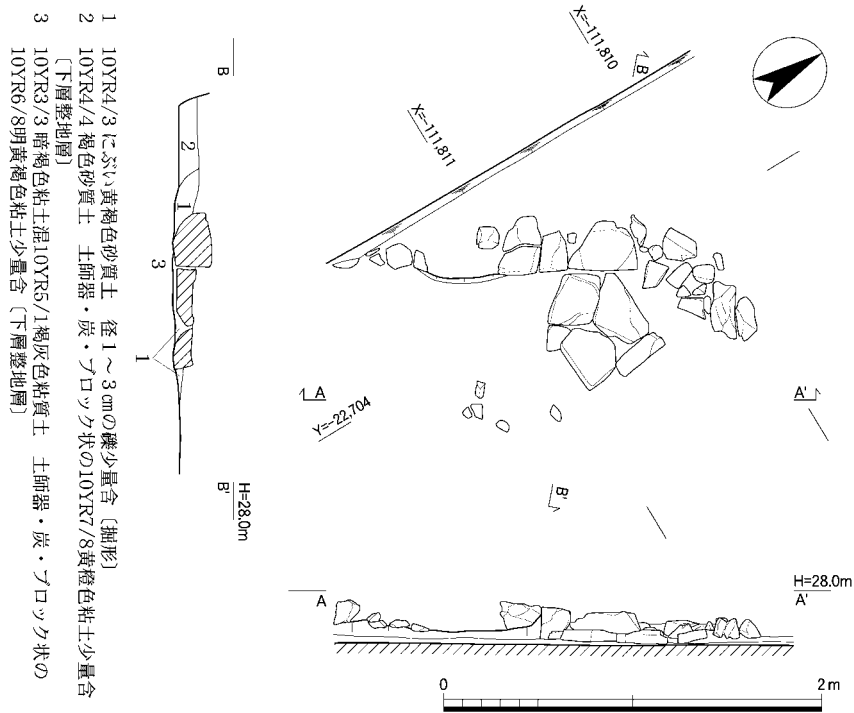


図 44 敷石遺構 35 実測図 (1 : 40)

#### (4) 江戸時代前期から中期の遺構 (図 45)

調査区北端では、江戸時代前期末頃とみられる石積土坑を2基、調査区中央では江戸時代前期から中期頃の井戸や土取土坑などを検出した。

井戸 46 調査区中央東寄りの土坑 45 の下層から検出した。直径約 1.5 m の円形井戸で、深さ 1.4 m 以上になる。消火管との関係から、完掘できていない。埋土は灰黄褐色粘土や黄褐色粘土などの地山の混土である。土師器皿、施釉陶器片、焼締陶器甕、丸・平瓦などが出土した。

石積土坑 42 (図 46) 調査区北西で検出した残りの良い石積土坑である。石積部分(内法)が南北 1.5 m 以上、東西 3 m 以上、2～3 段分の石が残存している。深さは検出面より 1.8 m に及ぶ。掘形は南北 3.7 m 以上、東西約 6.7 m で、石積掘形埋土は地山の粗砂礫を使用していた。底から石積一段目までシルト質の褐灰色粘質土が堆積していることから、水に浸かっていた可能性がある。埋土はにぶい黄褐色粘土や黒褐色粘質土に明黄褐色粘土ブロックが多量に混じっていた。南側から埋め戻されたことがわかった。出土遺物には大量の土師器皿、少量の肥前磁器椀、焼締陶器鉢などがあり、少なからず平安時代の須恵器甕片などが認められた。規模の大きな遺構であること、また、阿弥陀堂に近接した裏側に位置していることなどから、災害から宝物類を避難させるための地下式倉庫(石室)の可能性も考えられる。

石積土坑 44 (図 46) 調査区北東角で検出した。石積土坑 42 の西側を壊して造られている。石積は南端に一段分のみ、東西約 0.7 m 分が残存する。掘形の北端を検出しているが石積を確認することができなかったことから、埋め戻しの際に抜き取られたとみられる。深さは検出面より 1.7 m、掘形は南北約 6 m、東西 4.5 m 以上である。埋土は、暗灰黄色系の粘質土に細かい土師器片や炭片が混じったものであった。遺構の大半が調査区外または消火管の下にあることから、全容は不明である。石積土坑 42 と同様、地下式倉庫とみられる。

土坑 43 調査区中央付近で検出した楕円形の土坑である。長軸約 5 m、短軸 4.5 m 以上、深さ約 1.1 m の規模を測る。埋土中層に熨斗瓦を大量に含む黒褐色粘質土層が堆積し、土坑西側の埋土下層には炭混じりの黄灰色粘質土が約 0.1 m の厚さで堆積していた。下層の砂層で掘り込みが止まっていることから、土取土坑と考えられる。

土坑 45 調査区中央東端で、土坑 43 に切り込まれた状態で検出した。直径約 4.2 m、深さ約 0.9 m、埋土は暗褐色砂質土と褐灰色粘土混粗砂を主体とする。土取土坑とみられる。

#### (5) 江戸時代前期の遺構 (図 45)

この時期の遺構は、調査区全面に広がっていた。調査区北半には土取土坑がまとまっており、調査区南西では建物跡、調査区中央東端には南北方向の柵とみられる柱穴列を確認している。また、調査区南東では新池や、新池と同時に存在していたと考えられる石垣状遺構や石列遺構などを検出した。

建物 1 (図 47) 調査区南西部においては、前年度の調査区から続く新池を埋め立てた整地層上面で、礎石を5基検出した。調査区南西の3基は、南北2間(柱間2m)で西に展開する建物跡

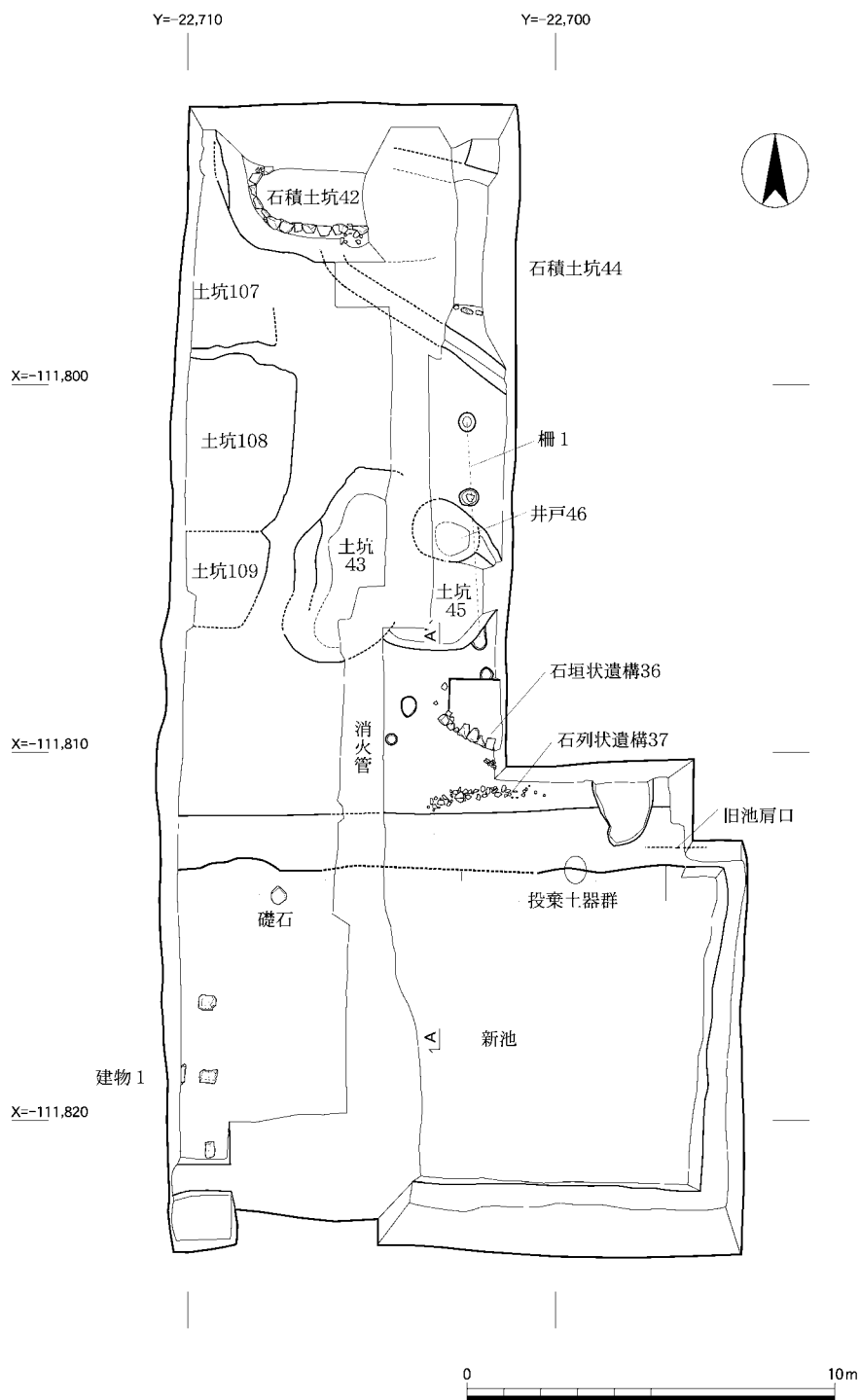


図45 安土桃山時代末から江戸時代中期遺構平面図（1：200）



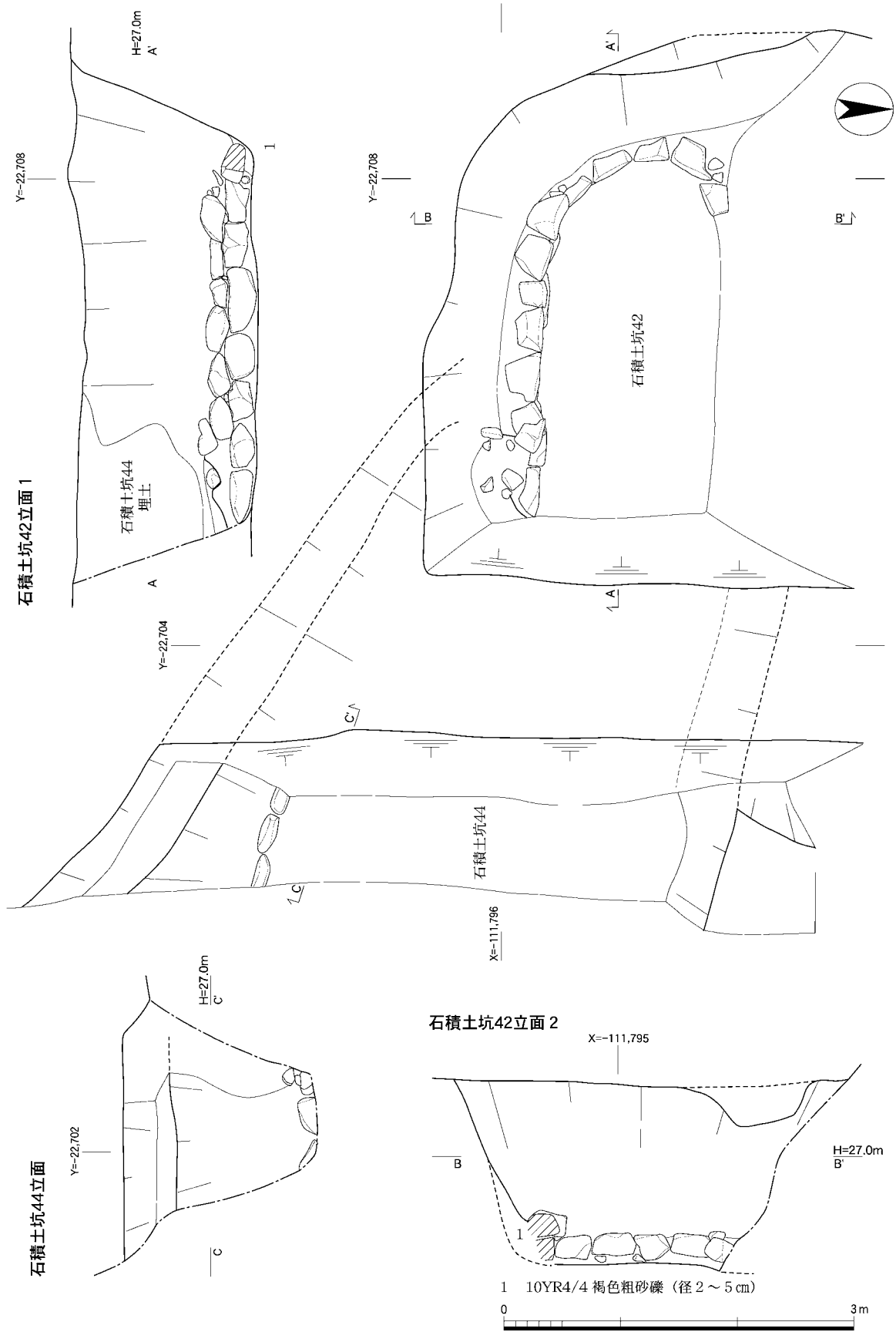


图 46 石積土坑 42・44 実測図 (1 : 50)

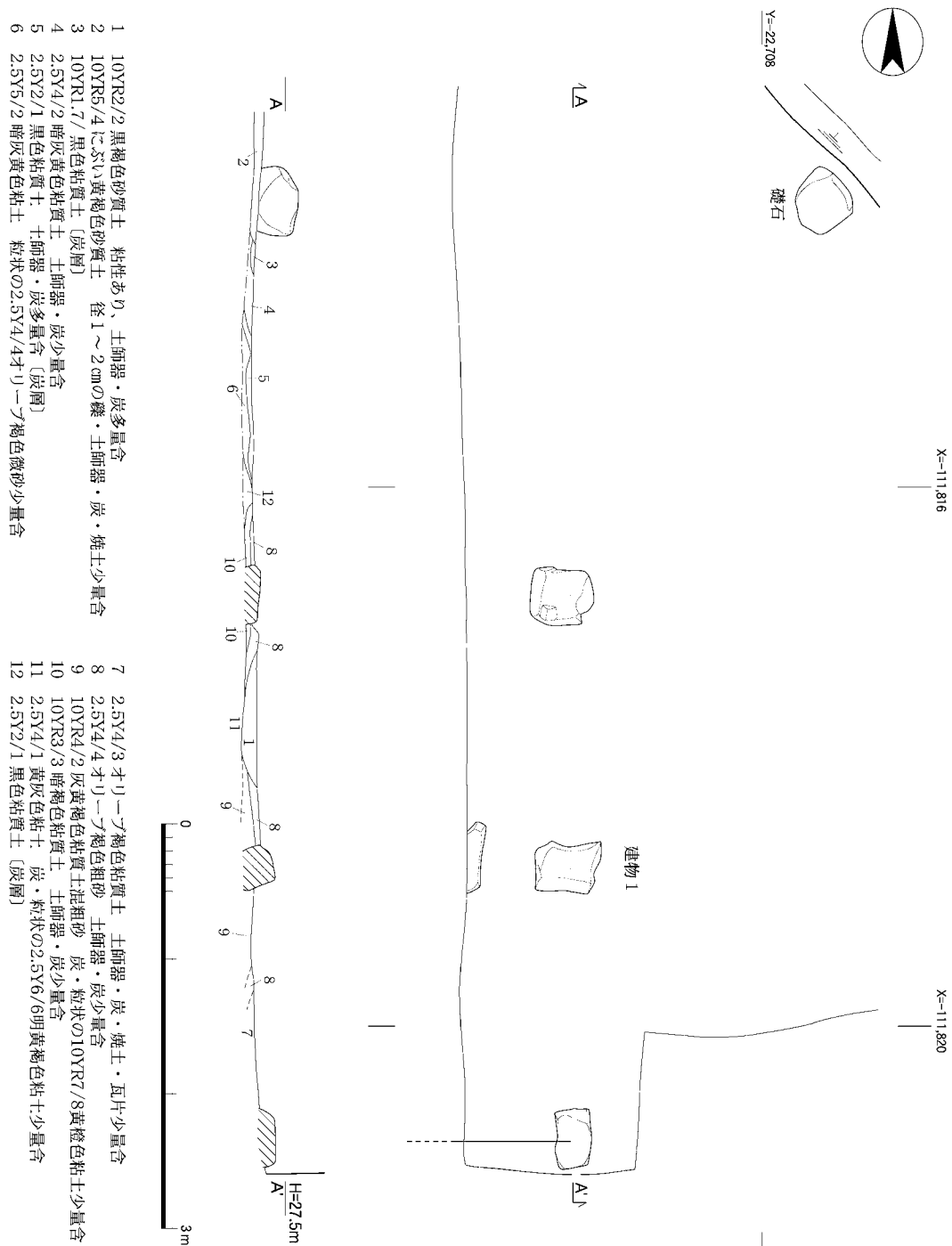


図47 建物1実測図(1:50)

とみられる。この中央の礎石の西側約0.8mで礎石を検出したが、他の礎石周辺では同様の礎石が検出できなかったことから、東石の可能性が考えられる。北東の1基は高さや位置関係が他の4基と合わないことから、別の建物痕跡と考えられる。使用されていた石は、堆積岩や花崗岩で、石の上面が平らになるように据えられていた。北東の礎石は径約50cm、高さ30cm、建物1の北礎石は40cm四方、高さ10cm以上、中央の礎石は南北約40cm、東西約50cm、高さ20cm以上、南の礎石は南北約40cm、東西約20cm、高さ12cm以上、中央西の東石は南北約50cm、東西15

cm以上、高さ7cm以上である。礎石には掘形が認められなかったため、断割を行って断面を確認したところ、整地を行っている最中に石を据え、石の周囲にある程度土を入れてから、周辺を含めて全体的に整地していたことが判明した。この整地土には、炭が多く含まれていた。また、建物1が成立している整地層から建物1を覆っていた整地層の間には、多くの土師器皿などの遺物が混入していた。

柵1 調査区中央東端で南北方向に並ぶ柱穴を3基検出し、これらをまとめて柵とした。最南端の柱穴の北側が土坑45に切り取られていることから、本来は3間分存在したが、南から2つ目の柱穴は土取りが行われた際に、壊されたと考えられる。また、北側についても石積土坑44に壊された可能性がある。柱間は各2mであったとみられる。各柱穴の法量は、最北の柱穴で径0.5m、深さ0.14m、北から2つ目のものは径0.5m、深さ0.12m、南のものは径0.4m、深さ0.16mである。北から2つ目の柱穴底には、平瓦を根石の代わりに敷いていた。

整地層（新池埋立土）投棄土器群（図48） 調査区東の新池を埋め立てた整地層最上面で、約0.7m四方内に投棄された土師器皿が出土した。何れも完形の土師器皿で、二十数枚の大半が内面

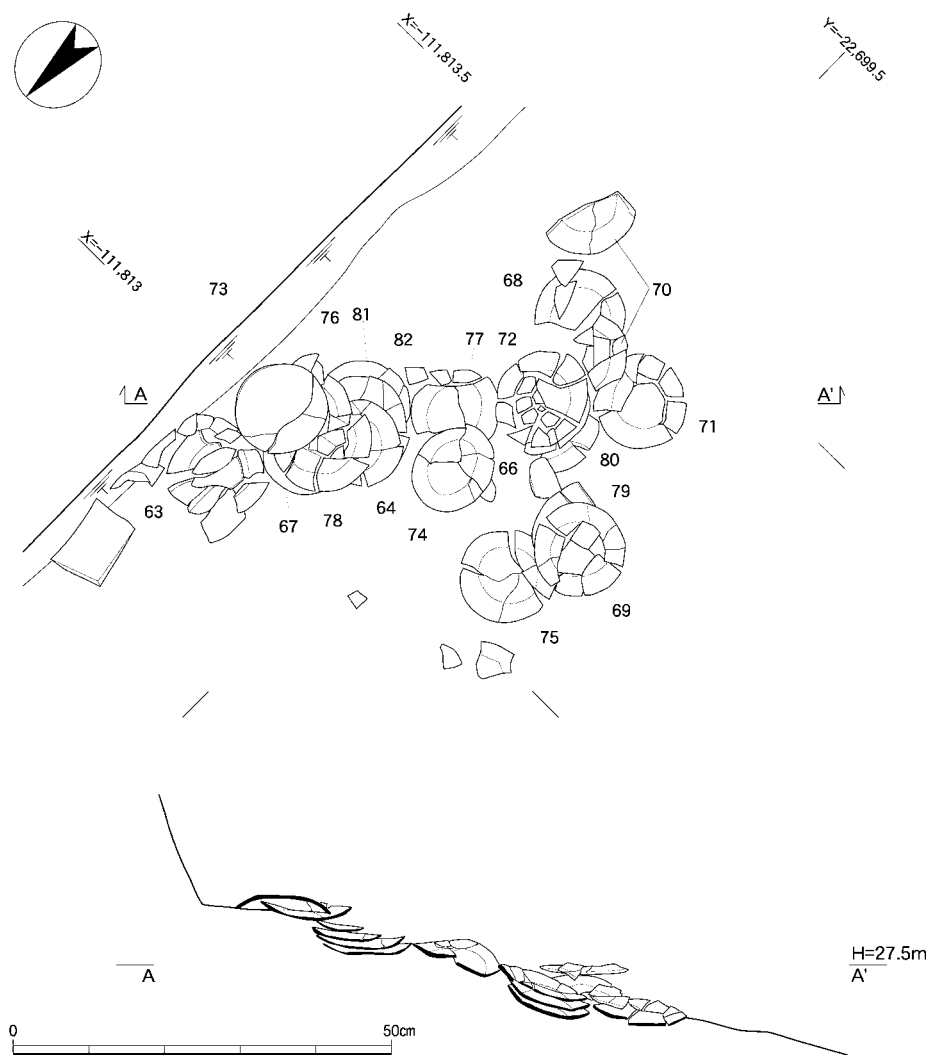


図48 整地層（新池埋立土）投棄土器群出土状況実測図（1：10）

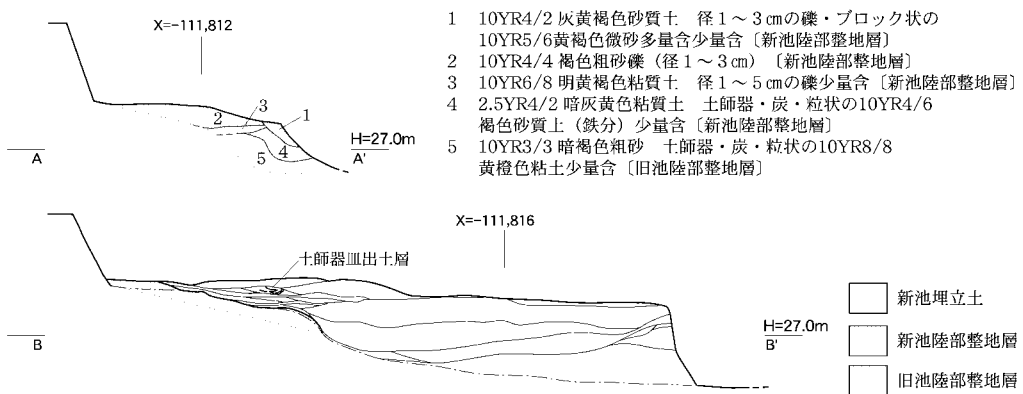


図 49 新池実測図 (1 : 100)

を上に向けていた。数枚は重なったままの状態を検出した。土師器皿直下は平行堆積であったが、土師器皿が北東から南西方向に向かって緩やかに傾斜していた。そのことから、一定の整地が終わった段階で北東から南西に向かって一括投棄された土師器皿と考えられる。時期は17世紀中頃である。

新池(図49) 調査区南東部では、池跡を埋め立てた整地層上面で遺構が確認できなかったことから、これを除去し、池の調査を行った結果、新池の肩口を検出した。新池の肩口は調査区西へと続き、池跡はさらに調査区外へと広がることがわかった。新池の南北方向の規模は8m以上で、東西方向は25m以上になることが明らかとなった。池の堆積土は大きく3時期に分けられ、最下層で約0.2m、全体では約0.6mの厚さとなる。水深は1次調査と同じ見解で、約0.8m前後であったと考えられる。池の肩口はX=-111,811付近から緩やかに傾斜し、X=-111,813付近から急に深くなり、X=-111,814付近でさらにほぼ真直に下がり池底となる。池底は地山の砂礫層を平坦に削って造る。陸部は旧池の陸部に0.5m前後の盛土を行い、嵩上げを行っていた。褐色粗砂礫や暗灰黄色粘質土などの土を使用して、旧池の肩口から石垣状遺構36付近まで盛土していた。その後、石垣状遺構を造り、化粧土を薄く整地したとみられる。先述した建物1との関係から、新池の存続期間が短いものであるということを再認識できた。池底を確認するために、池の中央付近に断割を入れたところ、堆積土中より木材や金銅製鈴などが出土した。

石垣状遺構36(図50) 調査区中央の新池陸部で検出した。花崗岩製間知石を積み上げたもので、長さ約2m、高さ約0.5mの1～3段分が残存していた。石は新池陸部整地層の最上面に積まれた後、裏込めとして一部整地層を掘り込んで、にぶい黄褐色砂質土を入れていた。その後、石垣の前面全体に薄く化粧土とみられる黄褐色粘土と褐色粘土の混じった土を敷いたものとみられる。南面しており、西端が北に向かって緩やかに弧を描く。花崗岩には、加工痕跡である楔跡などが認められた。なお、裏込めの範囲は、石表面より約0.8mである。

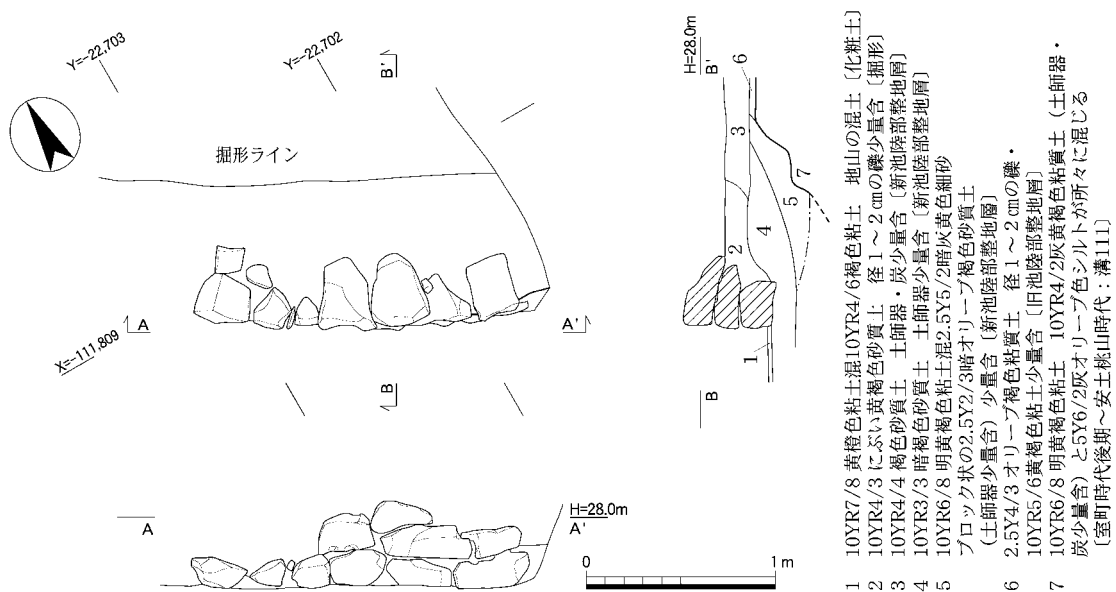


図50 石垣状遺構36実測図(1:40)

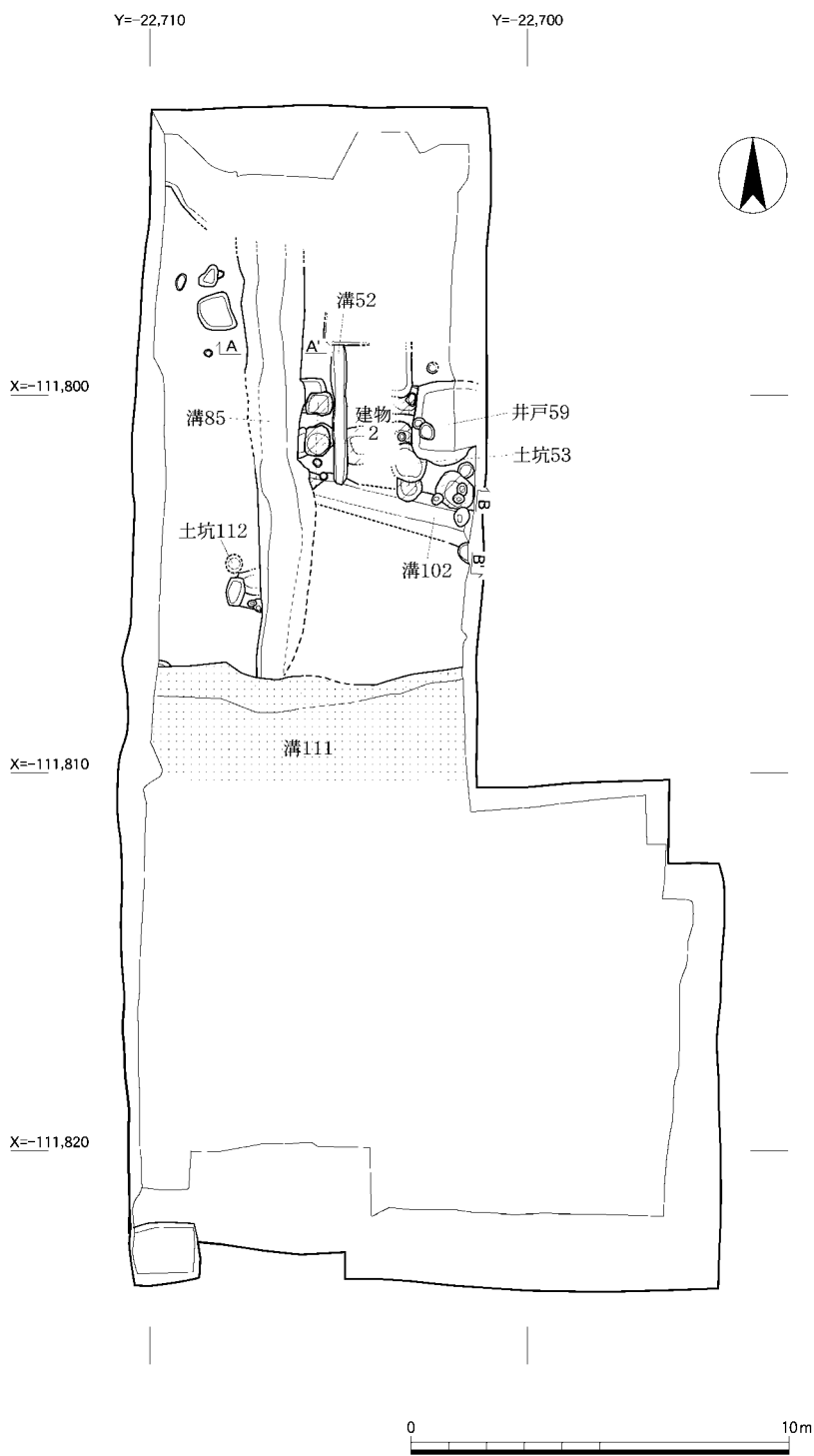


図 51 本願寺京都移転以前遺構平面図 (1 : 200)

石列状遺構 37 石垣状遺構の南側に位置する。新池陸部が池に向かって傾斜する頂点で、約 3 m に渡って検出した。東西方向の幅約 0.4 m の範囲に拳大の礫を不規則に敷き詰めたもので、掘形は認められなかった。西端が南に向かって弧を描いていた。水はけを良くするために礫を敷いた雨落ち遺構とみられる。

土坑 107～109 調査区中央西寄りで見出した土取土坑群である。調査区周辺の地山が黄褐色の綺麗な土であることから、建物の壁土などに使用するために採掘された痕跡とみられる。土坑は大きなもので一辺約 5 m の規模があり、幾つもの土坑が近接または重なっていた。深さは 0.2～0.7 m と異なる。

#### (6) 安土桃山時代末から江戸時代前期の遺構 (図 45)

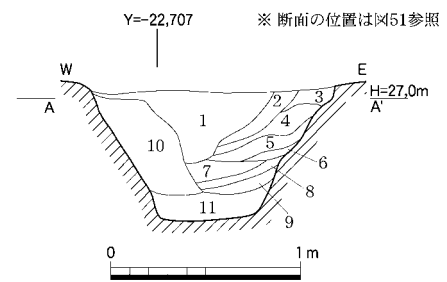
昨年度検出した旧池の肩口の続きと、旧池陸部整地層の境目 (図 41) を確認することができた。

調査区南東部に広がる新池の陸部東端に断割を入れたところ、旧池の肩口を検出した (図 49)。この肩口は調査区中央付近で新池陸部を断割した際にも確認していたが、これより西側には攪乱坑があったため、さらに西では確認することができなかった。当初、旧池は調査区中央附近までの範囲であったと考えていたが、新池肩口の約 0.3 m 下層の砂礫層 (これを新池陸部整地層第 1 期としていた) が標高などから旧池肩口の可能性が高いと判明した。これにより、現時点で確認できた旧池の規模は、南北 8 m 以上、東西 26 m 以上となる。また、陸部には、瓦が大量に入れられた土坑が東西に連なっていたことから、陸部を整地してから池の肩口を造ったということを再確認した。この整地の範囲は、X=-111,809 付近から始まり、深さ約 0.6 m であった。埋土は、明黄褐色粘土に灰黄褐色粘質土や灰オリーブ色シルトが所々で混じる層を主体に、中世の土師器や炭の小片を含む土がブロックとなって入っている。地山の黄褐色土を掘り抜いて、地山のシルト層で掘削を中止し、その後、整地していったとみられる。

#### (7) 室町時代後期から安土桃山時代の遺構 (図 51)

調査区北半で南北溝、調査区中央で東西溝を検出したが、それ以外の部分ではこの時期に該当する遺構を確認することができなかった。

溝 85 (図 52) 調査区中央北寄りで見出した。南北方向の溝を検出した。上面幅約 1.4 m、底幅 0.6 m、深さ約 0.7 m の規模で、断面形状が逆台形となる。南北両端を新しい時期の遺構に壊されており、長さは 11 m 以上になるとみられる。平瓦を含む最下層と溝の西半分を、一旦地山に近い土を使用して埋め戻しを行った形跡が認められた。その後再度掘られた溝も、断面が逆台形を呈する。



- 1 10YR4/2 灰黄褐色粘質土  
径0.5cmの礫・土師器・炭少量含
- 2 10YR2/2 黒褐色粘質土 土師器少量含
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土
- 4 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土混細砂  
土師器・炭少量含
- 5 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土
- 6 2.5Y5/6 黄褐色粘質土
- 7 5Y4/1 灰色粘質土 土師器少量含
- 8 5Y6/2 灰オリーブ色粘質土
- 9 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 土師器・炭・  
粒状の10YR5/6黄褐色粘土少量含
- 10 10YR5/2 灰黄褐色粘土混10YR5/6黄褐色粘土  
地山の混土
- 11 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 平瓦多量含

図 52 溝 85 断面図 (1 : 40)

最上層の断面も逆台形を呈することから、掘削が繰り返し行われていた可能性がある。

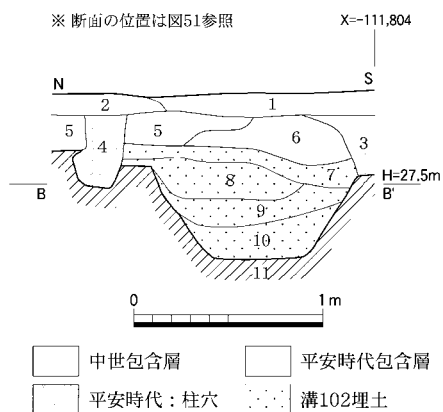
溝 111 (図 41) 調査区中央で東西方向の溝を検出した。溝の南肩が旧池陸部や新池に壊されていた。幅は 3.8 m 以上、深さ約 0.8 m、長さは 8 m 以上である。埋土は、地山の土である明黄褐色粘土に中世の遺物を含む灰黄褐色粘質土や、地山の灰オリーブ色シルトが所々に混じる。溝の北端底付近には、暗オリーブ褐色砂質土などが薄く堆積していた。遺物が出土しなかったため、詳細な時期は不明である。遺構の性格については大規模であることから、濠状の遺構とみられる。

## (8) 平安時代から鎌倉時代の遺構 (図 51)

この時期の遺構は、近世遺構による削平を免れた調査区北半分で検出した。12 世紀の遺構を中心に、11 世紀から 14 世紀の遺構がわずかな隙間に重なって存在していた。室町時代後期以降の遺構からも、平安時代前期から鎌倉時代初頭までの遺物がまとまって出土することがあり、調査区全域に当該期の遺構が展開していたとみられる。

建物 2 調査区北寄り検出した。建物 2 は東西 2 間以上×南北 2 間以上の規模になるとみられるが、柱間が 1.2 m と狭い。そのため、2 棟分の柱穴である可能性も考えられる。また、柱穴には、下層に別の柱穴が重なっているものがあることから、建替が行われた可能性がある。上層の柱穴は径 0.3 m の円形や一辺約 0.8 m の方形を呈するが、下層の柱穴は一辺約 0.9 m の方形や不正円形のものであった。埋土は、上層の柱穴が褐灰色粘土、下層の柱穴が暗灰黄色粘土であった。遺物は、上・下層の柱穴からともに須恵器甕胴部片が大量に出土したが、時期を特定できるものはほとんど出土していない。平安時代前期頃とみられる。

井戸 59 調査区北半部東端で検出した。一辺約 2 m の隅丸方形になるとみられるが、東辺が調査区外のため詳細不明である。また、遺構保存レベル



- 1 10YR3/3 暗褐色砂質土  
〔江戸時代整地層または包含層〕
- 2 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土 土師器・炭少量含
- 3 10YR2/2 黒褐色粘質土 土師器・炭多量含
- 4 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土 土師器・炭少量含
- 5 10YR5/2 灰黄褐色粘質土 土師器・炭少量含
- 6 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土
- 7 10YR4/2 灰黄褐色粘質土混微砂
- 8 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂
- 9 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土
- 10 10YR2/3 黒褐色粘土
- 11 10YR5/6 黄褐色粘質土〔地山〕

図 53 溝 102 断面図 (1 : 40)

よりも深い遺構であったため、検出面より 0.65 m 掘り下げた後、掘削を中断している。埋土は粒状の明黄褐色粘質土や土師器片、炭を少量含む灰黄褐色粘質土である。出土遺物には、土師器皿、須恵器坏・甕・壺、焼締陶器壺、平瓦、焼土塊などがある。13 世紀頃に埋められたとみられる。

溝 52 調査区北寄りの溝 85 の東側で、並行して検出した。南北方向の溝は幅約 0.2 m、深さ約 0.2 m、長さ 3.4 m 以上の規模である。埋土は、にぶい黄褐色粘質土などであった。遺物は土師器などの細片が出土している。遺構の重複関係から、平安時代後期頃に造られたとみられる。

溝 102 (図 53) 建物 2 や溝 52 の南縁辺部下層で検出した。幅約 1 m、深さ約 0.5 m で、断面形状は逆台



形となる。北西から南東方向に中心軸がある。埋土上層は、粘質土と微砂の混土、細砂の流水痕跡が認められたが、下層は粘質土や粘土などからなり、水が滞留していたとみられる。時期は遺構の重複関係から、平安時代前期頃とみられるが、遺物が出土しなかったため、詳細は不明である。

土坑 58 井戸 59 の南西で、建物 2 の柱穴の一部に切り勝った状態で検出した。径約 0.8 m の不正楕円形を呈する。深さ約 0.06 m である。土師器皿、緑釉陶器などが出土した。平安時代前期中頃とみられる。

土坑 112 調査区中央西寄りの溝 85 の西側で検出した。径約 0.4 m の円形土坑で、底からほぼ完形の土師器皿が出土した。時期は、14 世紀前半頃である。

### 3. 遺物

#### (1) 遺物の概要

出土した遺物の総量は、遺物整理箱に 56 箱である。内訳は、土器類・瓦類が 55 箱、木製品が 1 箱であった。多くの遺物は、池跡を埋め立てた整地層や陸部整地層、石積土坑などから出土し、その整地層や石積土坑の遺物は土師器皿が大半を占める。また、陸部整地層の遺物は、安土桃山時代の丸・平瓦が主体であり、土器類は皆無であった。平安時代から鎌倉時代にかけての遺物は、当該期の遺構からだけではなく、新池堆積土中や陸部整地層、新池埋立土（整地層）から出土している。特に、緑釉陶器碗・皿の底部や口縁部細片、青磁や白磁片などの平安時代前期から中期前半と平安時代後期の遺物が多い。木製品には、江戸時代前期の新池から薄い板材や杭とみられる加工された丸太などがある。その他に、江戸時代前期の新池堆積土中から金銅製の鈴が出土し、煙管の雁首と吸口が土坑などから数個出土している。ミニチュア製品や玩具類は一切出土していないのが、特徴的である。

#### (2) 土器類

礫層出土土器（図 54） 1 は備前焼の甕である。口径 52.0 cm、残存高 62.6 cm を測る。外面肩部には、甕の正面とみられるところに押された半截竹管形の刻印があり、その真裏に当たる部分には窯印とみられる「一」の下に「〇」をへら描きしたものが認められた。「万」という字の可能性が高い。内面調整はハケメのち工具によるナデ、外面は工具によるナデである。

石積土坑 42 出土土器（図 55） 2～10 は土師器皿である。すべて見込みに圈線を持つ。2～4 は口径 9.3～11.0 cm、5～10 は 11.8～12.1 cm である。3 は下部の器面に両側から孔が開けられている。11 は天目形の京・信楽系陶器碗で、鉄釉を両面に掛けている。12・13 は瀬戸・美濃産の皿である。12 の口縁端部内面には、釉薬がバリのようにな一部が出ており、重ね焼きの痕跡とみられる。また、高台見込みには溶着したものを無理に剥がしたような輪トチン痕が残っている。14 は明るい緑色の釉薬が掛けられた施釉陶器皿である。器厚が薄く、高台が低い。内面に線刻で葉のような文様を描く。外面は粗いケズリ痕跡のように凹凸が認められる。華南三彩と考え

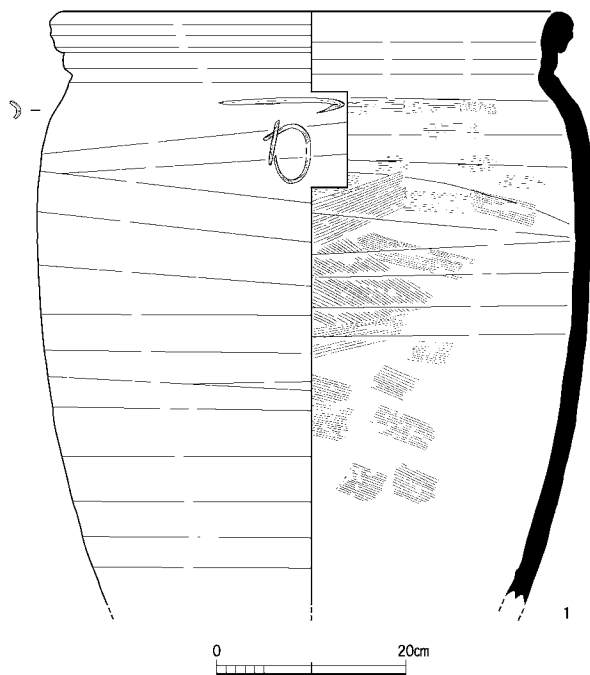


図 54 建物基壇とみられる礫層出土土器実測図（1：8）

られる。15・16は肥前磁器染付椀である。15は内外面に文様、高台内には「年製」と描かれている。前半の文字は欠損しているため、不明である。口縁端部が外反する。16は高台に離れ砂が付着していた。17は畳付に溶着痕が残る白磁の椀である。18は6本単位の挿目を持つ挿鉢である。口縁端部内面に段があり、外面には2条の沈線を施す。信楽焼とみられる。

石積土坑44出土土器（図55・56）19～21は土師器皿で、口径は11.2～12.2cm間におさまる。22は京焼の施釉陶器平椀になるとみられる。透明釉を内外面に掛ける。外面下部に匏目ケズリがあり、

表 8 2次調査遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代～鎌倉時代	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦質土器、白色土器、輸入磁器、焼締陶器、瓦など		土師器5点、須恵器5点、緑釉陶器5点、灰釉陶器1点、瓦質土器3点、白色土器2点、輸入磁器1点、銭貨2点、埴1点		
鎌倉時代～室町時代	土師器、瓦質土器、輸入磁器、瓦など		軒平瓦1点		
室町時代後期～桃山時代	瓦		金属製品(釘)1点、平瓦1点		
桃山時代	瓦		軒平瓦3点、道具瓦1点、丸瓦2点		
江戸時代前期	土師器、施釉陶器、輸入磁器、瓦質土器、焼締陶器、瓦、木製品、金属製品など		土師器40点、施釉陶器7点、瓦質土器3点、輸入磁器4点、肥前磁器3点、焼締陶器2点、軒丸瓦2点、軒平瓦1点、丸瓦1点、平瓦1点、金属製品2点		
江戸時代前期～中期	土師器、肥前磁器、施釉陶器、焼締陶器、瓦など		土師器19点、施釉陶器4点、輸入施釉陶器1点、肥前磁器9点、焼締陶器1点、石製品1点、金属製品4点、銭貨1点、軒丸瓦1点、軒平瓦3点、道具瓦6点、平瓦2点		
江戸時代後期以降	瓦など		井戸椀瓦1点		
合計		71箱	153点 (15箱)	56箱	0箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より15箱多くなっている。

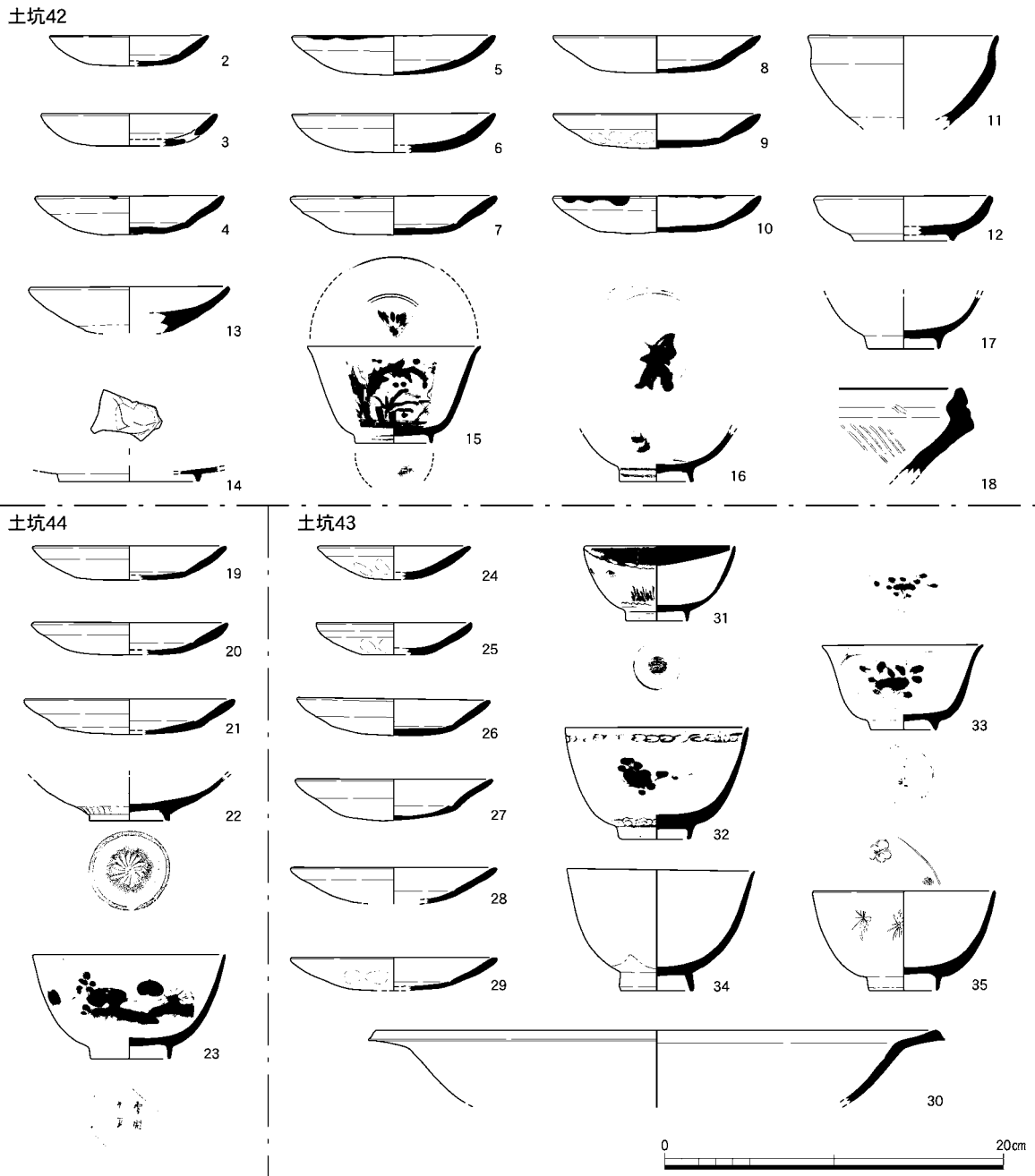


図55 石積土坑42・44、土坑43出土土器実測図(1:4)

高台内には意匠化した「粟田口」銘の刻印が押されている。23は肥前磁器染付の椀で、外面に文様を描く。高台内には「宣明年製」と文字が入れている。

土坑43出土土器(図55)24~29は土師器皿である。24・25の見込みには圏線がない小型皿である。色調は他の土器が橙色系であるのに対し、25・27は灰黄色系である。30は口縁部が外反し、内面がナデによってわずかに窪む焙烙である。31~35は肥前磁器椀である。31は口縁端部内面から中央附近にかけて斜めに染付け、外面に笹や草、水文様、高台内には「寿」を丸で囲ったものが描かれている。32は外面中央に梅樹文を配し、口縁端部と外面下部に反転「の」の字の連続したものと花卉の連続した文様を描く。33は内外面に灰釉を掛けた無文の椀で、高台には釉薬が

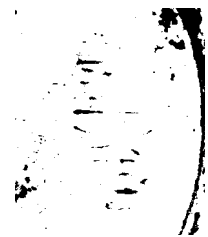


図56「粟田口」銘(図55-22、約2倍)

掛けられていない。34は外反する口縁を持ち、見込みに花文、外面に草花文、高台内に鷹揚な「大明」という文字が描かれている。35は色絵碗であるが、色絵自体は色が無くなり痕跡しか残っていない。見込みに梅花・菊花文、外面に菊花文とそれらを繋ぐ莖らしきものが描かれている。見込みの菊花が付着した砂を花の中心に置いていることから、白磁として流通させる予定が汚れてしまったために、上絵付けして汚れを隠して製品とした可能性が高い。

建物1上層整地層出土土器(図57) 36は口径9.0cm、37～45は口径10.7～12.9cmの土師器皿である。46は口径19.8cmになる大型の土師器皿である。36以外はすべて見込みに圏線が入る。40・41～44は、灯明皿としての使用頻度が高かったのか、焦げた痕跡が口縁部を一周している。47は焼塩壺蓋、48は焼塩壺である。49は瀬戸・美濃産の天目形碗である。内外面に鉄釉薬を掛ける。50は見込みに草文が描かれた絵唐津の皿である。透明釉が掛けられている。51～54は肥前陶器皿で、口縁部が外反した後、端部が立ち上がる器形を呈する。51は底部付近から強く外反する。51から54にかけて、この外反する部分が内湾し、器高が低くなっていく。55は信楽焼の播鉢で、6本単位の播り目を持つ。中心は放射状に播り目が入っているとみられる。外面はケズリのちナデで、胴部中央一帯に指頭圧痕が明瞭に残存する。口縁部外面に沈線が2～3条入り、端部に片口が付く。底面は未調整である。56・57は肥前磁器染付碗である。何れも内面に文様はない。外面に草花や梅樹を描く。56の高台内には圏線が引かれている。58～60は青花と呼ばれる輸入磁器である。58は碗で、見込みに草花文、外面に龍文を描く。高台に釉薬は掛かっていないが、高台内には掛かっている。漳州窯系である。59・60は皿で、前者は見込みに龍、後者は蛇ノ目高台で見込みに蕪を配する。61は瓦質土器羽釜である。内面頸部にハケメ痕が明瞭に残る。外面下部はケズリ調整を施す。62は便槽として使用されていた瓦質土器甕である。器形は口縁端部が外反し、寸胴であるが、下部にいくほど窄まっている。

整地層(新池埋立土)投棄土器(図58) 土師器皿は、11.0cm前半代と11.0cm後半～12.0cm代を測る口径をもつものに大別できる。前者は63と64、後者は65～82である。内面から口縁部外面にかけてナデ調整、外面下部は未調整のものが大半であるが、78や79の様に外面をなでる前にハケメ調整を行うものも含まれる。また、見込み中央がわずかに内側に突出するものが存在する(65・71・77)。73は他の土師器皿とは異なり、底部が平坦で、外面との境が明瞭である。76は73に近い器形を呈するが、外面下半の調整がその他のものと同じで未調整となっている。82の口縁部内面に穿孔途中の孔が認められる。色調は浅黄橙色系が多いが、75のように内面が淡い橙色を呈するものも少なからず存在する。灯明皿として使用されていた痕跡は、口縁端部を一周廻るものが多い。

新池埋立土出土土器(図58) 83～89は土師器皿である。83・84は口径10.1～11.4cm、85～89は口径12.0cm前後である。83は見込みに圏線が入らない。84・87は外面から穿孔している孔が圏線直上付近にある。88のみ内面調整がハケメのちナデである。90は輸入磁器碗で、見込みに雲流文、内面には雲に加え鳥文、高台内には漢字4文字を正方形に配して四角く線で囲う。器厚が非常に薄い。肥前磁器染付碗の91は口縁端部内面に鋸歯文、外面に圏線と草花文を描

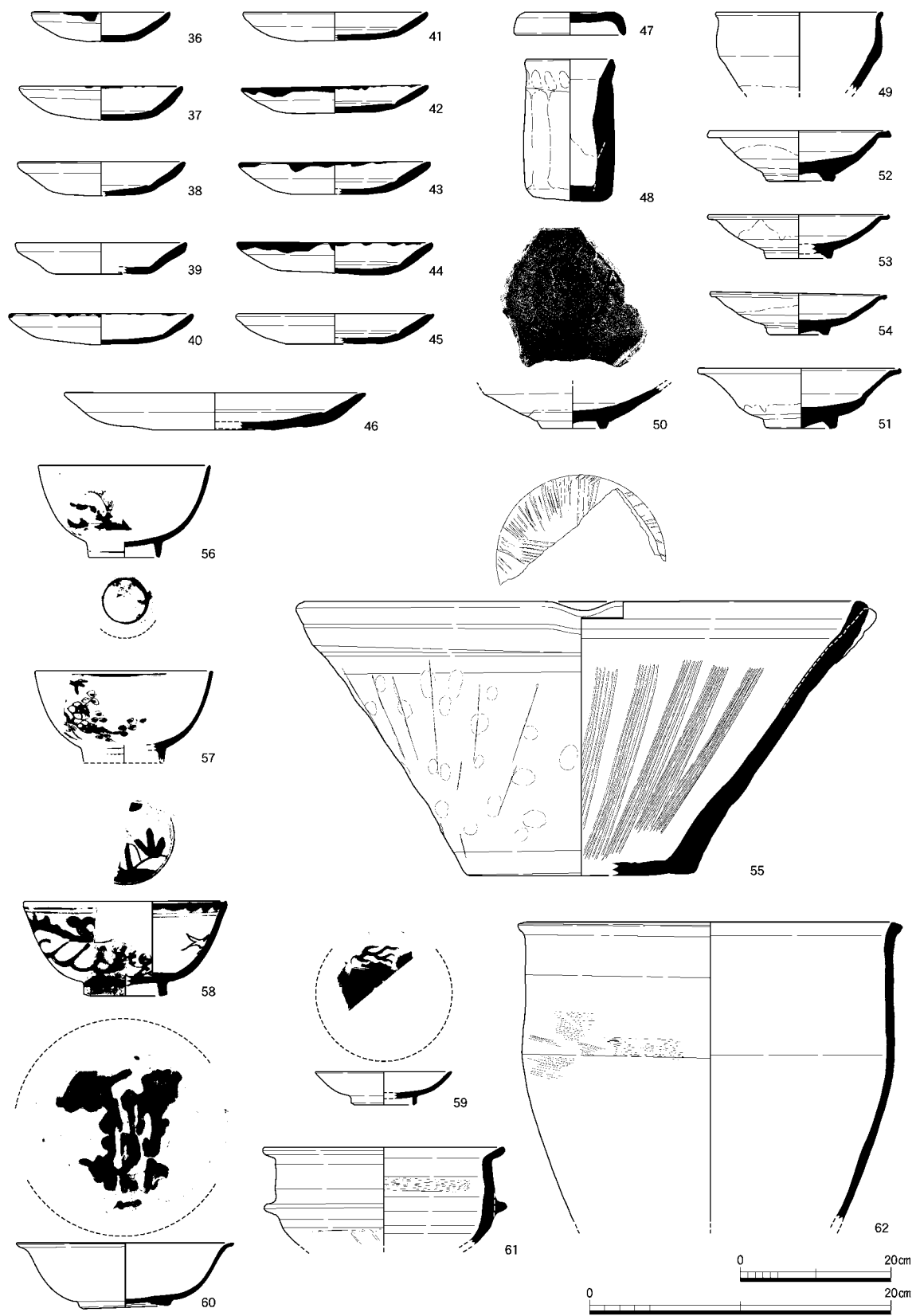


図57 建物1上層整地層出土土器実測図（1：4、62のみ1：8）

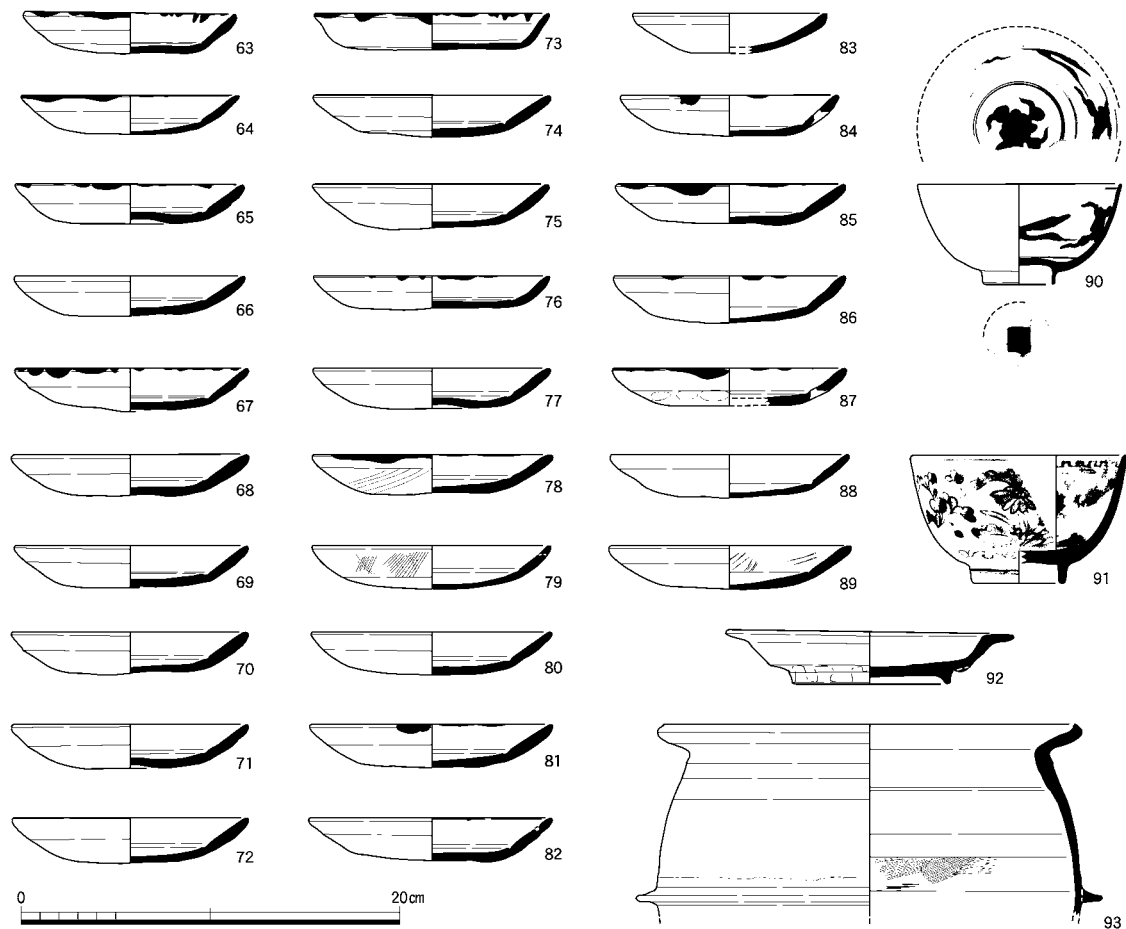


図 58 新池埋立土出土土器実測図（1：4）

く。内外面の釉薬が失透し、白色化している。92 は濃い緑色を呈する釉薬が内外面に掛けられた施釉陶器皿である。器形は底面から外反しながら立ち上がり、口縁端部で横方向に真っ直ぐ延びる。見込みにハリ目、高台内に胎土目が3箇所ずつ残る。青織部とみられる。93 は瓦質土器羽釜で、内外面胴部下半に使用痕が認められる。

平安時代から鎌倉時代の土器（図 59）94 は外面をヘラケズリする土師器皿である。95 の土師器皿は 94 とほぼ同形態であるが、外面はナデである。土師器皿の 96 は橙色を呈する。口縁が大きく外反する。器高が低い、口径が大きい。97 は緑釉陶器椀底部である。円盤状高台で、黄緑色の釉薬が塗布されている。98 は須恵器杯で、貼り付け高台を持つ。99・100 は白色土器高杯脚部と脚裾部である。接点はなかったが、同一個体の可能性が高い。99 は外面を削って面取りを行っている。心棒作りで、棒を引き抜いたときの痕跡が下部に残る。100 は内外を丁寧になでているが、脚部との接合部に足した粘土痕跡はナデ消されていない。101 は須恵器甕の口縁部である。内外を丁寧になで、口縁端部を垂下させる。102 は橙色を呈する土師器皿で、見込みから器形が立ち上がる境目に指頭圧痕を明瞭に残す。103 は外面を強くなでる土師器皿である。104 は須恵器杯蓋で、口縁端部を立ち上げる。105 は須恵器の円面硯である。突帯より下部はほとんど欠損しているが、縦長の長方形の透かし部分が一部残存していた。陸部は使用痕が明瞭に残る。硯面裏側に自然釉が発生している。106 は須恵器甕の口縁部である。端部を摘みあげる。107 は

灰釉陶器皿である。緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁端部で外反する。口縁部外面を強くなでる。底面を削った後、高台を貼り付ける。108～111は緑釉陶器碗の口縁部や底部である。108・109は黄緑色、110・111は濃い緑色の釉薬である。108は内面に線刻で花文と貼り付け隆帯を持つ。109は円盤状高台、110は蛇ノ目高台である。112・113は瓦質土器碗で、内面にミガキ調整を施し、見込みに暗文を描く。前者は口縁端部内面に沈線が入る。114は瓦質土器の脚付羽釜である。突帯と脚は貼り付けた後、丁寧になでる。内面は丁寧にハケメを施す。115は白磁合子蓋である。身の反し部分があたるところ以外は、釉が掛けられている。頂部の文様は草花とみられる陽刻で、側面は縦方向の陰刻を巡らす。94～97は土坑58、98～101は井戸59、102は土坑112、その他は江戸時代の遺構や整地層などから出土した。

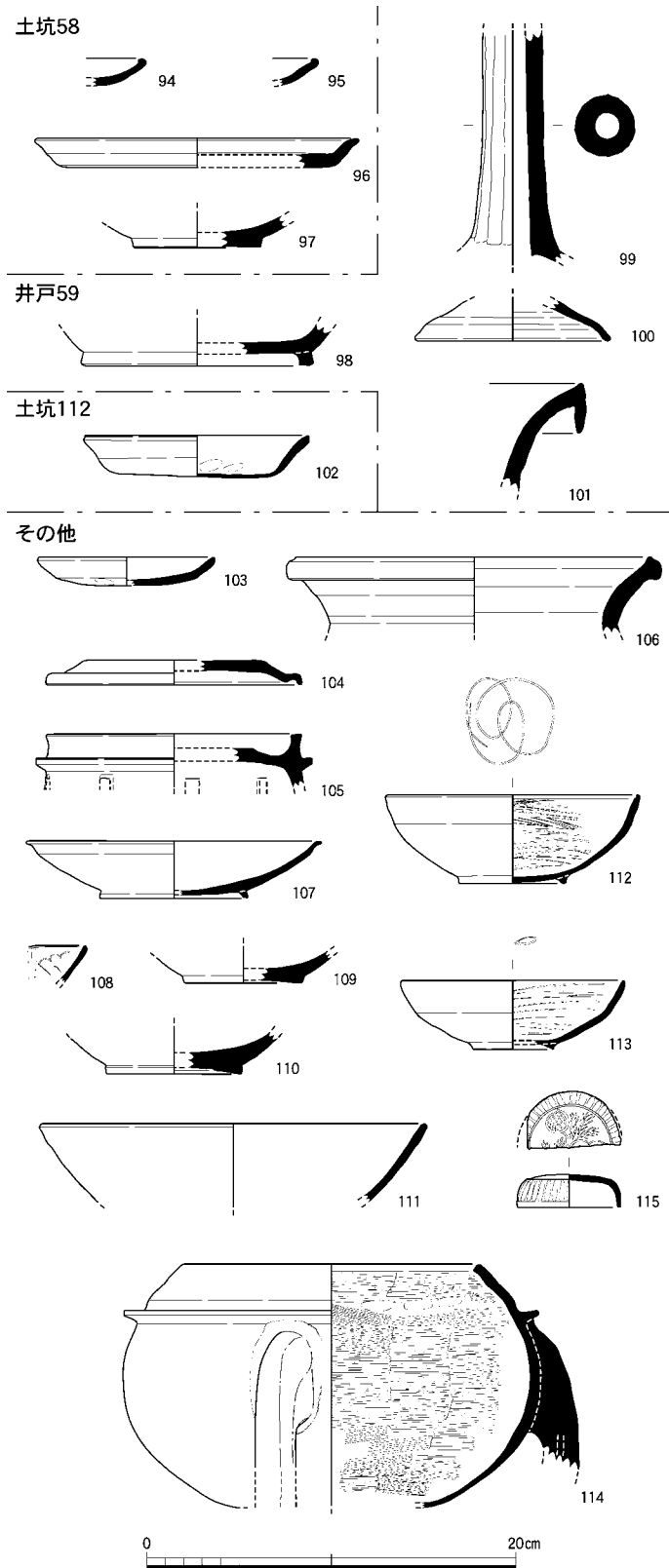


図 59 平安時代から鎌倉時代の土器実測図 (1 : 4)

### (3) 瓦類

今回の調査でも、瓦類は様々な遺構から多数出土している。特に、陸部整地層からは大型の丸・平瓦、土坑43からは熨斗瓦、柱穴1掘形からは焼けた丸瓦などがまとまって出土した。陸部整地層の瓦は、大半の瓦が割れていた。遺構保存をすることが決まっていたので、採集は最小限にとどめ、そのうち実測可能な瓦のみを掲載している。なお、瓦の調整方向は、1次調査の記述と同様である。

軒丸瓦 (図 60) 116 は瓦当面の大半が欠損しているが、三巴文に珠文が廻る瓦とみられる。玉

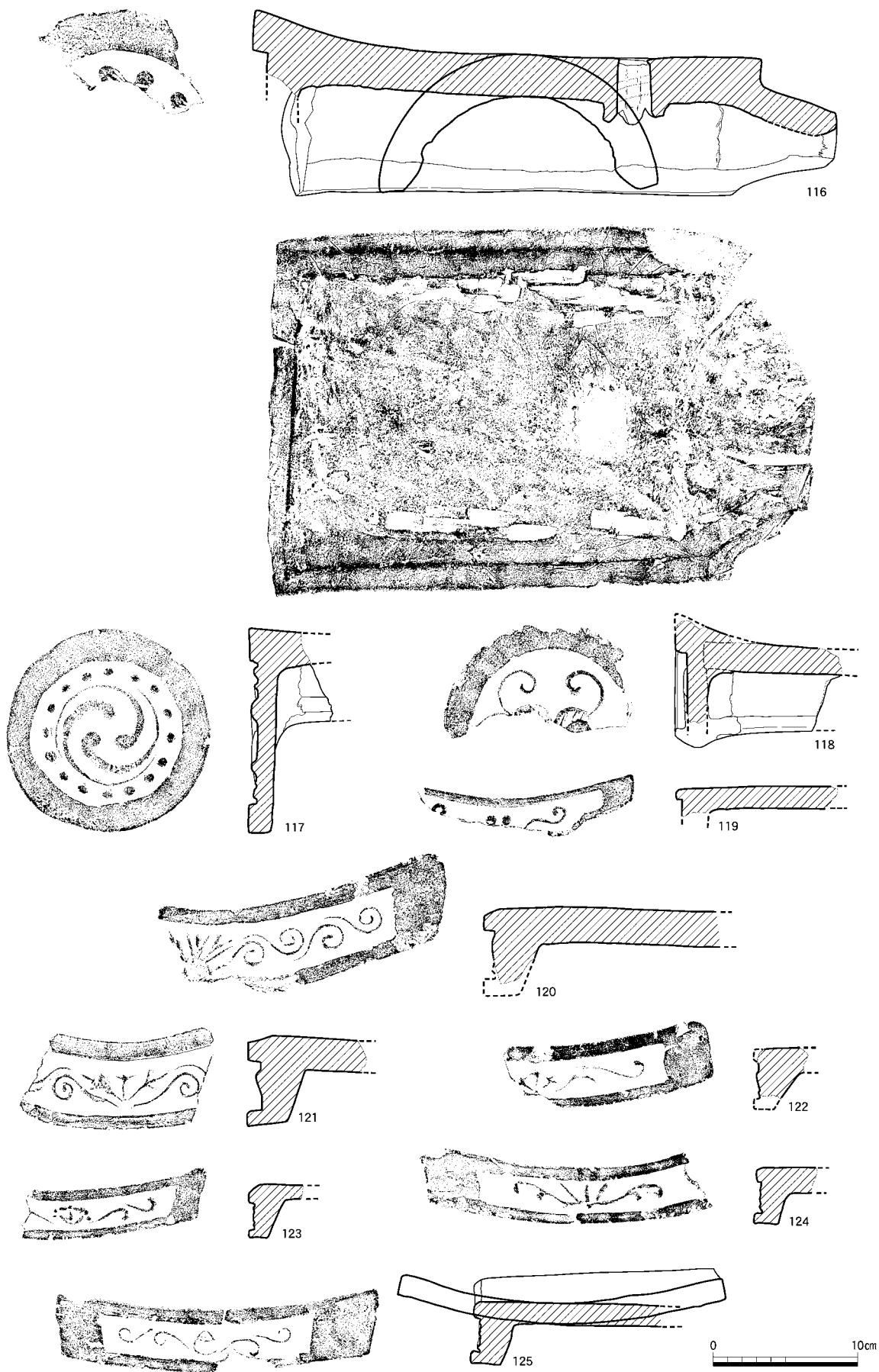


图 60 軒丸瓦、軒平瓦拓影・实测图 (1 : 4)



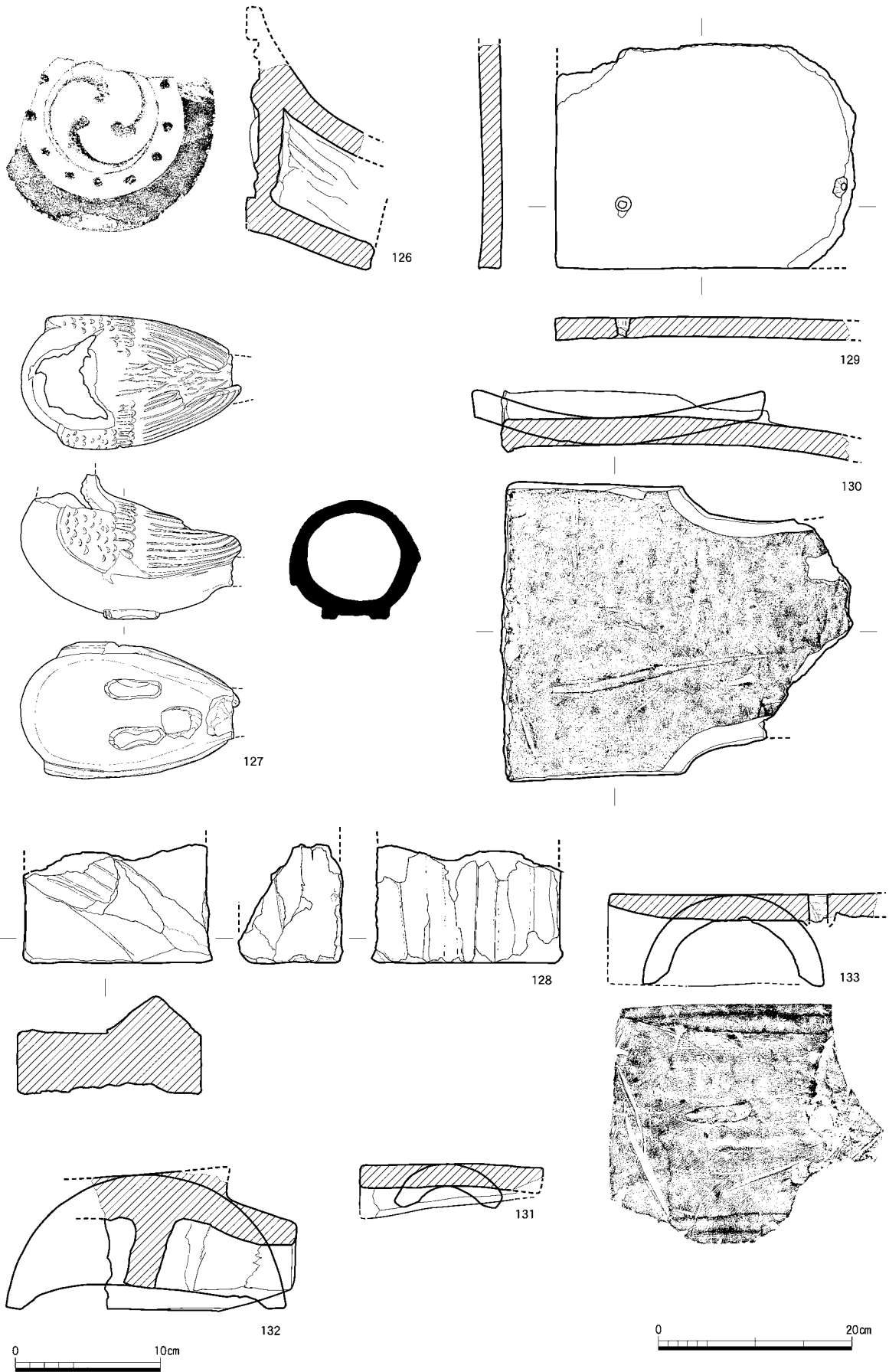


図61 道具瓦、丸瓦拓影・実測図（129・130は1：6、その他は1：4）

縁側に直径約2cmの釘孔がある。凹面は横方向の鉄線引きの後、側縁近くを棒状工具によって削る。布袋痕が残る。117は珠文を16個有する三巴文軒丸瓦である。巴の頭と尾はそれぞれ独立している。周縁の幅が瓦当面直径に対して広い。118は葉のみを表した桐文軒丸瓦で、瓦当面下半部は欠損している。同文様を持つ瓦は、滴翠園内から出土している。

軒平瓦(図60) 119は顎部の残存部分が波状を呈することから、滴水形になるとみられる。120は半裁菊花文とみられる中心飾りを持つ。主葉の先端の巻きが強い。瓦当面上部を横方向に削って面取りを行う。121～123は中心飾りが丁子の唐草文軒平瓦である。121は120同様、主葉の巻きが強いが、122は主葉があまり巻かず、子葉が付く。124は半裁菊花文の中心飾りに、延びかけた主葉が左右に広がる。135は宝珠文を中心に、2転する主葉をその両側に配する。向かって右側の主葉が下方に下がっているのが、特徴である。

道具瓦(図61) 126は鳥衾である。瓦当面上部や丸瓦部が欠損している。珠文を10個以上有する巴文で、巴の頭はくっついていないが、尾は細く線状になって隣のものに付く。凸面を丁寧に削るが、凹面は粗く削る。127は蓋留瓦とみられる。鳩形を呈しており、脚と尾の間に径約2cmの穿孔があることから、この部分に台の突起を差し込んだものと考えられる。脚と羽、尾を貼り付け、尾の下部など要らない出っ張りを削り取り、全体を丁寧に磨いて調整し、羽毛や指先を線刻にて表現している。頭と尾を欠損している。128は棟端瓦で、数個に分けてつくられた部分の内の1つとみられる。上部が欠損していることもあり、天地が不明である。表面に断面三角形の突帯を弧状に貼り付けている。側面は丁寧に削るが、端の処理が粗く、また裏面は非常に粗いケズリのため凹凸ができています。129は熨斗瓦である。平らなもので、2箇所釘孔がある。一方は、作成時のもので、孔の中程で段を持つ。もう一方は、屋根に葺かれたときに開けられたとみられ、両面から叩いて穿孔した痕跡が認められた。130は平瓦の中央辺りの側縁を窪ませて作られている。普通の平瓦の側縁を削り取って、凸面側を丁寧に面取りしたものとみられる。端面に離れ砂が付着している。131は輪違瓦である。凹面に横方向の鉄線引き痕跡が認められる。

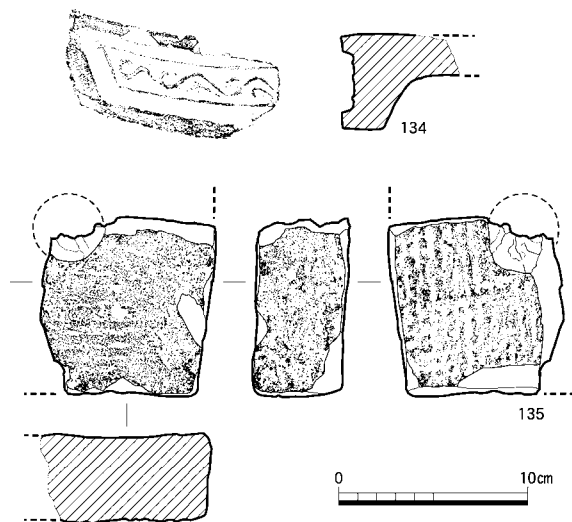


図62 中世の瓦拓影・実測図(1:4)

132は玉縁近くの凹面に半月形の反しが付く丸瓦である。凹面には布目圧痕が認められる。133は釘孔のある丸瓦である。凹面に布目と、縦方向から斜め方向の鉄線引き痕跡が残る。

中世の瓦(図62) 134は唐草文を圏線で囲む瓦当文を持つ軒平瓦である。凹面は布目圧痕のち縦ケズリ、瓦当上部と顎部を横ケズリ、瓦当接合部を横ナデ、凸面を縦ケズリする。鎌倉時代とみられる。135は塼である。全面に縄目圧痕が認められる。表とみられる面のみ縄目をナデ消す。2方向から開けられた孔が4分の1残存する。

刻印（図63）確認した刻印は7種類である。137は丸瓦凸面、140は熨斗瓦端面、142は井戸杵瓦端面にそれぞれ押されていた。その他は、平瓦の端面に押されている。136は文字らしきものを四角く囲む。137は「○」に「△」で、三角の中に横棒を一本引く。138は約12枚の花びらを持つ菊花文、139は丸内に斜格子と点、140は「◎」、141は江戸時代の分銅形、142は丸内に「ふ」文字を配したものである。136～139・141は各1点ずつのみの出土である。140は土坑43から出土した熨斗瓦端面の多くに押されていた。142は井戸21の取り上げた井戸杵瓦20枚の内、10枚で確認している。なお、140の刻印は、御影堂修復の際に確認された寛永瓦に同じ文様の印がある。

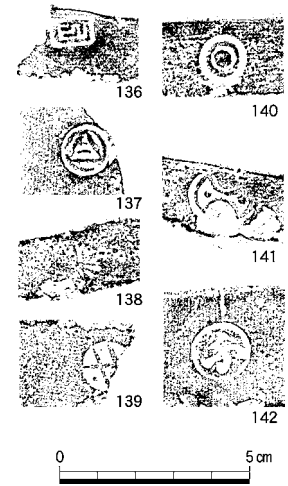


図63 様々な刻印拓影  
(1:2)

#### (4) 石製品 (図64)

143は饅頭形の石製品である。全体に面取りと、研磨痕とみられる擦痕が認められる。江戸時代前期から中期の整地層を掘下げている際に出土した。そのため、正確な時期は不明である。用途に関しても不明である。最大径3.6cm、高さ2.7cm、重さ51.44gである。

#### (5) 金属製品 (図64)

144・145は鉄製の釘で、いずれも断面が四角く、頭が片方に飛び出ている。145は頭から少し下がった辺りから、木目のわかる木質が付着していた。146は銅製の鈴である。金メッキを施

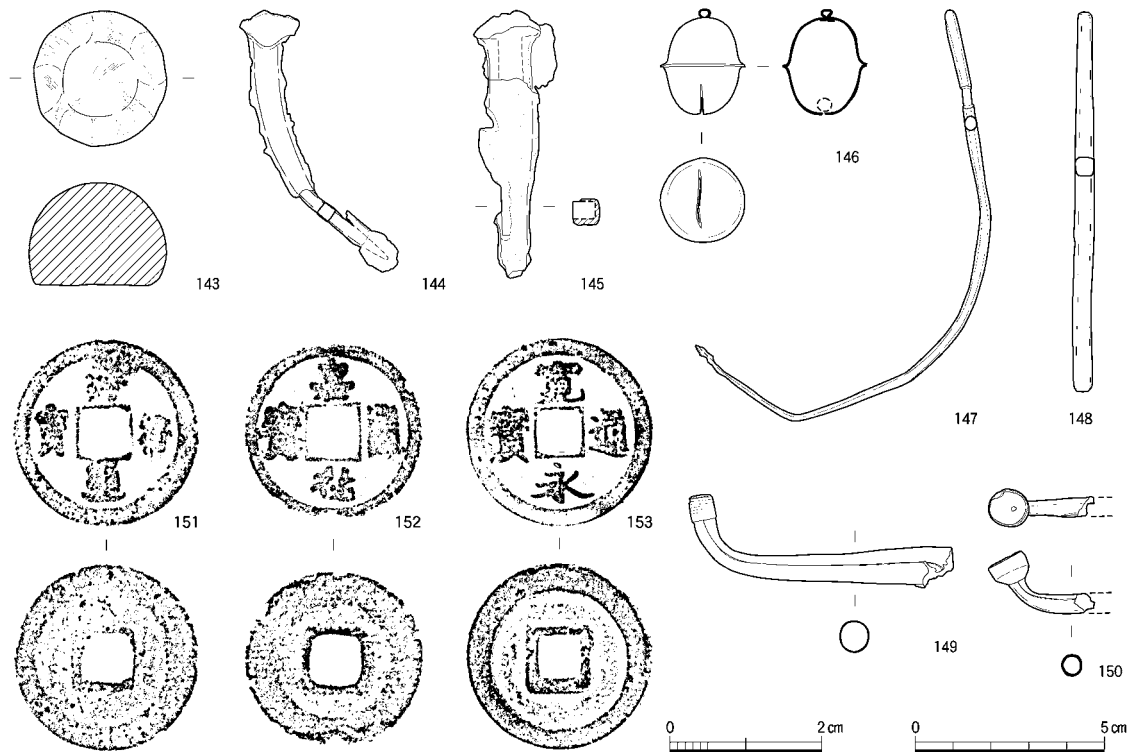


図64 石製品、金属製品拓影・実測図 (1:2、151～153は1:1)

していたとみられる。半球を合わせて接合している。鈴上部には、約2mm幅の板を環にし、片側を鈴内面でまげて固定した紐があり、下部には、線状の孔を開けている。中には円形の舌が入っているとみられるが、正確な形状は不明である。147・148は不明銅製品である。何らかの飾り金具の一部と見られる。147は上部から約2cm下方に、約0.5cm幅の窪みが付けられている。先端は細く尖る。当初から釣針状に曲がっていたのかは不明である。148は断面がほぼ正方形であるが、角を面取りしている。上部から下部にかけて、わずかであるが太くなる。149・150は煙管の吸口と雁首である。149は真鍮板を丸めて溶接した後、口をつける部分に環状金具を嵌める。環状金具には横方向の沈線が数条入っている。150は真鍮板を丸めて溶接した後、火皿を取り付ける。ただし、火皿の下に補強体は付いていない。151～153は銅銭である。151は「祥符通寶」で、裏面の孔がずれていることから、模鑄銭の可能性が考えられる。152は真書体の「嘉祐通寶」である。153は「寛永通寶」である。ス貝寶であることから、古寛永と考えられる。

#### 4. 小 結

今回の成果は、1次調査区からの続きが見込まれていた江戸時代前期の新池を検出しただけでなく、新池陸部の様相が明らかになったことである。1次調査では、調査区全体が池跡であったため、陸部の土地利用について言及することができず、その点が事後の課題として残っていた。また、池が埋め立てられた後の状況、陸部の整地範囲なども不明であった。今回の調査では、それらを明らかにすることができた上に、本願寺京都移転以前の遺構についても、わずかではあるが検出することができた。以下に、1次調査の結果も踏まえて、調査成果を記述する。

##### 本願寺京都移転以前の遺構

調査区中央北寄り江戸時代の遺構が造られなかったわずかな範囲で、平安時代の建物跡や溝、鎌倉時代に埋められたとみられる井戸を検出できた。調査地が平安京左京七条二坊七町に位置し、東市外町に該当することから、平安時代中期以降の遺構については東市関係のものであったと考えられる。次の時期の遺構は、室町時代後期から安土桃山時代のものが確認できた。調査区北端で南北方向の溝85と調査区中央で東西方向の溝111を検出した。形状や規模から、区画溝であったと考えられ、特に東西方向の溝111は新池で南側が壊れているが、幅が1.6m以上あることから、濠状の遺構の可能性はある。ただし、この濠状遺構については、遺構の肩口が池の陸部整地層が行なわれ際の掘形北肩口と並行していることから、整地層（地業）の掘形の可能性も考えられ、検討を要する。

##### 2つの池跡と新池の陸部について

旧池が安土桃山時代末から江戸時代前期、新池が江戸時代前期の時期に造られたということは、すでに1次調査で明らかにした。旧池は、陸部整地層中に入れられていた大量の瓦類の造作が安土桃山時代頃のものともみられることから、京都本願寺の初期造営に伴うものということが今回の調査からも明らかとなった。規模については、東は1次調査区外から、西は少なくとも2次調査区中央附近までの26m以上、南北8m以上となった。一方、1次調査区西半部で検出した新池は、

池を埋め立てた整地層の残存状況が良かったことや、調査区南西において検出した建物跡との関係から、江戸時代前期のものであることが確実となり、また、その上層部から出土した遺物と新池埋立土中出土土器の時期差から、新池の存続期間が非常に短かったことを再確認した。規模についても、2次調査区西端よりさらに西に広がっていることがわかり、東西 25 mを超えるということも判明した。新池の最西端を推定する手掛かりとしては、平成 18 年度から行われている防災工事に伴う試掘・立会調査の成果がある。調査区西に建っている五柳の間南で、中世の遺構や地山とみられる層を確認しており、新池の範囲が調査区西端から 25m 以内に納まることはほぼ確実となっている。そして、この頃の陸部には、石垣状遺構が築かれ、土取土坑が多数開けられていたことがわかった。これら土坑の存在から、現阿弥陀堂南西付近は建物のない空閑地であったと考えられる。採掘された土は、阿弥陀堂などの大建築物を建てる際に壁土などとして使用されたとみられる。

今回の調査でも、本願寺主要建物との関係など明らかにできない点があり、今後の課題である。

## IV まとめ

ここでは、1・2次調査で検出した遺構の性格や時期を文献史料（表1）や絵図から考察を行い、2箇年にわたる調査の総括とする。

### 旧池と新池の築造

1次調査で検出した旧池は、陸部整地層中に含まれていた瓦から、安土桃山時代末から江戸時代前期に造られたとわかっており、江戸時代前期に焼瓦や焼土が混じった整地層によって埋められていた。新池は焼土の入った整地層を東岸に持ち、旧池の埋立と同時またはその後間もなくして造られたとみられる。この旧・新池が造られた安土桃山時代末から江戸時代前期の本願寺は、文献によると、天正19年（1591）に豊臣秀吉から土地の寄進を受け、現在地への移転が開始され、御影堂は天満で使用されていた建物を移築し、阿弥陀堂は新築されたという。間もなくして、慶長元年（1596）に起こった慶長大地震で諸堂が倒壊し、すぐに御影堂や対面所が新築された。元和3年（1617）、本山の浴室から出火して両堂と対面所などが類焼したが、翌年には阿弥陀堂と対面所の新築が始まった。1次調査の小結で述べたように、旧池埋立土から出土した遺物の年代観からみて、旧池の埋立は元和3年の火災処理土などを使用していた。したがって、旧池の廃絶

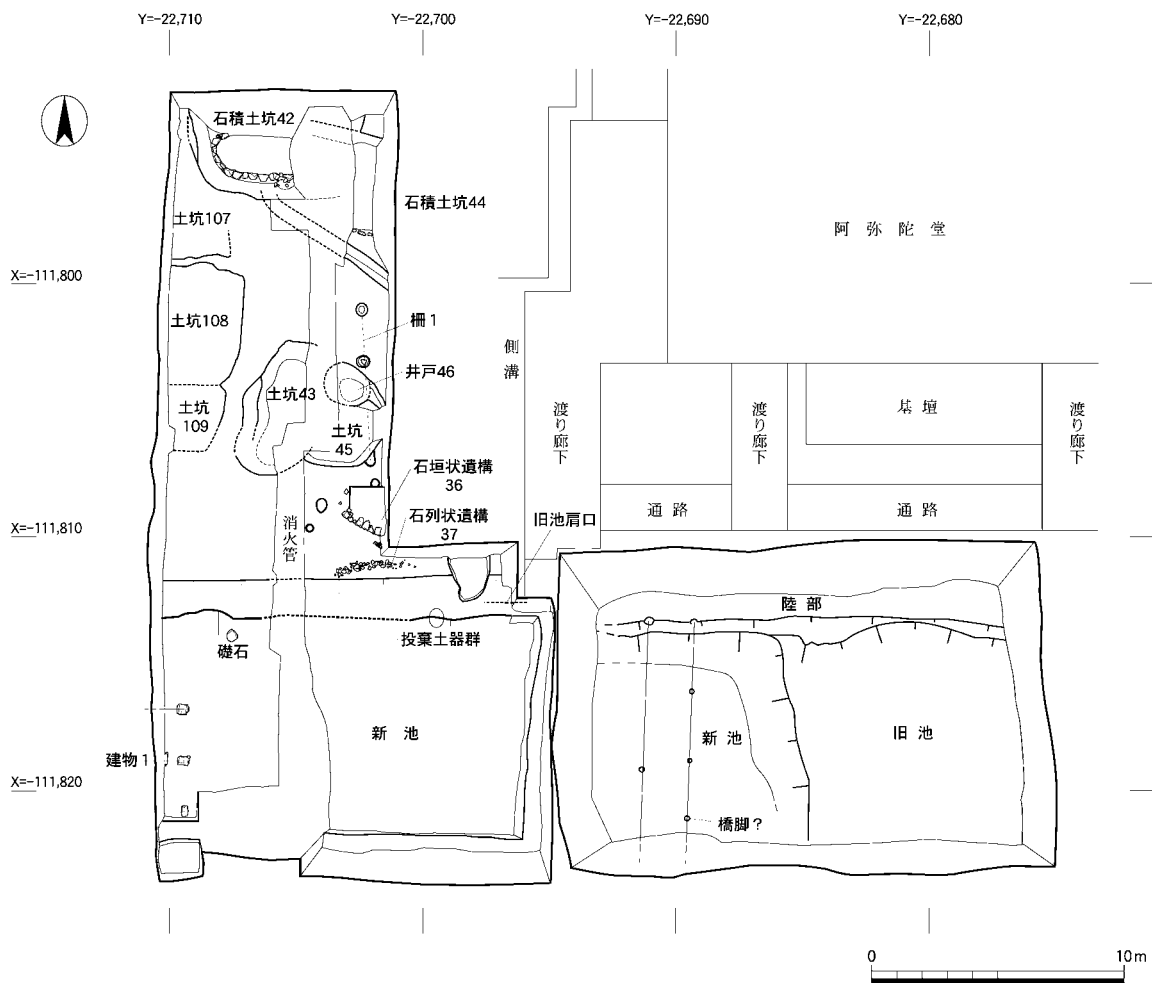


図65 江戸時代前期から中期の遺構（1：300）

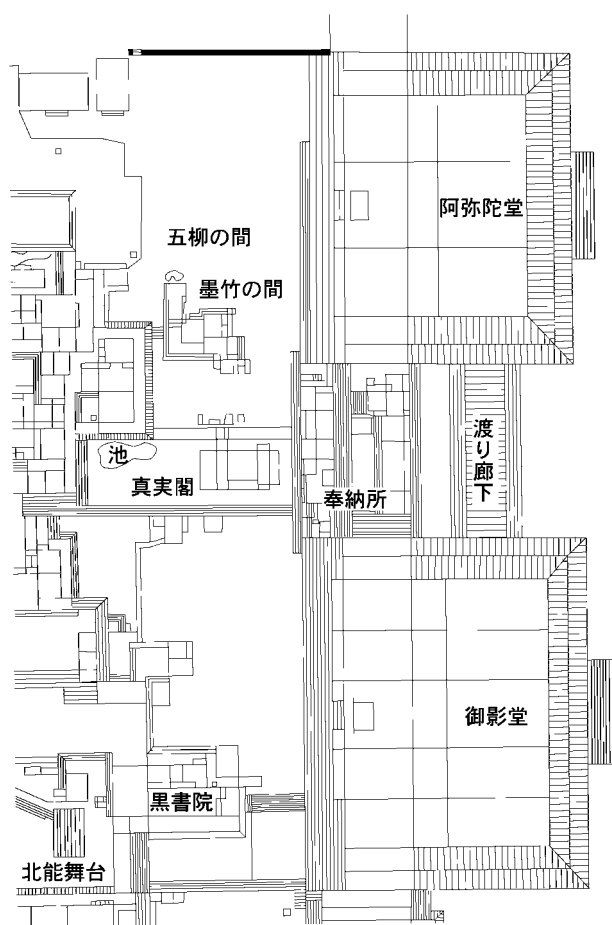
時期と新池の築造時期は 1617 年以降となる。しかし、旧池の造られた時期については、本願寺創建時か慶長の大地震後のどちらかと考えられるものの、陸部整地層に大量に入れられていた瓦類の特徴からは、時期の確定には至らなかった。本願寺初期造営に伴うものではあるが、当該地は当初から池のある景観を有していたのか、大地震後に何らかの用途をも付加して造られたのかは不明である。

#### 新池を取り巻く環境とその廃絶

新池が造られた頃、北西側の陸部は遺構が希薄であることから、空閑地であったと考えられる。2次調査区中央より東の陸部については、現阿弥陀堂の基壇下が調査されていないため、遺構の在り方や層位関係などの詳細は不明である。しかし、元和3年の被災直後の翌年に阿弥陀堂が再建されていることや、石垣状遺構や石列状遺構が建物との境界施設と考えられることから、陸部には阿弥陀堂が建立され、その南西に池が造られたといえる。その池には、橋が掛けられたり、蓮が植えられ、庭としての視覚的な機能があったものとみられる。この新池の存続期間は、堆積土や埋立土から出土した遺物と2次調査で検出した建物1との関係から、非常に短かったと推測される。現在の御影堂が建てられた寛永10年(1633)頃までには埋められていたというのが、今回の成果から言えることである。寛文10年(1670)に「御堂の池に蓮を植える」という記述が文献に認められるが、別の池に関するものであったとみられる。

#### 旧・新池の用途

旧池からは蓮の種、新池からは蓮の葉とみられる放射状に広がる茎状のものや、根とみられる地下茎が出土していることから、両方の池に蓮が植えられていたと考えられる。池の土壌分析からは、池の周りで果樹などの植栽が行われ、植物が繁茂する状態を想定することができる。これらからは、景観を重視する庭的な面が垣間見られる一方で、岸辺が直線的であることから寺地に造られた放生池を彷彿とさせる。また、旧・新池の肩口から池底までの水深が深いこと(図67)や、池の規模が大きいこと、位置などを考え合わせると防火水槽的な役割も視野に入れる必要がある。この場合、必要であったものが埋められた理由として、建物の増築が進み土地が必要になった



1・2次調査区

図66 本願寺境内図  
(明治初頭頃、抜粋して再トレース、調査区は1:1,500)

ことや、両堂の漆喰大壁（防火用の壁）の出現などの要因も考えられる。

### 阿弥陀堂周辺の旧状

江戸時代前期中頃には、2次調査区南西に建物1が建てられ、江戸時代前期から中期には、阿弥陀堂の西側に地下倉庫とみられる石積土坑が造られた。これらの間を縫うように、土取土坑が開けられた。建物1や地下倉庫などは、裏方に所属するとみられる遺構のため、文献からは読み取ることができなかったが、明暦2年（1656）には黒書院、元禄11年（1698）には別殿半隠齋などが御影堂や阿弥陀堂の西に建てられたことがわかっている。御影堂が再建されて落ち着いた後に、西側の整備が進んでいった状況を窺うことができよう。土取土坑はこのような建物建造に伴って、壁土の採取などによりできたものとみられる。1次調査区には式務部の前身の建物が建っていたことが絵図から判明しており、井戸3や井戸4はその建物に伴うものであった可能性が高い。明治初頭に製作された（書写の可能性が高い）絵図（図66）では、検出した井戸3の位置は奉納所という建物の中にあつた「香房」と墨書された部屋にほぼ該当している。この様な部屋に関連する屋内井戸であつたとみられる。

### 江戸時代後期以降の様相

建物基壇とみられる礫層や柱穴を確認しており、何らかの建物が建てられていたことがわかる。石敷遺構36や井戸21はそれらに附属する手洗場のような施設であつた可能性もある。2次調査区北西附近の柱穴や漆喰タタキなどは、明治時代に造立されたといわれている墨竹の間関連の痕跡と考えられる。空闲地の利用が時代を経るごとに活発となり、特に江戸時代後期以降から明治時代にかけての調査区周辺の変化が大きかつたことを窺い知ることができた。

### 標高からみた旧表土と両堂の基壇

図67は主要な地点と旧・新池の陸部と池底の標高値を図化したものであり、図68は両堂と池の関係を距離と断面で表示したものである。安土桃山時代末から江戸時代前期の検出遺構の標高

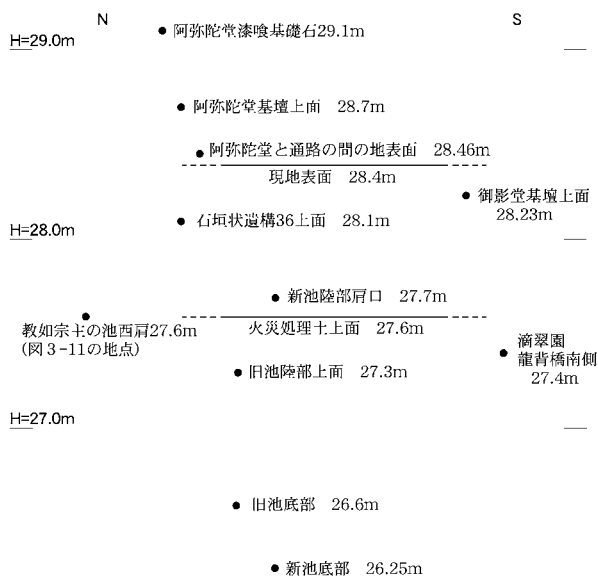


図67 主要地点標高値（1：40）

値は、2次調査の旧池肩口が27.30m、新池肩口から陸部にかけてが27.60～27.70m、旧池と同時期の遺構である平成7年度調査で検出された池跡〔図3-11、文禄2年（1593）に境内の北東隅に宗主であつた教如が隠居し、その屋敷に造られたと考えられている〕が27.60m、滴翠園滄浪池に架かる龍背橋南側の現表土（飛雲閣との関係から地表面の標高がほとんど変化していないとみられる）の標高が27.40mである。その他、境内の旧調査をまとめた表2と合わせてみると、江戸時代前期頃の境内は標高27.00～28.00m以内にほぼ納まっている。これに対し、時期は



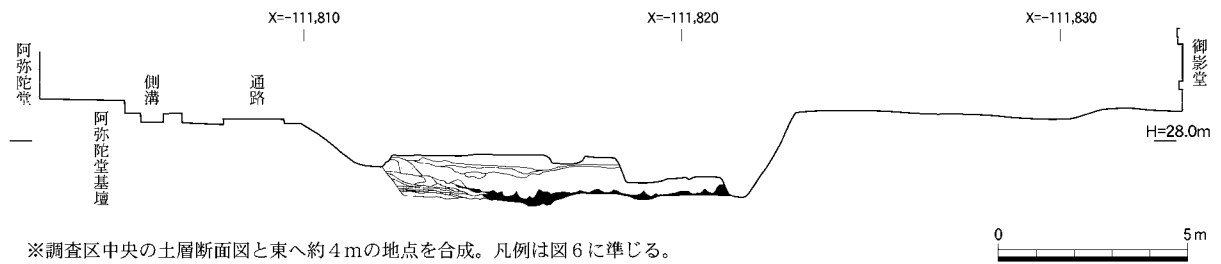


図 68 両堂と旧・新池との関係（1：200）

下るものの、両堂の基壇が非常に高いことがわかる。

本願寺における主要建物の周辺を調査したことにより、創建期の様相が明らかになってきたが、池と建物との関係や池の廃絶理由を含め不明な点が残っており、今後調査をしていく上での留意点であり課題である。

なお、櫻井敏雄氏（近畿大学）、鈴木久男氏（京都産業大学）、萩本 勝氏（平安学園平安中・高等学校）、白石悦二氏（京都府教育庁指導部文化財保護課）、引間俊彰氏（同）、和田秀寿氏（本願寺財務部）には、ご指導・ご教示を賜った。御礼申し上げます。

#### 参考文献

- 上原芳太郎『蓮位と頼恭』下間次郎磨 1939年
- 上原芳太郎『本願寺秘史續編』信義會 1941年
- 櫻井敏雄『浄土真宗寺院の建築史的研究』法政大学出版局 1997年
- 本願寺史料研究所『本願寺史』第2巻 1968年
- 本願寺史料研究所『本願寺年表』1981年

## V 参考資料

1次調査の際に、創建当初またはその時期に近い御影堂に葺かれていたとみられる瓦が出土したことから、現存建物の瓦と法量を比較するために、本願寺大師堂保存修理事務所（京都府教育庁指導部文化財保護課）よりお借りして、実測・拓影・写真撮影を行ったものである。

軒丸瓦（図 69） 1～3は御影堂に葺かれていた瓦である。1は凹面に布目圧痕、吊紐痕が残り、瓦当部を接合した時に工具を使用してなでた痕跡が認められた。玉縁近くに径約2cmの釘孔が開けられている。丸瓦の中央附近凸面に星形の刻印が押されている。珠文は18個、巴の頭は扁平で、尾は繋がって周縁のようになっている。2は1と同様の作られ方をしているが、刻印がなく、丸瓦部も4cm程長い。玉縁と釘孔の間に、水切りがヘラ描きされていた。珠文は18個で、巴の頭は楕円状になり、尾は他の部分とくつつく。粘土が十分に充填されなかった尾の一部が、傷のように欠けている。3は凹面に7本単位の横方向の櫛描きが3箇所に行われていた。釘孔と玉縁の間に、ヘラ描きの水切りと「文化七庚午年御修理／御用瓦師森田平兵衛」の刻印が押されている。珠文は16個、巴の頭は丸く大きく、尾はくつつかない。瓦当面にひび割れが生じている。1・2は寛永13年頃、3は文化7年に作られた。

軒平瓦（図 70） 4は1と同じ刻印を瓦当面向かって右側に押されている。蓮とみられる中心飾りに主葉と子葉が配された、唐草文軒平瓦である。5は凸面中央に3と同じ「文化庚午七年」の刻印を持つ。4と同様な瓦当文様であるが、4に比べて線が細く、簡略化された印象を受ける。顎部の厚みが非常に薄く、瓦当面上部の面取り幅も狭い。4・5共に端面近くに釘孔が開けられている。何れも、御影堂の瓦である。

丸瓦（図 70） 6は御影堂、7・8は仏飯所、9・10は御影堂門に葺かれていた。6は玉縁近くの凸面に「◎」の刻印が押されていた。凹面は布目圧痕と吊紐痕が残る。7・8は凹面に布目圧痕上を棒状工具で調整する。7の凸面中央附近に「○」に「×」の刻印がある。9・10は凹面に布目圧痕をナデ消した痕跡が残る。各凸面に刻印が押されており、9は8弁の菊花文、10は星形文である。

1・2次調査出土瓦をこれらの瓦と比較したところ、刻印では6と同じものが2次調査の140（図 63）にあることがわかった。寛永13年頃の瓦とは、製作技法に大きな違いはみられないが、文化7年の瓦とは、凹面の調整や瓦当文様に違いが認められる。出土した軒平瓦の顎部の厚みに比べ、参考資料の顎部厚みが薄くなっており、これが技術的なものなのか、屋根瓦の軽量化が図られた結果なのかは不明である。また、軒丸瓦や丸瓦の長さや幅から、火災処理土や旧池陸部整地層出土瓦を使用した建物は、御影堂と同じくらい、または少し小振りな建物であったと想定される。

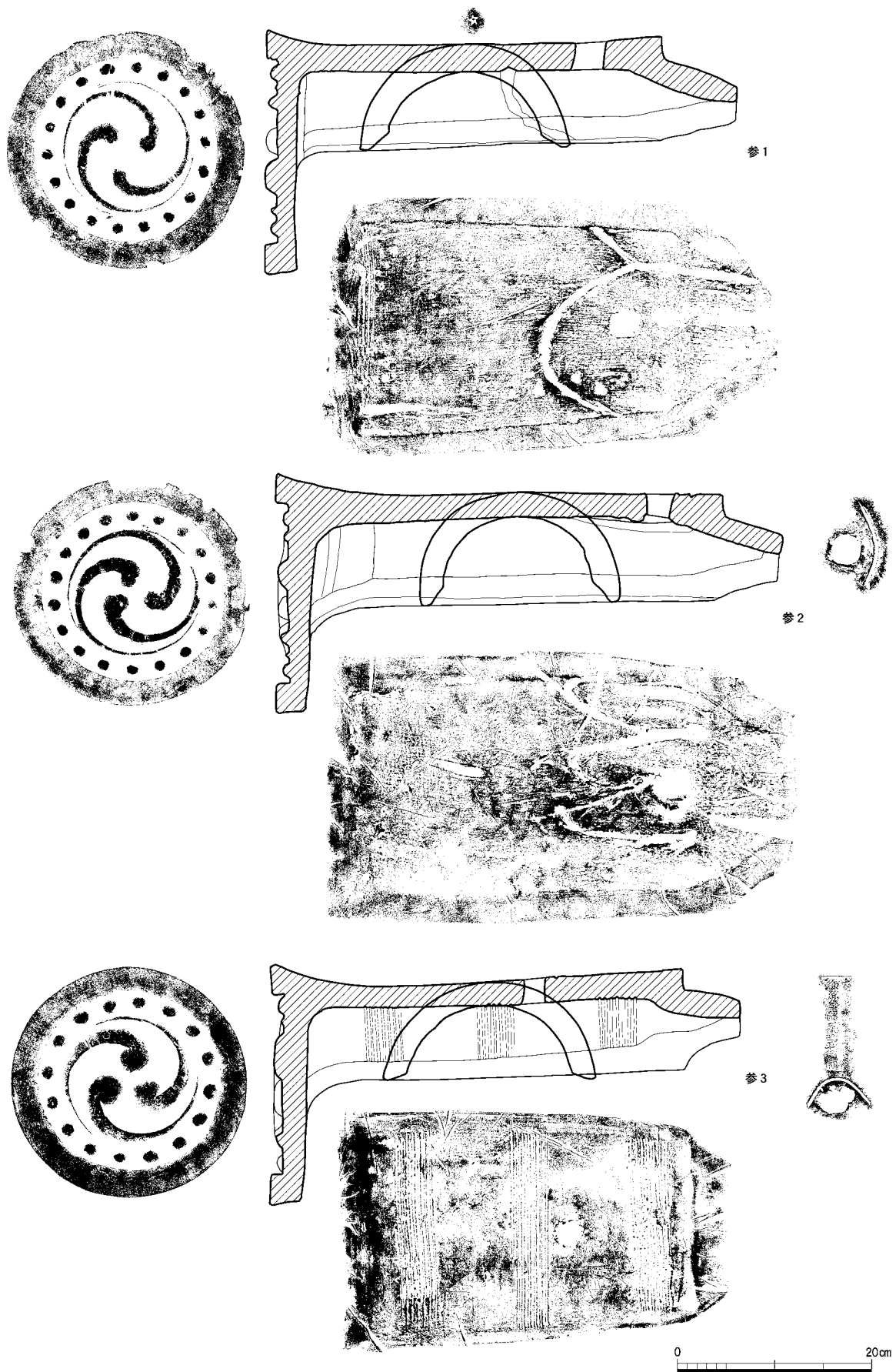


图 69 軒丸瓦拓影・実測図 (1 : 6)

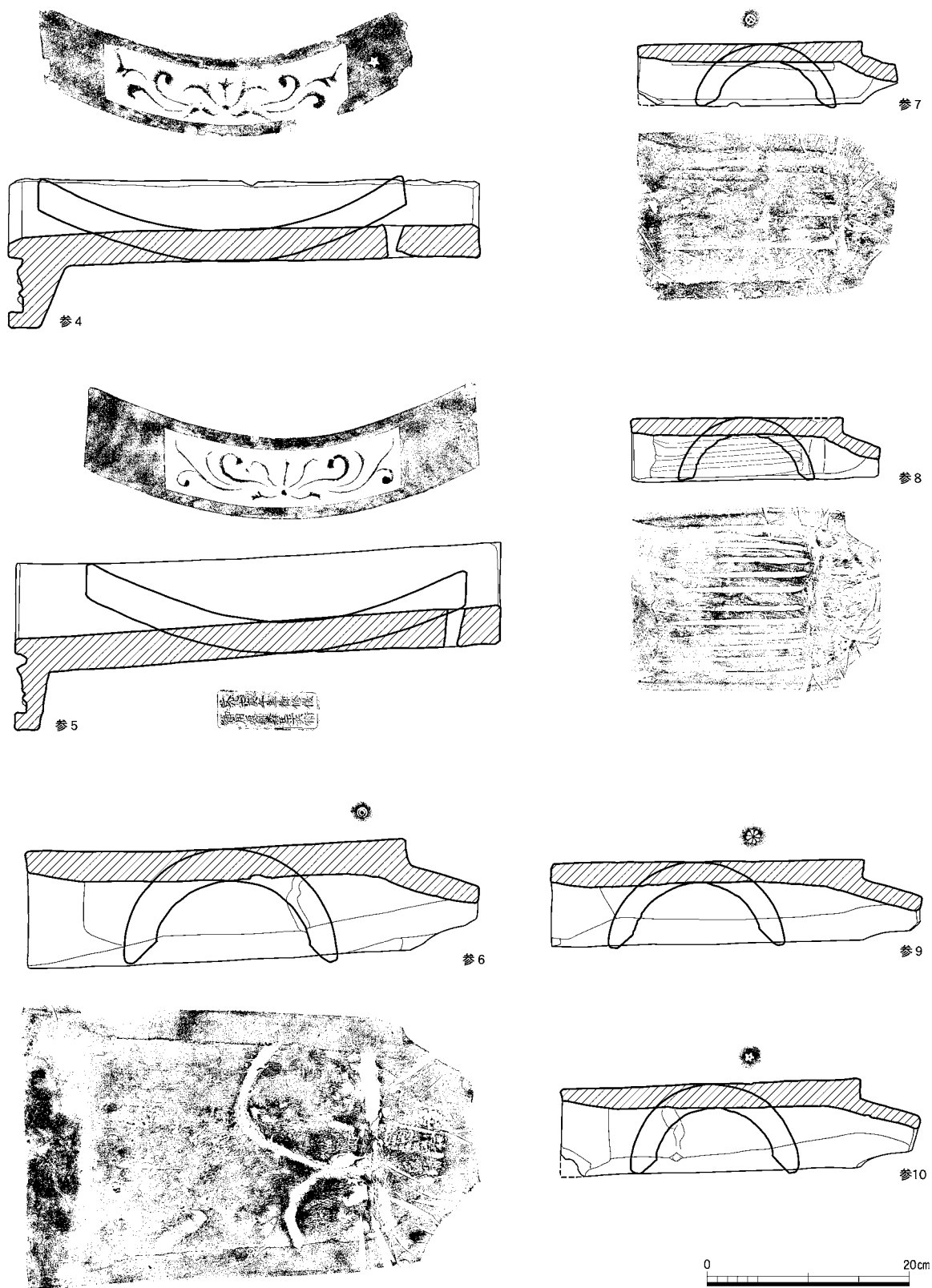


图70 軒平瓦、丸瓦拓影・实测图（1：6）

付表1 1次調査出土土器類観察表

番号	遺構	器種	器形	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	備考
1	井戸4埋土	土師器	皿	10.8	2.1	—	7.5YR7/4にぶい橙	内外面ナデ、口縁端部が一部焦げる
2	井戸4埋土	土師器	皿	11.2	1.8	4.0	10YR7/3にぶい黄橙	内外面ナデ
3	井戸4埋土	土師器	皿	12.8	1.8	6.0	10YR7/3にぶい黄橙	内外面ナデ
4	井戸4埋土	土師器	皿	13.4	1.6	5.6	10YR4/2灰黄褐	内外面ナデ、口縁端部が一部焦げる、器面が荒れている
5	井戸4埋土	土師器	皿	13.4	1.9	—	7.5YR7/4にぶい橙	内外面ナデ、口縁端部が一部焦げる、器面が荒れている
6	井戸4埋土	土師器	皿	13.6	1.8	—	10YR3/1黒褐	内外面ナデ、口縁端部が一部焦げる、器面が荒れている
7	井戸4埋土	土師器	皿	13.6	2.1	—	10YR4/1褐灰	内外面ナデ、口縁端部が一部焦げる、器面が荒れている
8	井戸4埋土	土師器	皿	13.6	2.0	7.0	7.5YR7/4にぶい橙	内外面ナデ、見込み一方向ナデ
9	井戸4埋土	土師器	皿	17.4	2.2	—	7.5YR7/4にぶい橙	内外面ナデ、見込み一方向ナデ
10	井戸4埋土	土師器	皿	18.2	2.0	—	7.5YR7/6橙	内外面ナデ
11	井戸4埋土	肥前磁器	碗	9.2	5.5	3.8	9/白	外面：柄掛け船文、鳥文、高台内「大明年製」の崩れた文字
12	整地層	施釉陶器(唐津)	鉢	—	残3.5	7.0	胎7.5Y7/1灰白 釉10YR6/2オリーブ灰	内面ナデ、外面ケズリ、削り出し高台、施釉は内面のみ灰釉
13	新池埋立土	土師器	皿	10.8	1.9	—	10YR7/4にぶい黄橙	内外面ナデ
14	新池埋立土	土師器	焼塩壺	5.6	8.9	4.0	7.5YR6/6橙	内外面ナデ、内面頸部より下部に布目あり
15	新池埋立土	土師器	焙烙	28.6	残4.4	—	10YR8/3～10YR5/2浅黄橙	内外面ナデ、外面に煤付着
16	新池埋立土	施釉陶器(唐津)	碗	—	残2.7	4.1	胎10YR6/4にぶい黄橙 釉10YR3/4暗褐	外面底部ケズリ、灰釉
17	新池埋立土	輸入磁器(青花)	碗	—	残2.9	—	9/白	内面花文、外面鳥文、口縁端部は波状、内外面が火を受けている
18	新池埋立土	焼締陶器(言楽)	擂鉢	—	残6.7	—	2.5YR6/6橙	内外面ナデ、楕目5本単位
19	新池堆積土	焼締陶器(言楽)	擂鉢	—	残8.0	12.5	内面2.5YR5/4にぶい赤褐 外面2.5YR3/3暗赤褐	内外面ナデ、楕目6本単位、内面ト半部に磨いたような使用痕がある
20	新池堆積土	土師器	皿	9.8	2.4	—	10YR7/4にぶい黄橙	外面オサエ
21	新池堆積土	土師器	皿	10.0	2.2	2.0	10YR7/4にぶい黄橙	内面底部径2cmの一方方向ナデ、外面オサエ
22	新池堆積土	土師器	皿	10.8	2.1	5.2	7.5YR8/6浅黄橙	内面工具痕跡あり、外面オサエ
23	新池堆積土	土師器	皿	11.0	1.8以上	—	10YR7/4にぶい黄橙	外面オサエ
24	新池堆積土	土師器	皿	11.0	2.1	4.6	2.5Y7/2灰黄	外面オサエ、上部に布目圧痕
25	新池堆積土	土師器	皿	11.1	2.5	—	10YR7/3にぶい黄橙	内面底部一方方向ナデ、外面オサエ
26	新池堆積土	土師器	皿	11.2	2.4	3	7.5YR7/4にぶい橙	内面底部一方方向ナデ、外面オサエ
27	新池堆積土	土師器	皿	11.2	2.3	5.6	10YR8/1浅黄橙	内面底部一方方向ナデ、外面オサエ、接地面に製作時の痕跡あり
28	新池堆積土	土師器	皿	11.8	2.2	6	10YR7/4にぶい黄橙	外面オサエ
29	新池堆積土	土師器	皿	12.2	2.2	5	7.5YR7/4にぶい橙	内面底部一方方向ナデ

番号	遺構	器種	器形	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	備考
30	新池堆積土	土師器	皿	12.4	2.4	4.9	2.5Y7/2灰黄	内面底部一方向ナデ、外面オサエ
31	新池堆積土	土師器	皿	14.8	2.3	—	10YR8/3浅黄橙	内面底部一方向ナデ、外面オサエ、製作時の工具痕跡あり
32	新池堆積土	土師器	烧塩壺	5.4	9.6	4.7	7.5YR6/4にぶい橙	内面ナデ、布の上からオサエ、粘土紐痕跡、外面ナデ
33	新池堆積土	輸入磁器(青花)	碗	11.0	残3.2	—	胎9/白	口縁端部内側を所々面取り、一部波状、鳥状文
34	新池堆積土	施釉陶器(唐津)	碗	—	残2.5	4.6	胎10YR6/4にぶい黄橙 釉7.5Y7/1灰白	削り出し高台、内外に灰釉、高台接地面から高台内にかけて釉が付着
35	新池堆積土	施釉陶器(美濃)	皿	14	2.7	8.3	胎2.5Y8/2灰白、釉10G4/1緑灰	削り出し高台、内に灰釉、口縁部内外面に緑釉、内面ナデ、外面ケズリ
36	新池堆積土	瓦質土器	鉢	22.6	残4.5	—	10YR5/3にぶい黄褐	内面板状工具によるナデ、ミガキ、外面ナデ
37	新池堆積土	焼締陶器	壺	—	残5.6	11.6	内面10YR5/4にぶい黄褐 外面7.5YR3/3暗褐	内面同心円の当具痕、ナデ、外面ナデ、ケズリ、沈線状工具痕、 底面内部オサエ、わずかにひずむ
38	新池堆積土	焼締陶器(丹波)	擂鉢	—	残6.9	—	2.5YR4/3にぶい黄褐	内外面ナデ
39	新池堆積土	焼締陶器(丹波)	擂鉢	32.4	残11.1	—	2.5YR4/3にぶい黄褐	内外面ナデ、摺目6本単位、半円二重丸沈線が口縁直下に描かれている
40	火災処理土	土師器	皿	9.8	2.1	—	10YR4/1褐灰	内面から口縁部外面ナデ、外面オサエ、内面底部一方向ナデ
41	火災処理土	土師器	皿	11.6	2.3	—	10YR8/3浅黄橙色	内面から口縁部外面ナデ、外面下半未調整、内面底部一方向ナデ
42	火災処理土	土師器	皿	12.8	残1.9	—	10YR7/4にぶい黄橙	内外面ナデ
43	火災処理土	土師器	烧塩壺蓋	6.6	1.6	—	5YR6/4にぶい橙	内外面ナデ、蓋上部オサエ
44	火災処理土	土師器	烧塩壺	5.0	8.5	3.0	2.5YR7/4淡赤橙	内面布目痕、底近くに粘土を足す、内面口縁から外面ナデ
45	火災処理土	土師器	烧塩壺	5.8	9.1	2.4	2.5YR5/6明赤褐	内面布目痕、粘土を足す、内面口縁から外面ナデ、
46	火災処理土	施釉陶器(唐津)	碗	—	残1.9	4.0	胎10YR6/3にぶい黄橙 釉2.5YR6/3にぶい黄橙	削り出し高台、内面から外面に灰釉、内外面ナデ、胎土目4箇所
47	火災処理土	施釉陶器(唐津)	碗	—	残1.8	4.4	胎5YR6/6橙 釉7.5YR5/4にぶい褐	削り出し高台、内面から外面に灰釉、内外面ナデ、胎土目3箇所
48	火災処理土	施釉陶器(唐津)	碗	—	残1.7	4.5	胎5YR5/4にぶい赤褐 釉10Y6/1灰	削り出し高台、内面から外面に灰釉、釉の一部高台に流れる、内外面 ナデ、胎土目4箇所
49	火災処理土	施釉陶器(唐津)	碗	—	残1.9	4.5	胎7.5YR5/3にぶい褐 釉7.5Y6/1灰~7.5Y8/1灰白	削り出し高台、内面から外面に灰釉、内外面ナデ、外面下部ケズリ、 胎土目2箇所
50	火災処理土	施釉陶器(瀬戸・美濃)	碗	10.8	残3.9	—	胎2.5Y3/3暗オリーブ褐 釉7.5Y7/3灰白	下地に鉄釉、上に透明釉を流し掛ける
51	火災処理土	施釉陶器(瀬戸・美濃)	碗	—	残3.8	—	胎2.5Y6/1黄灰	灰釉
52	火災処理土	肥前陶器(唐津)	向付	—	残6.7	—	内面7.5R4/4にぶい赤 外面10YR3/3にぶい赤	内外面ナデ、外面下部ケズリ、内面に顔料?を塗布、外面胴部中央に 斜格子文
53	火災処理土	輸入磁器(青花)	碗	—	残2.0	3.5	N8/灰白	文様不明、高台内に離れ砂付着、被熱して器面が荒れている
54	火災処理土	輸入磁器(青花)	碗	—	残1.7	4.8	9/白	高台に砂付着、花文、内外外が被熱して、釉が溶解

番号	遺構	器種	器形	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	備考
55	火災処理土	瓦質土器	甕	30.6	残4.5	—	N4/灰	内外面ナデ
56	火災処理土	瓦質土器	火入れ	20.6	残5.7	—	10YR7/4にぶい黄橙	内面ナデ、外面ミガキ
57	火災処理土	焼締陶器(備前)	甕	—	残6.7	—	2.5YR3/1暗赤灰	内外面ナデ、口縁部折り曲げ
58	火災処理土	焼締陶器(備前)	甕	—	残6.8	—	10R5/6赤	内外面ナデ、口縁部折り曲げ
59	火災処理土	焼締陶器(備前)	甕	—	残12.0	—	2.5YR4/2灰赤	内外面ナデ、口縁部折り曲げ、段の部分に粘土を薄く貼り足す
60	火災処理土	焼締陶器(信楽)	播鉢	30.0	残9.7	—	2.5YR4/3にぶい赤褐	内外面ナデ、播目5本単位
61	火災処理土	焼締陶器(信楽)	播鉢	30.8	残6.2	—	7.5YR3/3暗褐	内外面ナデ、播目5本以上単位
62	火災処理土	焼締陶器(信楽)	播鉢	—	残6.7	11.2	2.5YR5/4にぶい赤褐	内外面ナデ、播目3本以上単位
63	火災処理土	焼締陶器(丹波)	播鉢	—	残5.8	—	内面10YR8/4浅黄橙 外面7.5YR5/3にぶい褐	内外面ナデ、播目5本単位
64	火災処理土	焼締陶器(丹波)	播鉢	30.8	残7.7	—	2.5Y3/3暗オリーブ褐	内外面ナデ、播目4本単位、片口あり、自然釉7.5Y7/2灰白
65	火災処理土	焼締陶器	帯	36.0	残24.6	—	5YR3/2暗赤褐	内外面ナデ
66	火災処理土	土製品	とりべ	7.7	3.1	—	胎5Y5/1灰、釉7.5R3/6暗赤	内面から口縁外面に釉が発生、内面に銅が付着
67	旧池埋立土	土師器	つぼつぼ	2.3	2.4	1.5	2.5Y8/3浅黄	内外面ナデ
68	旧池埋立土	土師器	焙烙	—	残5.2	—	10YR8/2～10YR4/2灰黄褐	内外面ナデ
69	旧池埋立土	輸入磁器(青花)	椀	—	残2.3	4.5	9/白	文様不明、高台内下部は釉剥ぎ
70	旧池埋立土	施釉陶器	椀	10.4	残6.0	—	胎2.5Y8/2灰白 釉7.5YR4/3褐、N2/黒	外面ケズリ、釉は褐釉の二度掛け
71	旧池埋立土	施釉陶器(唐津)	椀	11.0	6.7	3.8	胎2.5Y2/2灰白 釉10YR4/3にぶい黄褐 N2/黒	内面ナデ、外面下段ケズリ、削り出し高台、褐釉
72	旧池埋立土	焼締陶器(信楽)	播鉢	25.0	残8.7	—	10R4/2灰赤	内外面ナデ、播目5本単位
73	旧池埋立土	焼締陶器(信楽)	播鉢	26.6	残8.0	—	2.5Y4/4にぶい赤褐色	内外面ナデ、播目4本単位
74	旧池埋立土	焼締陶器(信楽)	播鉢	26.2	11.8	10.6	7.5YR4/2灰赤	内外面ナデ、播目5本単位、見込みに沈線2本以上
75	旧池埋立土	焼締陶器(丹波)	盤	33.0	6.3	24.6	5YR3/3暗赤褐	内外面ナデ、陶片を使用した重ね焼痕が残る
76	旧池堆積土	土師器	皿	11.7	2.2	—	2.5Y6/2灰黄	内外面ナデ
77	旧池堆積土	土師器	焼皿壺	5.6	9.8	2.8	2.5Y8/2灰白	内外面ナデ、内面頸部より下部に布目のち一部でナデ
78	旧池堆積土	施釉陶器(美濃)	皿	11.3	残1.8	—	胎5Y6/1灰、釉5Y5/4オリーブ	内外面灰釉
79	攪乱土中	弥生土器	底部	—	残3.5	2.8	2.5Y5/2暗灰黄ほか	内面ハケム、外面ナデ
80	旧池陸部整地層	弥生土器	底部	—	残2.9	6.2	10YR8/4浅黄橙	内外面ナデか
81	旧池堆積土	土師器	皿	5.2	1.1	4.0	2.5Y8/2灰白	内外面ナデ
82	旧池陸部整地層	土師器	皿	8.7	1.3	6.0	10YR7/4にぶい黄橙	内外面ナデ
83	火災処理土	土師器	皿	9.8	2.5	—	10YR4/2灰白	内外面ナデ
84	火災処理土	土師器	皿	12.6	2.3	8.0	10YR7/4にぶい黄橙	内外面ナデ

番号	遺構	器種	器形	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	備考
85	攪乱土中	土師器	高杯	脚直径5.6	残7.3	脚孔径3.5	7.5YR7/6橙	内面ナデ、脚部を8面に削る、裾部ナデ
86	新池埋立土	白色土器	高杯	脚直径3.1	残6.8	脚孔径1.6	2.5Y8/2灰白	内面ナデ、脚部を約17面に削る
87	旧池埋立土	土師器	甕	17.8	残4.0	—	10YR7/4にぶい黄橙	内外面ナデ、口縁内部ハケメ
88	火災処理土	須恵器	杯身	—	残4.3	8.6	N6/灰	内外面ナデ、貼り付け高台
89	新池陸部整地層	須恵器	蓋	13.2	0.9	蓋径10.4	N6/灰	ナデ、上部はケズリ後ナデ
90	旧池埋立土	須恵器	蓋	—	残1.9	—	胎10YR4/2にぶい黄橙	内外面ナデ、自然釉5Y5/2灰オリーブ
91	井戸7埋土	施釉陶器(古瀬戸)	皿	—	残1.4	8.0	胎N6/灰、 釉5GY6/1オリーブ灰	内外に施釉、外面ナデ、回転ヘラ切り
92	旧池埋立土	灰釉陶器	碗	14.0	残3.7	—	2.5Y6/1黄灰ほか	内外面 釉発生、外面に葉状植物が付着していた痕跡が残る
93	新池埋立土	緑釉陶器	碗	—	残1.5	6.2	胎5Y6/1灰 釉7.5Y5/2灰オリーブ	内面ナデ、外面ケズリ、盤状の削り出し高台、糸切り痕残る、 高台内面から外面緑釉、内面に重ねね焼の痕跡あり
94	火災処理土	緑釉陶器	碗	—	残2.0	8.0	胎5GY5/1オリーブ灰 釉10Y4/2オリーブ灰	内外面緑釉、接地面から高台内に薄く釉が付着
95	新池埋立土	緑釉陶器	碗	—	残3.3	8.8	胎5Y6/2灰オリーブ	内面から高台内まで緑釉、7.5Y4/3暗オリーブ
96	攪乱土中	緑釉陶器	皿	—	残2.5	4.2	胎N6/灰	内外面ナデ、底部糸切り、底面以外に施釉10Y5/2オリーブ灰
97	火災処理土	瓦器	碗	—	残3.4	—	N4/灰	内面ナデのち暗文、外面上部ナデ、外面下部オサエ
98	火災処理土	瓦質土器	羽釜	—	残3.2	—	2.5Y4/1黄灰～2.5YR5/3黄褐	内外面ナデ、突帯は貼り付け
99	旧池埋立土	焼締陶器	甕	—	残4.6	—	内面釉5YR4/4暗オリーブ 外面7.5YR3/2暗オリーブ	内外面ナデ、口縁部内面自然釉
100	旧池陸部整地層	白磁	碗	12.0	残3.2	—	胎N9/白 釉5GY7/1明オリーブ灰	口縁端部内外面は釉剥ぎ
101	整地層	白磁	皿	11.0	3.1	5.0	胎N9/白、釉7.5Y8/2灰白	削り出し高台、釉葉が底部接地面の一部に行着
102	火災処理土	白磁	碗	—	残1.9	4.8	胎N9/白、釉7.5Y7/1灰	削り出し高台、見込み細描文
103	旧池堆積土	青磁	皿	11.8	2.3	7.3	胎N9/白、釉10GY7/1明緑灰	外面ケズリ、内面から外面施釉、高台外面を釉剥ぎ
104	旧池埋立土	青磁	碗	7.8	残2.1	—	7.5GY7/1暗オリーブ灰	内外面施釉、鈷蓮弁文
105	新池堆積土	青磁	碗	—	残3.0	4.8	外面高台内7.5YR5/6明褐 胎2.5Y7/1灰白 釉7.5Y5/3灰オリーブ	内面ナデ、外面ケズリ、削り出し高台、内面は疵の目釉剥ぎ、 櫛状工具による線描文



付表2 1次調査出土瓦類観察表

番号	遺構	種類	文様	高さ(cm)	長さ(cm)	幅(cm)	胎土	備考
106	火災処理土	軒丸瓦	三巴文	残12.1	残16.1	19.0	やや粗	凸面縦ケズリ、凹面鉄線引き、珠文10個以上、瓦当を離すときにずれている
107	火災処理土	軒丸瓦	三巴文	残12.3	残9.2	18.6	粗	凸面縦ケズリ、瓦当上面横ケズリ、凹面鉄線引き、瓦当裏面ナデ、ケズリ、珠文7個以上、「丁」字反転?の刻印、焼け瓦
108	旧池埋立土	軒丸瓦	三巴文	残9.3	残3.1	19.2	密	ケズリ、珠文10個以上
109	旧池埋立土	軒丸瓦	三巴文	18.5	残9.5	—	密	凸面縦ケズリ、側面横ケズリ、凹面鉄線引き、瓦当裏ナデ、珠文17個
110	火災処理土	軒丸瓦	三巴文	17.3	残7.6	—	やや粗	凸面縦ケズリ、側面横ケズリ、瓦当裏面上下ケズリ、接合部に近いところはナデ、瓦当面に離れ砂、珠文16個(1個欠)、凹面鉄線引き、焼け瓦
111	火災処理土	軒丸瓦	三巴文	残9.5	残2.0	残14.4	やや粗	側面横ケズリ、瓦当裏面上下ケズリ、周縁ナデ、珠文2個以上、焼け瓦
112	旧池陸部整地層	軒丸瓦	三巴文	残12.5	残2.9	残10.8	やや粗	側面横ケズリ、瓦当裏面ナデ、珠文8個以上
113	火災処理土	軒丸瓦	三巴文	15.0	残3.6	—	密	凸面縦ケズリ、側面横ケズリ、瓦当裏面上下ケズリ、接合部に近いところはナデ、切り込み入れて接合、瓦当面に離れ砂、珠文16個以上、焼け瓦
114	旧池埋立土	軒丸瓦	三巴文	14.4	残8.7	—	密	凸面縦ケズリ、側面横ケズリ、瓦当裏面ナデ、珠文14個以上
115	旧池埋立土	軒丸瓦	三巴文	14.2	残3.4	—	やや粗	上面縦ケズリ、側面横ナデ、珠文15個、接合部瓦当側に刻み目
116	火災処理土	軒平瓦	唐草文	6.5	残5.5	残17.4	やや粗	瓦当裏面横ケズリ、瓦当面に布目痕あり、二次被熱
117	火災処理土	軒平瓦	唐草文	6.4	残8.3	残11.8	粗	横ケズリ、凹面布目のちケズリ、瓦当部と丸瓦部の境目は横ケズリ
118	火災処理土	軒平瓦	唐草文	6.1	残5.9	残9.8	やや粗	凹面縦ケズリ、瓦当面に布目痕あり
119	火災処理土	軒平瓦	唐草文	残4.6	残4.4	残9.2	密	横ケズリ
120	火災処理土	軒平瓦	唐草文	残3.0	残3.0	残12.4	粗	横ケズリ、上部接合部で剥離
121	火災処理土	軒平瓦	唐草文	6.0	残4.7	残12.0	密	横ケズリ、凹面途中から縦ケズリ
122	旧池堆積土	軒平瓦	唐草文	5.0	残3.5	残9.2	密	凹面縦ケズリ、その他横ケズリ
123	火災処理土	軒平瓦	唐草文	3.6	残3.5	残4.2	粗	凹面縦のち横ケズリ、二次被熱
124	火災処理土	軒平瓦	唐草文	5.9	残12.5	残13.2	密	横ケズリ、凹面周縁以外は縦ケズリ、焼け土付着、焼け瓦
125	旧池埋立土	軒平瓦	唐草文	4.5	残3.5	残11.0	密	凹面瓦当近く横ケズリ、縦ケズリ、凸面横ケズリ
126	旧池埋立土	軒平瓦	唐草文	6.3	残15.6	残14.0	密	縦ケズリ、瓦当裏面横ケズリ
127	旧池埋立土	軒平瓦	唐草文	5.5	残3.0	残17.0	密	凸面縦ケズリ、その他横ケズリ
128	新池堆積土	獅子口瓦	三巴文	26.0	24.1	32.0	密	上面縦ケズリ、側面縦・横ケズリ、裏面粗いケズリ、丸瓦と突帯は貼り付け後周辺を丁寧になでる
129	旧池埋立土	獅子口瓦	三巴文	残14.0	2.9	残18.2	やや粗	瓦当接合部はナデ、その他はケズリ、裏面粗い縦ケズリ、瓦当と本体は別造り、巴の中心に孔あり、珠文13個
130	火災処理土	道具瓦	五七桐文	残24.8	厚さ(把手込み)10.2	24.2	やや粗	表面ナデ、棒状工具で細部調整、裏面粗いケズリ、把手はケズリで調整、接合部付近はナデ
131	火災処理土	道具瓦	弧状線刻文	厚さ4.0	残14.0	残9.0	密	表面ナデに近いケズリ、弧状線刻、側面横ケズリ、裏面粗いケズリ、燻し銀

番号	遺構	種類	文様	高さ(cm)	長さ(cm)	幅(cm)	色調	胎土	備考
132	火災処理土	道具瓦	—	3.0	残9.8	残6.4	N2/黒~2.5Y7/3浅黄	やや粗	側面~上部上下ケズリ、凹面 布目圧痕
133	火災処理土	道具瓦	—	3.8	残17.2	残10.8	5YR6/6橙	粗	横ケズリ、凸面に焼土付着
134	新池堆積土	道具瓦	—	厚さ2.2	残14.3	残14.0	N2/黒	やや粗	ケズリ、釘孔3箇所、穴は表からあけたようである、釘孔平面形態長方形
135	新池堆積土	埴	—	4.0	26.4	残13.5	N2/黒	粗	ケズリ、凹面以外すべて丁寧なケズリ
136	新池堆積土	丸瓦	—	9.5	43.0	残19.2	N2/黒	粗	縦ケズリ、凹面吊り紐痕、布目、ヘラケズリ、糸切り
137	火災処理土	丸瓦	—	9.1	34.4	16.7	N2/黒	密	凸面・側面縦ケズリ、凹面布目、鉄線引き、その他横ケズリ、凸面に刻印あり
138	旧池埋立土	丸瓦	—	8.4	34.5	16.3	N2/黒	やや粗	凸面・側面縦ケズリ、その他横ケズリ、凹面鉄線引き、吊り紐痕あり
139	旧池埋立土	丸瓦	—	8.4	35.8	17.3	N2/黒	やや粗	凸面・側面縦ケズリ、その他横ケズリ、凹面鉄線引き、棒状工具によるケズリ
140	火災処理土	丸瓦	—	6.5	残15.1	12.4	凸面7.5YR7/6橙 凹面2.5YR6/4にぶい橙	粗	凸面・側面縦ケズリ、凹面布目、糸切り、その他横ケズリ、径1.4cmの釘孔あり
141	旧池堆積土	丸瓦	—	6.9	残16.1	12.7	10YR6/1褐灰	粗	凸面・側面縦ケズリ、その他横ケズリ、凹面鉄線引き
142	旧池埋立土	丸瓦	—	6.5	25.0	12.9	N2/黒	密	凸面・側面縦ケズリ、その他横ケズリ、凹面糸切り、絞り痕、布目
143	旧池陸部整地層	丸瓦	—	6.3	27.0	13.4	N2/黒	やや粗	凸面・側面縦ケズリ、その他横ケズリ、凹面糸切り、絞り痕、布目
144	火災処理土	平瓦	—	残7.0	残26.9	残15.9	5YR6/6橙	やや粗	縦ケズリ、凹面中央横ケズリ、焼け瓦
145	旧池埋立土	平瓦	—	残2.0	42.0	残17.5	N2/黒	密	凸面縦ケズリ、側面横ケズリ、端面ケズリ、下部粗いケズリ
146	旧池堆積土	平瓦	—	26.9	3.2	残19.2	N2/黒	やや粗	凸凹面縦ケズリ、凸面上部・凹面上部横ケズリ
147	整地層	軒丸瓦	巴文	残5.5	残4.6	残15.4	N2/黒	密	凸面・側面縦ケズリ、凹面上下ナデ、珠文7個以上
148	攪乱土中	軒平瓦	劔頭文	5.3	残10.0	残9.8	N4/灰	やや粗	凸面横ケズリ、凹面布目、瓦当上部布目、横ケズリ
149	旧池堆積土	平瓦	—	残2.4	残10.8	残7.6	2.5Y7/1灰白	密	凸面縦ケズリ、凹面横ケズリ、端部に「◎」の刻印あり
150	井戸6埋土	丸瓦	—	9.8	残9.8	18.8	N5/灰	密	端部周辺横ケズリ、その他縦ケズリ
151	火災処理土	丸瓦	—	—	残10.0	残7.0	10YR7/4にぶい黄橙	粗	凸面縦ケズリ、凹面横ケズリ、鉄線引き、凹面に刻印あり、焼け瓦
152	井戸4埋土	丸瓦	—	7.7	36.6	残11.6	N2/黒	やや粗	凸面・側面縦ケズリ、その他横ケズリ、凹面布目、凸面に分銅形の刻印あり
153	井戸5埋土	丸瓦	—	7.5	27.9	15.0	N3/暗灰	粗	凸面・側面縦ケズリ、その他横ケズリ、凹面鉄線引き後ナデ消す、棒状工具によるケズリ
154	井戸5埋土	丸瓦	—	7.2	28.0	14.5	N3/暗灰	やや粗	凸面・側面縦ケズリ、その他横ケズリ、凹面鉄線引き後ナデ消す、棒状工具によるケズリ
155	井戸5埋土	丸瓦	—	6.6	21.2	残10.6	N2/黒	やや粗	凸面・側面縦ケズリ、その他横ケズリ、凹面鉄線引き後ナデ消す、棒状工具によるケズリ
156	攪乱土中	平瓦	—	残存高5.5 厚さ2.9	残11.1	残19.5	N2/黒	粗	凸面・側面縦ケズリ、その他横ケズリ、凹面鉄線引き後ナデ消す、棒状工具によるケズリ

付表3 1次調査出土石製品・金属製品観察表

番号	遺構	種類	材質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	色調	備考
157	火災処理土	砥石	砂岩	残9.8	2.1	1.1	45.49	2.5X5/2暗灰黄	4面使用、短辺折損
158	旧池堆積土	硯	粘板岩	残11.3	残6.2	残1.8	175	N2/黒	裏面整形痕残る
159	新池堆積土	碁石	—	—	直径2.2	0.5	3.54	N2/黒	丁寧に研磨
160	新池堆積土	碁石	—	—	直径2.1	0.4	3.32	N2/黒	丁寧に研磨
161	新池堆積土	碁石	—	—	直径2.2	0.7	4.9	N3/暗灰	丁寧に研磨
162	新池堆積土	宝篋院塔輪部	花崗岩	—	直径7.7	残存高7.3	636	N9/白、N2/黒ほか	横方向の沈線3本彫り込む
163	火災処理土	釘	鉄製品	2.3	0.3	頭部幅0.4	0.48	—	頭L字に曲げられている、変形
164	新池堆積土	釘	鉄製品	5.2	0.5	頭部幅0.7	2.83	—	頭L字に曲げられている
165	新池堆積土	釘	鉄製品	6.5	0.5	頭部幅0.7	3.39	—	頭L字に曲げられている、変形
166	新池堆積土	釘	鉄製品	7.0	0.5	—	3.19	—	—
167	攪乱土中	飾り金具	銅製品	—	直径4.8	高さ2.5	31.2	—	6～7個の部品で構成、L字金具は固定金具か？裏側からかきめて留める
168	新池埋立土	銭貨	銅製品	—	直径2.4	0.1	2.13	—	「皇宋元寶」の模鑄銭か？

付表4 1次調査出土木製品観察表

番号	遺構	種類	材質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
169	新池堆積土	箸	スギ	25.4	最大径0.6	—	7面の面取り
170	新池堆積土	箸	スギ	22.8	最大径0.6	—	5面の面取り
171	新池堆積土	工具？	スギ	21.0	1.3	0.9	上部を鉛筆のように尖らす、下部は片面を斜めに切り落とす、中央に木釘と木釘孔(貫通していない)、下部先端に黒色物付着
172	新池堆積土	工具？	スギ	残15.0	1.1	0.9	目盛りらしきものを刻む、上部は加工している、下部は折損
173	旧池堆積土	玉	—	孔径0.1	直径1.1	0.6	算盤玉形、2方向穿孔、軸樋引き、稜部の一部が欠けている
174	新池堆積土	曲物底	スギ	残20.1	残6.2	1.7	側面に木釘が2箇所(2個ずつ)
175	新池堆積土	柄杓底	ヒノキ	7.8	2.7	0.5	—
176	旧池堆積土	建築部材	モミ	残15.4	残3.4	2.0	平坦な面に「◎」の墨書あり、他の面は欠損
177	新池堆積土	建築部材	二葉マツ	残24.9	9.9	残2.1	一列に並ぶ釘孔あり、そのうちの一つに鉄釘が残存
178	新池堆積土	建築部材	二葉マツ	41.2	11.0	1.1	鉄釘残存
179	杭列	杭	クリ	残200.0	最大幅14.4	厚さ10.6	6～8面に面取り、上の方は四角、先端は鉛筆状に尖らす、先端が潰れ、石が食い込んでいる
180	新池堆積土、板集積部	板材	モミ	56.4	12.1	0.3	両面互い違いで板の押圧痕、木釘残存、釘孔多数、表5参照
181	新池堆積土、板集積部	板材	モミ	55.0	13.4	0.4	両面互い違いで板の押圧痕、木釘残存、釘孔多数、表5参照

付表5 2次調査出土土器類観察表

番号	遺構	器種	器形	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	備考
1	建物基礎とみられる隣層	焼締陶器(備前)	甃	52.0	—	残62.6	10R4/3赤褐	内面ハケメのち工具によるナデ、外工具によるナデ、「一」「○」のへら描きと真裏に逆「C」字の刻印あり
2	石積土坑42	土師器	皿	9.3	1.8	—	10YR8/4浅黄橙	内面から口縁部外面ナデ、外面下部未調整
3	石積土坑42	土師器	皿	10.3	1.9	4.0	10YR7/4にぶい黄橙	内面から口縁部外面ナデ、外面下部未調整、器面に穿孔あり(2方向)
4	石積土坑42下層	土師器	皿	11.0	2.3	3.6	10YR8/3浅黄橙	内面から口縁部外面ナデ、外面下部未調整、所々にオサエ、灯明皿
5	石積土坑42	土師器	皿	11.8	2.4	—	2.5Y8/1灰白	内面から口縁部外面ナデ、外面下部未調整、所々にオサエ、灯明皿
6	石積土坑42下層	土師器	皿	11.9	2.3	4.5	2.5Y7/3灰黄	内外面ナデ
7	石積土坑42	土師器	皿	11.9	2.3	5.0	7.5YR7/4にぶい橙	内面から口縁部外面ナデ、外面下部未調整、所々にオサエ、灯明皿
8	石積土坑42	土師器	皿	12.1	2.2	—	10YR8/3浅黄橙	内面から口縁部外面ナデ、外面下部未調整
9	石積土坑42	土師器	皿	12.1	2.1	—	7.5YR7/4にぶい橙	内面から口縁部外面ナデ、外面下部未調整、所々にオサエ
10	石積土坑42	土師器	皿	12.1	2.2	—	7.5YR8/4浅黄橙	内面から口縁部外面ナデ、外面下部未調整、所々にオサエ、灯明皿
11	石積土坑42	施釉陶器(京・信楽)	碗	11.1	残5.3	—	胎5Y7/1灰白、釉10YR3/2黒褐	外面下部ケズリ、鉄釉
12	石積土坑42	施釉陶器(瀬戸・美濃)	皿	10.2	2.6	5.9	2.5Y7/2灰黄	口縁部内面に重ね焼きの痕跡あり、高台内に輪トチン痕あり、灰釉
13	石積土坑42中層	施釉陶器(瀬戸・美濃)	皿	11.6	残2.7	—	胎2.5Y7/2灰黄、釉10Y7オリーブ灰	外面下部ケズリ、口縁部の一部に傷が付く、灰釉
14	石積土坑42下層	施釉陶器(華南三彩)	皿	—	残1.9	8.0	胎5Y8/1灰白、釉緑	内面に沈線文、緑色釉
15	石積土坑42下層	肥前磁器	碗	10.1	5.7	4.4	N8/灰白	見込み花文、外面椰子文、動物文、高台内「年製」(前半の文字欠損)
16	石積土坑42下層	肥前磁器	碗	—	残3.0	4.3	N8/灰白	見込み花文?、圈線、外面草文、高台内に釉薬、高台に砂付着
17	石積土坑42床面	肥前磁器	碗	—	残3.1	4.2	N8/灰白	白磁、豊付に浴着痕あり
18	石積土坑42下層	焼締陶器(信楽)	插鉢	—	残5.3	—	2.5YR5/4にぶい赤褐	内外面ナデ、口縁部外面に2条の沈線あり、挿目6本単位
19	石積土坑44下層	土師器	皿	11.2	2.0	4.0	10YR8/3浅黄橙	内面から口縁部外面ナデ、外面下部オサエ
20	石積土坑44	土師器	皿	11.3	1.9	4.0	10YR8/4浅黄橙	内面から口縁部外面ナデ、外面下部未調整、見込み一方向ナデ
21	石積土坑44中層	土師器	皿	12.2	2.1	—	10YR8/3浅黄橙	内面から口縁部外面ナデ、外面下部オサエ、見込み一方向ナデ
22	石積土坑44中層	施釉陶器(京焼)	碗	—	残2.7	4.7	胎2.5Y8/2灰白、釉2.5Y8/3淡黄	外面鈍目ケズリ、削り出し高台、高台内に「栗田口」の刻印あり
23	石積土坑44	肥前磁器	碗	11.3	6.2	4.7	N8/灰白	外面草花文、岩文、圈線、高台内「宣明年製」
24	土坑43	土師器	皿	8.8	2.0	—	5YR6/6橙	内面から口縁部外面ナデ、外面下部オサエ
25	土坑43	土師器	皿	9.0	1.9	3.2	7.5YR7/4にぶい橙	内面から口縁部外面ナデ、外面下部未調整
26	土坑43	土師器	皿	11.3	2.3	—	5YR7/6橙	内面から口縁部外面ナデ、外面下部未調整、所々にオサエ
27	土坑43	土師器	皿	11.5	2.5	—	2.5Y7/3灰黄	内面から口縁部外面ナデ、外面下部未調整
28	土坑43	土師器	皿	11.9	残2.1	—	5Y4/1灰	内面から口縁部外面ナデ、外面下部未調整
29	土坑43	土師器	皿	12.0	2.0	—	7.5YR7/4にぶい橙	内面から口縁部外面ナデ、外面下部未調整
30	土坑43上層	土師器	焙烙	33.0	残4.3	—	10YR4/2灰黄褐	内面ナデ、外面未調整
31	土坑43中層	肥前磁器	碗	8.8	4.4	3.6	N8/灰白	口縁部内面に斜めに盛り、外面笹文、草文、水文、高台内「○」内に「寿」

番号	遺構	器種	器形	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	備考
32	土坑43中層	肥前磁器	碗	10.7	6.6	4.4	N8/灰白	外面梅樹文、反転「の」字連続文、連続花卉文、高台に砂付着
33	土坑43	肥前磁器	碗	9.4	5.0	3.8	N8/灰白	見込み花文、外面草花文、圈線、高台内「太明」
34	土坑43	肥前磁器	碗	11.0	7.2	4.3	胎N8/灰白、10YR7/4にぶい黄橙	外面下部ケズリ、削り出し高台、灰釉5GY7/1明オーブ灰
35	土坑43	肥前磁器	碗	10.6	5.9	3.9	N8/灰白	色絵、内面梅花文、菊花文、外面菊花文、上絵付けは取れているが痕跡が残っている
36	建物1上層整地層	土師器	皿	9.0	2.0	—	10YR8/3浅黄橙	内面から口縁部外面ナデ、外面下半未調整、灯明皿
37	建物1上層整地層	土師器	皿	10.7	2.3	—	7.5YR7/3にぶい橙	内面から口縁部外面ナデ、外面下半未調整、見込み一方向ナデ
38	建物1上層整地層	土師器	皿	10.9	2.2	4.5	7.5YR7/4にぶい橙	内面から口縁部外面ナデ、外面下半未調整、所々にオサエ
39	建物1上層整地層	土師器	皿	11.0	2.1	6.2	7.5YR7/4にぶい橙	内面から口縁部外面ナデ、外面下半未調整、所々オサエ
40	建物1上層整地層	土師器	皿	12.0	2.1	—	10YR8/3浅黄橙	内面から口縁部外面ナデ、外面下半未調整、灯明皿
41	建物1上層整地層	土師器	皿	12.0	1.9	4.5	10YR7/3にぶい黄橙	内面から口縁部外面ナデ、外面下半未調整、オサエ
42	建物1上層整地層	土師器	皿	12.1	1.9	5.3	10YR8/3浅黄橙	内面から口縁部外面ナデ、外面下半未調整、灯明皿
43	建物1上層整地層	土師器	皿	12.5	2.2	5.1	10YR7/3にぶい黄橙	内面から口縁部外面ナデ、外面下半未調整、灯明皿
44	建物1上層整地層	土師器	皿	12.8	2.2	6.5	10YR7/3にぶい黄橙	内面から口縁部外面ナデ、外面下半未調整、見込み一方向ナデ、灯明皿
45	建物1上層整地層	土師器	皿	12.9	2.0	6.4	10YR7/3にぶい黄橙	内面から口縁部外面ナデ、外面下半未調整、見込み一方向ナデ
46	建物1上層整地層	土師器	皿	19.8	2.5	7.8	7.5YR7/4にぶい橙	内面から口縁部外面ナデ、外面下半未調整、所々にオサエ
47	建物1上層整地層	土師器	焼塩壺蓋	7.2	1.6	7.2	7.5YR7/4にぶい橙	内外面ナデ、見込み・外面頂部未調整
48	建物1上層整地層	土師器	焼塩壺	5.6	9.5	4.7	7.5YR7/4にぶい橙	口縁部内外面ナデ、内面有目圧痕、外面底部未調整
49	建物1上層整地層	施釉陶器(瀬戸・美濃)	碗	11.0	残5.3	—	胎2.5Y8/2灰白、釉5YR2/1黒褐	天目形、内外面に鉄釉
50	建物1上層整地層	施釉陶器(唐津)	皿	—	残2.8	4.2	胎5YR5/6明赤褐、釉7.5YR4/2灰褐	外面上部ナデ、外面下部ケズリ、見込み錆絵、草文、削り出し高台
51	建物1上層整地層	施釉陶器(唐津)	皿	11.8	3.4	4.3	胎10YR7/2にぶい黄橙、釉5Y6/1灰	内外面ナデ、外面下部ケズリ、見込みに砂目3箇所、削り出し高台、灰釉
52	建物1上層整地層	施釉陶器(唐津)	皿	11.8	2.9	4.3	胎2.5Y8/2灰白、釉7.5Y7/1灰白	内外面ナデ、外面下部ケズリ、見込みに砂目、削り出し高台、灰釉
53	建物1上層整地層	施釉陶器(唐津)	皿	11.5	2.7	3.9	胎N8/灰白、釉5GY6/1オーブ灰	内外面ナデ、外面下部ケズリ、見込みに砂目4箇所、削り出し高台、灰釉
54	建物1上層整地層	施釉陶器(唐津)	皿	13.3	4.0	4.6	胎5YR5/6明赤褐、釉10Y6/1灰	内外面ナデ、外面下部ケズリ、見込みに砂目4箇所、削り出し高台、灰釉
55	建物1上層整地層	焼締陶器(丹波)	播鉢	36.6	18.2	14.8	2.5YR3/4暗赤褐	内面ナデ、播目6本単位、見込みは放射線状か?、外面ケズリのちナデ、指頭圧痕が明瞭に残る、口縁部外面に数本の沈線あり、片口が付く
56	建物1上層整地層	肥前磁器	碗	11.3	6.1	4.6	胎N8/灰白、釉10BG7/1明青灰	外面草花文、岩文、圈線、高台内圈線
57	建物1上層整地層	肥前磁器	碗	11.6	残6.0	—	胎N8/灰白、釉10BG7/1明青灰	外面梅樹文、圈線
58	建物1上層整地層	輸入磁器(青花)	碗	13.3	6.3	4.7	胎10YR7/6明黄褐 釉2.5GY8/1灰	見込み草花文、外面龍文、高台内に釉葉掛かる、高台一部に砂付着
59	建物1上層整地層	輸入磁器(青花)	皿	9.0	2.2	3.9	胎N8/灰白、釉10BG7/1明青灰	見込み龍文
60	建物1上層整地層	輸入磁器(青花)	皿	14.4	4.5	5.6	胎7.5Y8/1灰白、釉10GY8/1明緑灰	見込みに蕪文、蛇ノ目高台、高台から外面下部に砂が溶着
61	建物1上層整地層	瓦質土器	羽釜	15.8	残6.5	—	10YR8/3浅黄橙	内外面ナデ、内面頸部ハケメ、外面下部ケズリ、罫は貼り付け
62	建物1上層整地層	瓦質土器	便甕	48.5	残39.8	—	N5/灰	内外面工具によるナデ、外面頸部ハケメのち工具によるナデ

番号	遺構	器種	器形	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	備考
63	整地層投棄	土師器	皿	11.1	2.3	—	7.5YR8/4浅黄橙	内面から口縁部外面ナデ、外面下半未調整、所々オサエ、灯明皿
64	整地層投棄	土師器	皿	11.4	2.1	—	10YR8/4浅黄橙	内面から口縁部外面ナデ、外面下半未調整、灯明皿
65	整地層投棄	土師器	皿	11.9	2.2	5.5	7.5YR8/4浅黄橙	内面から口縁部外面ナデ、外面下半未調整、見込み中央附近がわずかに突出する、灯明皿
66	整地層投棄	土師器	皿	12.1	2.1	6.2	7.5YR8/6浅黄橙	内面から口縁部外面ナデ、外面下半未調整
67	整地層投棄	土師器	皿	12.1	2.3	—	7.5YR8/4浅黄橙	内面から口縁部外面ナデ、外面下半未調整、灯明皿
68	整地層投棄	土師器	皿	12.2	2.2	5.1	7.5YR8/3浅黄橙	内面から口縁部外面ナデ、外面下半未調整
69	整地層投棄	土師器	皿	12.2	2.3	4.1	7.5YR8/3浅黄橙	内面から口縁部外面ナデ、外面下半未調整
70	整地層投棄	土師器	皿	12.2	2.3	—	10YR8/4浅黄橙	内面から口縁部外面ナデ、外面下半未調整、所々にオサエ
71	整地層投棄	土師器	皿	12.2	2.3	4.4	7.5YR8/4浅黄橙	内面から口縁部外面ナデ、外面下半未調整、見込み中央がわずかに突出する
72	整地層投棄	土師器	皿	12.2	2.4	5.3	7.5YR7/4にぶい橙	内面から口縁部外面ナデ、外面下半未調整
73	整地層投棄	土師器	皿	12.3	2.0	—	7.5YR8/4浅黄橙	内外面ナデ、底面未調整、灯明皿
74	整地層投棄	土師器	皿	12.3	2.2	7.4	10YR7/3にぶい黄橙	内面から口縁部外面ナデ、外面下半未調整、所々にオサエ
75	整地層投棄	土師器	皿	12.3	2.4	5.6	7.5YR8/3浅黄橙	内面から口縁部外面ナデ、外面下半未調整
76	整地層投棄	土師器	皿	12.4	1.8	8.7	7.5YR8/4浅黄橙	内面から口縁部外面ナデ、外面下半未調整、灯明皿
77	整地層投棄	土師器	皿	12.4	2.2	3.9	7.5YR7/3にぶい橙	内面から口縁部外面ナデ、外面下半未調整、見込み中央がわずかに突出する
78	整地層投棄	土師器	皿	12.5	2.1	6.4	10YR8/3浅黄橙	内面から口縁部外面ナデ、外面下半斜め方向のハケメのちナデ、所々でオサエ、灯明皿
79	整地層投棄	土師器	皿	12.5	2.3	—	10YR8/4浅黄橙	内面ナデ、外面ハケメのちナデ、底面未調整
80	整地層投棄	土師器	皿	12.6	2.3	—	7.5YR8/4浅黄橙	内面から口縁部外面ナデ、外面下半未調整、所々にオサエ
81	整地層投棄	土師器	皿	12.7	2.3	—	10YR8/3浅黄橙	内面から口縁部外面ナデ、外面下半未調整、灯明皿
82	整地層投棄	土師器	皿	12.7	2.3	—	10YR8/3浅黄橙	内面から口縁部外面ナデ、外面下半未調整、灯明皿、内面口縁部に穿孔途中の径約2mmの窪みあり
83	新池埋立土	土師器	皿	10.1	2.1	—	7.5YR8/6浅黄橙	内面から口縁部外面ナデ、外面下半未調整、所々でオサエ、灯明皿
84	新池埋立土	土師器	皿	11.4	2.2	4.3	10YR8/4浅黄橙	内面から口縁部外面ナデ、外面下半オサエ、灯明皿、口縁端部が焦げている、外面からの穿孔あり(一方向)
85	新池埋立土	土師器	皿	12.0	2.2	5.0	10YR8/3浅黄橙	内面から口縁部外面ナデ、外面下半未調整、所々でオサエ、灯明皿
86	新池埋立土	土師器	皿	12.1	2.5	—	10YR7/4にぶい黄橙	内面から口縁部外面ナデ、外面下半未調整、所々でオサエ、灯明皿、口縁端部が焦げている、見込み一方向ナデ
87	新池埋立土	土師器	皿	12.3	2.0	5.4	7.5YR7/3にぶい橙	内面から口縁部外面ナデ、外面下半オサエ、底面未調整、下部に外面からの穿孔あり(一方向)、灯明皿、口縁端部が焦げている

番号	遺構	器種	器形	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	備考
88	新池埋立土	土師器	皿	12.5	2.3	—	10YR8/4浅黄橙	内面ハケメのちナデ、口縁部外面ナデ、外面下部未調整
89	新池埋立土	土師器	皿	12.6	2.3	—	10YR8/4浅黄橙	内面から口縁部外面ナデ、内面の一部にハケメ、外面下部未調整
90	新池埋立土	輸入磁器(青花)	碗	10.6	5.3	3.7	N8/灰白	内面鳥文、雲流文、外面圈線、高台内「口」内に4文字
91	新池埋立土	肥前磁器	碗	11.3	6.8	4.6	N8/灰白	口縁端部内面顔歯文、外面草花文、圈線、内外面失透している
92	新池埋立土	施釉陶器(青織部)	皿	15.0	2.9	8.0	胎2.5Y8/4淡黄 釉5GY3/1暗オリーブ灰	外面ケズリ、見込みにハリ目3箇所、高台内に胎土目3箇所、緑釉、口縁端部の欠損が著しい
93	新池埋立土	瓦質土器	羽釜	21.6	残9.7	—	10YR7/3にぶい黄橙	内面胴部ハケメ、鏝は貼り付け、内面を黒色化、内外面胴部が焦げている
94	土坑58	土師器	皿	—	残1.5	—	10YR8/2灰白	内面ナデ、外面ケズリ
95	土坑58	土師器	皿	—	残1.5	—	5YR6/6橙	内外面ナデ
96	土坑58	土師器	皿	17.3	1.6	14.0	5YR6/6橙	内面から口縁部外面ナデ、底面ケズリ
97	土坑58	緑釉陶器	碗	—	残1.7	6.8	胎2.5Y8/2灰白 釉10Y6/2オリーブ灰	削り出し円盤状高台
98	井戸59	須恵器	杯	—	残2.3	12.0	N7/灰白	内外面ナデ、貼り付け高台
99	井戸59	白色土器	高杯脚	—	残12.5	12.5	2.5Y8/1灰白	外面ケズリ、約15面体に面取り、心棒作り、100と同一個体か?
100	井戸59	白色土器	高杯脚	—	残2.2	10.2	10YR8/1灰白	内外面ナデ、99と同一個体か?
101	井戸59	須恵器	鬘	—	残5.9	—	N5/灰	内外面ナデ、内面に自然釉
102	土坑112	土師器	皿	12.0	2.3	8.0	7.5YR7/6橙	内外面ナデ、内面下部オサエ
103	土坑108	土師器	皿	9.4	1.6	—	10YR7/2にぶい黄橙	内面から口縁部外面ナデ、底面未調整、灯明皿
104	石積土坑42	須恵器	杯蓋	13.8	残13.5	—	N5/灰	内外面ナデ、外面頂部ケズリ
105	新池埋立土	須恵器	円面碗	13.7	残2.9	—	N5/灰	内外面ナデ、陸部が磨かれたように平滑、下部に四角い透しあり
106	新池埋立土	須恵器	鬘	19.2	残4.1	—	N5/灰	内外面ナデ
107	新池埋立土	灰釉陶器	皿	15.6	3.1	7.8	N6/灰	内外面ナデ、底面ケズリ、貼り付け高台
108	江戸時代整地層	緑釉陶器	碗	—	残2.0	—	胎10Y5/2灰、釉7.5Y6/3オリーブ黄	内面に線刻文と縦方向の貼り付け隆帯
109	石積土坑44中層	緑釉陶器	碗	—	残1.8	6.2	胎10Y7/2灰白、釉5Y6/4オリーブ黄	削り出し円盤状高台
110	新池埋立土	緑釉陶器	碗	—	残2.3	7.2	胎N5/灰、釉7.5Y5/2灰オリーブ	削り出し蛇ノ目高台、高台の釉薬は一部削りとなっているが、ほぼ全釉
111	石積土坑44	緑釉陶器	碗	20.8	残4.3	—	胎2.5Y6/1黄灰、釉10Y6/2オリーブ灰	内外面ナデ
112	溝S5中～最下層	瓦質土器	碗	13.4	4.8	5.8	N3/暗灰	内面ナデのちミガキ・暗文、口縁部外面ナデ、貼り付け高台
113	新池埋立土	瓦質土器	碗	12.0	3.8	4.3	N2/黒	内面ナデのちミガキ・暗文、口縁部外面ナデ、貼り付け高台
114	土坑108	瓦質土器	脚付羽釜	16.0	残13.2	—	N3/暗灰	口縁部内面から外面ナデ、内面ハケメ、胴部貼り付け後ナデ
115	土坑43	輸入磁器(白磁)	合子蓋	5.5	1.8	—	胎N8/灰白 釉N8/灰白、5GY7/1明緑灰	外面頂部に草花文、側面に縦方向の多条沈線、内面ナデ、内外面に透明釉

付表6 2次調査出土瓦類観察表

番号	遺構	種類	文様	高さ(cm)	長さ(cm)	幅(cm)	色調	胎土	備考
116	土坑109	軒丸瓦	三巴文	残12.8	40.3	19	N2/黒	やや粗	凸面縦ケズリ、凹面鉄線引き、絞り痕、布目、棒状工具によるケズリ、玉縁横ケズリ 珠文3個以上
117	新池堆積土	軒丸瓦	三巴文	14.2	残8.3	—	N5/灰	やや粗	縦ケズリ、瓦当裏面ナデ、珠文16個
118	江戸時代整地層	軒丸瓦	桐文	残11.5	残14.7	残8.8	N2/黒	粗	凸面縦ケズリ、凹面鉄線引き、その他ナデ、ケズリ
119	江戸時代整地層	軒平瓦(滴水)	唐草文	4.5	残11.6	残15.2	N4/灰	粗	凸面横斜方向のケズリ、凹面・側面縦ケズリ、周縁横ケズリ、顎部接合横ナデ
120	陸部整地層	軒平瓦	唐草文	残9.2	残17.2	残24.5	N5/灰	やや粗	横ケズリ、凸面縦ナデ、側面縦ケズリ、顎部接合横ナデ、中心飾り半莪菊花文か?
121	陸部整地層	軒平瓦	唐草文	残6.2	残8.2	残13.9	N2/黒	やや粗	横ケズリ、凸面縦ケズリ
122	土坑43	軒平瓦	唐草文	残4.6	残6.1	残14.4	N2/黒	密	縦ケズリ、顎部接合横ナデ、中心飾り丁子文
123	江戸時代整地層	軒平瓦	唐草文	残4.8	残3.8	残13.2	N4/灰	密	縦ケズリ、顎部接合横ナデ、周縁横ケズリ、中心飾り丁子文
124	陸部整地層	軒平瓦	唐草文	残5.5	残4.5	残20.1	N5/灰	やや粗	縦ケズリ、顎部接合横ナデ、周縁横ケズリ、中心飾り半莪菊花文
125	新池埋立土	軒平瓦	唐草文	残6.7	残18.4	22.4	N5/灰	やや粗	凹面縦ケズリ、中央部の一部分のみ横ナデ、凸面・側面縦ケズリ、顎部接合横ナデ、 顎部・周縁横ケズリ、中心飾り宝珠文
126	土坑43	鳥衾	三巴文	残14.1	残8.8	残14.3	N2/黒	やや粗	凸面縦ケズリ、凹面荒いケズリ、瓦当裏面ナデ、珠文10個以上
127	石積土坑42下層	蓋留	鳩形	残10.0	残15.2	9.5	N2/黒	やや粗	内面指当圧痕、外面丁寧なナデ、線刻で羽毛を表現、脚は貼り付け、頭と尾は欠損
128	土坑45	棟端瓦?	—	厚さ6.7	縦残8.2	横12.9	N2/黒	粗	縦ケズリ、瓦当裏面：荒いケズリ、突帯は刻みを入れた後貼り付け
129	土坑43	熨斗瓦	—	厚さ2.8	残30.8	残23.8	N2/黒	粗	表・側面縦ケズリ、裏・端面横ケズリ、釘穴は2箇所、片側から2段穿孔したものと 使用時に急遽両面から開けたものがある、前者は直径2.0cm、後者は中心径0.5cm
130	陸部整地層	道具瓦(平)	—	7.2	残36.4	30.8	N5/灰	密	縦ケズリ、凹面横ナデ?端面は離れ砂付着、上下方向の擦痕あり
131	土坑43	輪意瓦(丸)	—	3.8	12.6	残3.9	N2/黒	密	凸面縦ケズリ、端面近くは横ケズリ、凹面鉄線引き、側面縦ケズリ
132	陸部整地層	丸瓦	—	10	残14.1	19.2	N2/黒	粗	凸面縦ケズリ、横ミガキ、凹面布目圧痕、側面縦ケズリ、玉縁横ナデ、凹面に半月形反し
133	陸部整地層	丸瓦	—	9.6	残27.2	18.7	N2/黒	密	縦ケズリ、凹面布目の縦方向から斜め方向の鉄線引き、工具痕、釘穴は最大径2.5cm ではほぼ垂直に凸面から凹面に穿孔
134	新池埋立上	軒平瓦	唐草文	残7.3	残8.3	残12.5	N5/灰	密	横ケズリ、凹面縦ケズリ、布目圧痕、顎部接合横ナデ、周縁に板目残る
135	石積土坑44	—	—	厚さ4.7	縦残9.5	横残9.2	7.5Y6/1灰	粗	表網目圧痕のちナデ、裏網目圧痕、側面縦ケズリ、孔直径約2cmで2方向穿孔
136	溝85最下層	平瓦	—	厚さ2.4	残15.3	残8.9	N2/黒	密	縦ケズリ、凹面横ケズリ
137	新池埋立土	丸瓦	—	残6.1	残18.3	残10.3	5Y6/1灰	やや粗	縦ケズリ、凹面鉄線引き、工具痕
138	建物1上層整地層	平瓦	—	厚さ3.9	残15.7	残17.0	N5/灰	密	縦ケズリ、凹面横ケズリ
139	江戸時代整地層	平瓦	—	厚さ2.3	残9.9	残6.0	N4/灰、2.5Y6/2黄灰	やや粗	縦ケズリ、凹面横ケズリ
140	土坑43	熨斗瓦	—	厚さ2.1	残19.0	残14.3	N2/黒	やや粗	丁寧なナデ、釘穴表直径1.5cm、穴裏直径0.8cm、表から二段穿孔
141	江戸時代整地層	平瓦	—	厚さ4.9	残16.9	残14.8	N4/灰	密	縦ケズリ、凹面横ケズリ
142	井戸21上段	井戸砕瓦	—	5.1 厚さ3.3	29.9	26.5	N5/灰	やや粗	横ケズリ



付表7 2次調査出土石製品・金属製品観察表

番号	遺構	種類	材質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
143	江戸時代整地層	饅頭形石製品	川原石	—	最大径3.6	高さ2.7	51.44	全体に研磨痕あり、色調は7.5Y6/1灰
144	江戸時代整地層	釘	鉄製品	6.9	1.6(頭)	0.35	10.11	釘の頭が片側に出る、一部を除き錆に覆われている
145	溝85	釘	鉄製品	7.0	1.6(頭)	0.45	13.42	釘の頭が片側に出る、一部を除き錆に覆われている、凹周に木目のわかる木質が付着
146	新池堆積土	鈴	銅製品	2.75	最大径2.2	0.05	2.83	中央で溶接、下部に工具で線状に口を開ける、紐を掛ける部分は幅0.2cmの薄い板の片側を輪にし、一方を鈴の中に入れて曲げる。中には円形の舌が入っているとみられる、銅に金メッキか？
147	上坑108・109	金具？	銅製品	10.8	7.8	最大径0.3	5.67	上から約2.0cmの位置から約1.0cm間が帯状に窪む、先端尖る、金メッキをしている
148	石積土坑42上層	金具？	銅製品	10.0	0.5	—	12.48	上部に行くほど細くなる
149	江戸時代整地層	煙管吸口	真鍮	7.0	最大径0.85	高さ2.5	6.3	金属板を丸め口付部分に環状の金具を嵌めたもの、環状金具には沈線が数条入る
150	石積土坑42下層	煙管雁首	真鍮	(2.8)	1.0(火皿)	最大径0.6	1.32	火皿下部は丸みがあり深い、脂反しは湾曲、補強体はない
151	攪乱土中	銭貨	銅製品	—	直径2.5	0.1	2.23	「祥符通寶」の模銭銭か？
152	江戸時代整地層	銭貨	銅製品	—	直径2.4	0.1	2.28	「嘉祐通寶」、真書
153	江戸時代整地層	銭貨	銅製品	—	直径2.5	0.12	3.86	「寛永通寶」、古寛永

付表8 参考資料：瓦類観察表

番号	建物	時期	種類	文様	高さ(cm)	長さ(cm)	幅(cm)	色調	胎土	備考
参1	御影堂	寛永13年頃	軒丸瓦	三巴文	25.5	49.4	—	N5/灰	密	横ナデ、凸面縦方向の粗いミガキ、凹面布目圧痕、吊紐痕、珠文18個、星形刻印が凸面にある、釘孔直径3.3cm、凸面から穿孔
参2	御影堂	不明	軒丸瓦	三巴文	25.1	53.3	—	N5/灰	密	横ナデ、凸面縦ミガキ、凹面布目圧痕、吊紐痕、珠文18個、釘孔直径3cm、凸面から穿孔のうち凹面から釘穴を調整か？ 釘孔周辺に水切りあり
参3	御影堂	文化7年	軒丸瓦	三巴文	25.0	49.4	—	N5/灰	密	横ナデ、凸面縦ミガキ、凹面縦ケズリ、横方向のカキム、珠文16個、「文化七庚午年御修理／御用瓦師森田平兵衛」の刻印が凸面にある、釘孔直径2.4cm、釘孔周辺に水切りあり
参4	御影堂	寛永13年頃	軒平瓦	唐草文	15.0	47.2	37.6	N4/灰 瓦当中央N7/灰白	密	凹面・顎部横ナデ、凸面縦ミガキ、一部横ナデ、中心飾り連か？、瓦当面向かって右に星形刻印、釘孔凹面直径2.2cm、穴凸面直径0.8cm
参5	御影堂	文化7年	軒平瓦	唐草文	16.8	48.6	40.0	N5/灰	密	凹面縦ナデ、凸面縦ミガキ、顎部横ナデ、中心飾り連か？、凸面中央に「文化七庚午年御修理／御用瓦師森田平兵衛」の刻印、釘孔凹面直径1.8cm、穴凸面直径1.2cm
参6	御影堂	寛永13年頃	丸瓦	—	13.0	45.2	21.4	N5/灰、N7/灰白	密	凸面縦ミガキ、凹面布目圧痕、吊紐痕、横ナデ、凸面に「◎」の刻印あり
参7	仏飯所	宝暦年間	丸瓦	—	6.7	26.0	14.2	N5/灰	やや粗	縦ナデ、凹面布目圧痕、棒状工具痕、凸面に「○」に「×」の刻印あり
参8	仏飯所	宝暦年間	丸瓦	—	6.4	25.0	13.8	N5/灰	密	縦ナデ、凹面布目圧痕、棒状工具痕
参9	御影堂門	正保年間	丸瓦	—	8.5	37.2	17.8	N5/灰	密	縦ヘラナデ、凹面布目圧痕、縦ナデ、凸面に8弁の菊花形刻印あり
参10	御影堂門	正保年間	丸瓦	—	9.0	36.2	17.0	凸面N5/灰 凹面N6/灰	密	縦ナデ、凹面布目圧痕、横ナデ、指頭圧痕、凸面に星形刻印あり

# 版 图



# 報 告 書 抄 録

ふりがな	しせきほんがんにけいだい・へいあんきょうさきょうしちじょうにぼうななちょうあと							
書名	史跡本願寺境内・平安京左京七条二坊七町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2008-1							
編著者名	近藤奈央							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2008年4月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しせきほんがんにけいだい 史跡本願寺境内 へいあんきょうさきょう 平安京左京 しちじょうにぼうななちょうあと 七条二坊七町跡	きょうとししもぎょうく 京都市下京区 ほりかわどおりはなやちょう 堀川通花屋町 さがるほんがんにもん 下る本願寺門 ぜんちょうちない 前町地内	26100	A702	34度 59分 31秒	135度 45分 05秒	1次調査 2007年3月 5日～2007 年6月4日  2次調査 2008年1月 17日～2008 年4月23日	240㎡      370㎡	式務部棟 新築工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
史跡本願寺境内  平安京左京 七条二坊七町跡	史跡  都城跡	平安時代	建物、井戸、溝、 土坑					
		室町時代後期 ～安土桃山時代	溝					
		安土桃山時代末 ～江戸時代前期	旧池、陸部整地層 (瓦溜め)					
		江戸時代前期	建物、柵、新池、 陸部整地層、土坑、 石垣状遺構、石列状 遺構、杭列					
		江戸時代前期 ～中期	井戸、石積土坑、土 坑					
		江戸時代後期 以降	礎石、漆喰タタキ、 井戸、敷石遺構					

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-1

史跡本願寺境内・  
平安京左京七条二坊七町跡

発行日 2008年4月30日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所  
発行 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1  
住所 〒 602-8435 TEL 075-415-0521  
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地  
〒 604-0093 TEL 075-256-0961